

地域づくり学習のフィールドワーク手引き

平成 27 年度生涯学習施設実習報告



平成 28 年 3 月

大正大学社会教育主事課程

目次

はじめに - 地域創生の教育学の構築に向けて -	3
Ⅰ 地域に根ざした学びの構築	
第1章 地域に根ざした学びを活かすファシリテーション - 住民との協働による地域計画づくりの活動から -	8
第2章 地域に根ざした学習施設「みらい館大明」 - 都市地域における閉校施設を活用した学習運営と地域づくり -	15
第3章 市民共創の文化祭から学ぶ地域づくりの学び - 生涯学習施設における市民共創型の講座づくりを契機として -	26
Ⅱ 世代間交流と学習の推進	
第4章 地域の自然と文化を生かした子育て学習 - 幼児子ども教室「大地」での実習体験から -	38
第5章 退職後の居場所づくりを契機とした学習活動による伝統文化・食・コミュニティ づくり - 八幡酒蔵工房「いまさかプロジェクト」のおやじたちから学ぶ -	49
第6章 山村の情報環境と学生参加による地域文化の保全活動と発信を通じた学びの 可能性 - 小菅村での生涯学習施設実習の経験から -	61
Ⅲ 学習成果の活用と実践	
第7章 地域の魅力発見・発信に寄与する学習活動 - 現場の人々と分かち合える学習実践を求めて -	70
第8章 栗島しおかぜ地域共生プログラムの構築研究 - 島資源を活かした学習・ ツーリズム・産品開発と首都圏連による雇用・定住促進策の検討 -	81
おわりに - 課題解決型学習を超えて、地域に寄り添い、学び、創る実践を -	104

はじめにー「地域創生の教育学」の構築に向けてー

出川真也

近年、社会教育・生涯学習においても「地域づくり」がますますクローズアップされていると言えます。そして現場での学びもより分野横断的で社会実践的なものが見られるようになってきました。こうした中で、社会教育主事をはじめ図書館司書、博物館学芸員といったこれからの社会教育・生涯学習を担う人材は、地域社会の人々とコミュニケーションを深めながらよりアクティブに活動することが求められています。

1. 地方創生と社会教育・生涯学習論

2015 年は社会教育・生涯学習を考える上で様々なターニングポイントがある年でした。3 月、教育再生実行会議第 6 次提言が出され、『「学び続ける」社会、全員参加型社会、地方創生を実現する教育の在り方について』が提起されたことは、地域活性化における生涯学習への期待が高まっていることをうかがわせるものです。さらに 12 月には中央教育審議会答申「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について」が出されました。ここでは地域づくりを視野に入れながら、学校と地域の「協働」とともに、社会教育が果たす役割が重要視されています。

いずれも社会教育・生涯学習を、いかに地域づくりと地方創生につなげ、その成果を社会実装していくかといった方向性が明確に打ち出されたものといえると考えられます。

2. 地域づくりと社会教育・生涯学習をめぐる動向

社会教育・生涯学習分野においてこうした地域づくりとの関係性を重視する論調は、古くて新しいものであるといえます。紙幅の都合上、簡単に触れるに留めますが、社会教育の中核的な機能を担った公民館設置の初期理念についてみても、昭和 21 年 7 月文部次官通牒では「常時町村民が打ち集まって談論し、読書し、生活上産業上の指導を受けお互いの交友を深める場所である」としています。「生活上産業上」とあるように、社会教育の射程は、当初から地域社会における暮らしと生業の両面を視野に入れた地域づくりの視点を持つものだったと考えられます。

その後、高度経済成長期を経るなかで、地縁的なものを想定した学びの在り方が変容しました。そして当初の構想よりも趣味・教養・余暇の充実化といった役割が前面に出るようになり、その機能は限定的なものとなりイメージされるようになりました。

しかし 90 年代以降、社会変革や産業振興を含む「地域づくり」にかかわる社会教育・生涯学習の研究が活発化しているように思われます。それはグローバル化の進展の中、社会の急激な変化、多様な価値観、インターネット等を背景にした情報化、市民活動の伸張、従来にはなかった様々な課題の出現に対して、あらためて地域社会に目を向け、地域住民と共に参画し主体的に取り組んでいくための新たな学びが求められているからではないでしょうか。

ここでの社会教育・生涯学習の役割は、「地域づくり」そのものよりも、より本質的な役割を担っているように見えます。それは地域をつくりだす力を地域社会にいかにして創出

していくか、とりわけそのプロセスにかかわる学びとでも言うるものです¹。

こうした昨今の状況を踏まえたとき、今後社会教育・生涯学習に携わる者の役割とはどのようなものと考えられるでしょうか。

3. コミュニティオーガニゼーションと学びにかかわる支援者・実践者の立ち位置

地域づくり活動においてはその推進のための「組織化」の過程が必要です。欧米では早くも 70 年代以降、この地域の組織化（コミュニティオーガニゼーション）の過程について理論的構築と類型的整理が試みられています。よく知られた代表的なコミュニティオーガニゼーション類型として次の 3 つのモデルがあげることができるようです²。

①小地域開発モデル

地域社会の問題解決へ向けて住民の参加を強調するなど「プロセス志向」。

②社会計画モデル

個々の社会問題の解決を優先課題とする「課題志向」。

③ソーシャル・アクション・モデル

地域の弱い立場の人々、声が届かない人々に光を当て社会変革を目指す「実践」を重視。

地域づくりに関心を持つ社会教育・生涯学習に携わる専門家は上記類型でいけば、これまで①小地域開発モデル（プロセス志向）や②社会計画モデル（課題志向）において「支援者」としてかかわることが多かったし、また望ましいとされてきたのではないかと思います。一方で近年③ソーシャル・アクション・モデルにみられるように、住民と共に「実践者」として取り組むタイプの専門家が求められるといった状況が現出しています³。

4. 社会教育・生涯学習における参加と実践

社会教育・生涯学習に携わる者として、この「支援」と「実践」をめぐる狭間でどのような立場をとるのかという問題は、支援的な立場をとる「社会教育行政」と「国民の自己教育運動」の実践当事者の立場との間をめぐる矛盾の問題とも通底するものとも思えます。そしてこの矛盾は社会教育職員に象徴的に顕われることも指摘されているところです⁴。

今後、地方創生の時代において、特に地域政策、産業・経済、労働・雇用といった問題と密接な関係を持つ「地域づくり」（＝社会変革）⁵とかわる社会教育・生涯学習の学習支援・実践者がどのような立ち位置を確保しうるのか、地域の学習者と共に多様な模索を積み重

¹ 高橋満 2003p.16 を参考。高橋は自身の実践の力点を『地域づくり』ではなくて、『地域をつくる力』を地域社会につくることにおかれる」としている。

² 3 類型モデルの説明については横山壽一他 2011p.103-106 を参考。

³ 関連して E.ハミルトン 1992 は、地域づくりの支援類型として「技術援助」「自助努力」「闘争」といった 3 つの類型をあげ、その特徴と行政当局との関係性について分析している。

⁴ 松橋 2015p.124 参照。また、津田 2015p.15 も社会教育・生涯学習研究における実践と研究をめぐる緊張関係について指摘している。

⁵ ここでの地域づくりの意味は、地域を変えるイノベーション創出であり、さらに地域の社会・政治・経済的な抜本的な変更をも志向した社会変革とでも言い換えることができるだろう

ねることが急務となっているといえるでしょう⁶。「多様な」というのはまさに社会教育を指すにふさわしいものといえるものです。私達はこれを単に領域曖昧性といったマイナスの閉塞状況に陥らせるのではなく⁷、これを「よすが」として、地域の多様な生き生きとした取り組みに参画し、地域住民と共に自律を促しながら、理論と実践の両面から「地域づくり＝社会変革」のための具体的で創造的な力を育てることに寄与していくこと、すなわち「地域創生の教育学」（出川 2015）へと育てていくことが、今、求められているのではないのでしょうか⁸。

5. 社会教育・生涯学習の現代的使命を見据えて - フィールドでの学びの深化を -

以上の認識に立って 2015 年度の生涯学習施設実習は「地域づくりにかかわる社会教育・生涯学習」をテーマに掲げて、全国 8 か所でフィールドワークによる研修、体験実習、調査研究、それらを踏まえた試行実践活動を行いました。従来の行政運営の社会教育施設に限らず、NPO 等地域団体、事業者、地縁組織を含めた多様な現場が対象となっています。

本書は、各取組の報告を取りまとめたものであり、受講学生達が地域の最新の活動の中で直面した様々な悩み、苦労、喜びや感動を交えた、フィールドでの学びの手引書です。本書が、今後、躍動する地域での取組みを志向する学生活動者達の学びの深化につながることを願っています。

参考文献

- 高橋満「社会教育の現代的実践－学びを作るコラボレーション－」創風社,2003
- 横山壽一他「社会福祉教育におけるソーシャル・アクションの位置付けと教育効果」金沢電子出版,2011
- 松橋義樹「社会教育・生涯学習の制度研究」（津田英二他編著「社会教育・生涯学習研究のすすめ」学文社,2015）
- 久井英輔「転形期の社会教育・生涯学習研究」（津田英二他編著,前掲書）
- 笹井宏益・中村香著「生涯学習のイノベーション」玉川大学出版部,2013
- 植村勝彦「環境保全問題へのコミュニティの寄与」（コミュニティ心理学研究第 17 巻 2 号 p.111－130）2014
- 出川真也「大正大学知のナビゲーター」<http://www.tais.ac.jp/chinavi/result/no-0135/>（2016.3.25 閲覧）
- Edwin Hamilton, *Adult Education for Community Development, Contributions to the Study of Education*, 1992

⁶ ハミルトン 1992 は段階的自立法を提示し、地域づくりの段階に応じてどのような学習を設定すべきか、そのモデルを示している。このモデルの最終段階である「波及的展開」（学習によって生み出された活動が現実社会に多様な形で展開していく段階とでもいえようか）の内容を豊かにしていくことが今求められているのである。

⁷ 笹井宏益・中村香 2013p.63 でも、社会教育の不明確な定義に触れ、そのメリットとデメリットについて指摘している。また久井英輔 2015p.218 も研究面において領域や専門性の「曖昧さ」と「雑種性」が持つ強みと弱みを吐露している。実践と研究の両方で問題と可能性の表裏をなすものだと実感される。

⁸ コミュニティ心理学においても地域づくり＝社会変革への志向性が高まっているようだ。植村 2014p.126 は、コミュニティの質を高める方向に向けた変革のためにより積極的に参加し、その形成に関与すべきであるといった海外研究者の言葉を積極的に紹介している。

I 地域に根差した学びの構築

【研修地：神奈川県秦野市上地区】 報告：出川真也 土屋佳穂 山本翔平 小池尚徳
内田歩実 佐原多恵 土方優紀

第1章 地域に根ざした学びを活かすファシリテーション

- 住民との協働による地域計画づくりの活動から -

キーワード ファシリテーション 参加協働の地域調査 「たっしやもん」 都市近郊



地域住民との現地調査（左）とグループごとに結果を取りまとめている様子（右）

研修概要

地域づくりにかかわる生涯学習実習をおこなうにあたって、共通の知見・手法を研修するために、神奈川県秦野市上（かみ）地区においてファシリテーション研修を行いました。

同地区は、丹沢大山の山麓、秦野盆地に位置する牧歌的な田園地域である反面、農業振興地域内にあり、市街化を進めることができないため徐々に人口は減少していることが課題となっています。

本研修では、同地区において、秦野市役所や地域協議会、中央大学理工学部の学生達と共に、生物多様性と地域活性化、人口対策（子育て支援の里）の3つの視点から地域住民と調査・学習活動を通じたファシリテーション実習を行いました。

研修の流れ

地元住民や行政関係者を交えて、市や地区の基本説明を受け、大学教員より調査やまとめ方の基本的な手法を学びました。その後、住民と共に地域調査を行い、その結果を取りまとめ、地域づくり企画案を作成して発表し、意見交換しました。

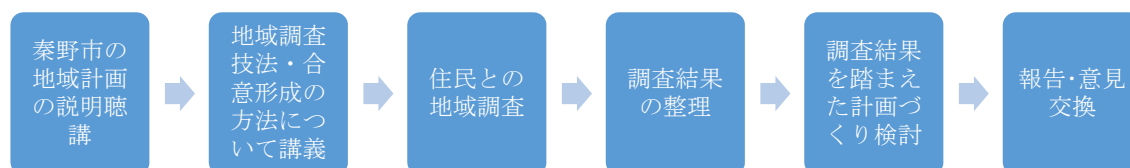


図1：研修のプロセス

1. 地域を多角的に見るために - 地域の特徴と人のかかわりを知る -

研修初日には、秦野市役所の担当者、地区担当者、そして今回共に取り組みをおこなった中央大学の兼任講師（東京農業大学学術研究員）の竹田純一先生から地区の概況や調査手法について説明を受けました。次のような内容です。

（1）里山保全と生きものの里の取り組み

上地区では、豊かな里山と水環境を活かした取り組みを長年にわたって続けています。その一つが里山保全活動です。市もバックアップをしており、かつて葉タバコ栽培を支えていた良好な里山環境を再生・保全していこうとしています。市には 30 団体以上の里山保全関連の団体があり協議会（「はだの里山保全再生活動団体等連絡協議会」）を結成しています。上地区においても加盟団体が活動を続けています。

生きものの里の活動も注目されます。秦野市では、希少で貴重な野生の生き物が成育あるいは生息している谷戸田や湧水地を「生き物の里」として指定しています。上地区にある柳川生き物の里はその 1 号指定地（平成 14 年 3 月）となっています。エリア内には主な生き物 イモリ、ホトケドジョウ、シュレーゲルアオガエル、ゲンジボタルが生息しています。私たちが訪れた際にもツバメが餌を求めて飛び回っている光景を目にすることができました。これまで住民と外部からの参加者による保全活動と生物多様性を活かした観覧会や米作りなどの各種イベントがおこなわれてきました。



写真1：生き物の里

（2）新たなインフラ整備計画への対応

地区内には新たな高速道路とそのインターチェンジの建設が進みつつあります。こうした新たなインフラの波及効果による地域活性化が期待されますが、一方で良好な地域環境をいかに保全していくかが課題です。インフラを活用した活性化と環境保全の両面で住民と行政が一体となった取り組みを検討し実践することが急務となっています。

（3）調査技法としての地元学とたっしやもんの掘り起こし

上地区では、里山や生物多様性を活かした取り組みが行われてきた一方で、人口減少、里山の手入れ不足、遊休農地の拡大、そしてインフラ整備による地区環境の改変に対する対応などの課題を抱えています。これらの課題に取り組むため、地区住民が主体となり平成 25 年に上地区活性化計画を策定しました。

この計画の実行にかかわる地域活性化活動をすすめるため、昨年度まで、竹田先生を中心とする大学関係者が協力・支援をおこないながら、地域の自然・文化・生業の知恵や技術を担う住民を対象とした調査を行いました。その際導入した手法の一つが「地元学」と呼ばれるものです。地元のことを住民と共に調べるという方法、地域で調べたことを活用していく視点、そして他の地域や分野の取り組みと関連させて考えることで新たな発想を生

むなどの発想法の考え方を導入するなど、研究と実践の双方に照準を当てた興味深い手法です。

こうした調査の結果、その価値を再認識された地域の自然・文化・生業に造詣の深い住民のことを、地区では親しみをこめて「たっしゃもん」と呼んでいます。

（４）実際の取組みを前提に多角的な視点から地域社会を考える学びを

多角的な視点から地域社会を考えることが地域に根ざした学びを促進し、地域づくりにつなげるためには大切だと思います。今回研修初日では市担当者、地区担当者、そして大学関係者の３つの視点から、現地での学習活動を進めるに当たって、これまでの実際の取組みを踏まえた上地区の現状と課題、今後の方策について理解を深めることができました。

２．フィールドワーク実習－地区の取組みを踏まえて現地調査を行う－

地区のこれまでの取組みを踏まえながら、地区の「たっしゃもん」の皆さんに協力をしていただいて、地区の自然・文化・人材資源を活かした活性化策を検討しました。

（１）現地調査－たっしゃもんを訪ねて、住民と共有できる地域情報の資料化－

住民と共に「たっしゃもん」を訪ねながら地域を実際に歩き調べる取組みをおこないました。

今回の活動に協力いただける「たっしゃもん」を紹介頂き、訪問してヒアリングすると共に活動地域を案内していただきました。

調査は里山（集落近傍の里山とやや奥まった里山）２班、集落内１班の３グループに分かれておこないました。ヒアリング内容を記録すると共に、説明いただいた地域の各種資源（道具、農産物、自然資源、文化資源など）を撮影しました。

調査の結果を資源カードと地図（写真４参照）にまとめ、地域計画や企画を検討する際に調査者・住民・行政が共に参照できる資料としました。住民との意見交換会ではこれらの資料が様々な情報を引き出したり新しいアイデアが生まれたりするきっかけとなりました。地域での学びを深め活用実践にまでつなげていく上では、参加者が調べたこと学んだことを意識化するための「見える化」のプロセスがとても大切であるということを実感しました。



写真２：たっしゃもんから説明を受ける



写真３：たっしゃもんにブドウの収穫方法を教わる

(2) 収集データと他の関連情報を交えた検討

今回、調査データと地域の資源を他の地域と結びつけるという観点から「ふるさと納税制度」の活用という観点を加えながら、企画案を作成しました。

ファシリテーターの役割は、一般的には、参加者からの意見を整理し集約するにとどまることが多いのではないかと思います。本研修でも住民、地域実践者、行政担当者など様々な属性の方々の意見や情報がだされました。しかし今回はファシリテーター役の教員が持っている関連する情報や発想（ここでは「ふるさと納税制度」）を導入することで、より具体的に活発な企画検討が行われたことが印象的でした。

地域づくりの学習を活性化するファシリテーターの役割として、地域の学習者・活動者の特徴を踏まえながら、関連する新たな要素を外から入れていくことも創造的なプロセスを生み出すことを学ぶことができました。



写真4：作成した資源カードと地図



写真5：地域の方と地図を囲んで検討する

3. 活動企画案の作成と意見交換—地域資源を活かした活性化策を住民と共に模索—

調査の結果を踏まえてグループごとに地域づくり企画を提案し、意見交換を行いました。

(1) 「鹿生体験コース—シカを食べよう—」里山グループ1

里山グループ1は、獣害の深刻な現場を目の当たりにし、獣害対策のために設置した罠にかかったシカを屠殺するといった場面にも出会いました。

その経験を基に、活動参加者がシカの生態について学び、その行動の特徴を追体験して理解を深めるとともに、捕獲と運搬を体験するという企画を作成しました。この企画にはシカ料理を食べるプログラムがセットされており、獣害対策による屠殺と命の大切さの双方を知る機会にすることをねらいとしています。

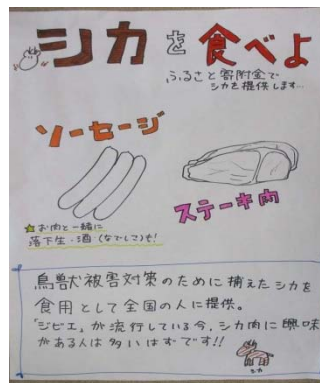


写真6：鹿生コースの提案

(2)「ハイパーBBQ プロジェクト」里山グループ2

里山グループ2は、集落近傍の里山を調査し、休耕田や荒廃地の広がりや里山の藪化などの問題を目の当たりにしました。一方で炭焼きやシイタケ栽培、竹林整備の取り組みを見ることができました。

山の幸（資源）をテーマとしたバーベキュー活動によって地域をPRするとともに、保全活動の促進や観光産業にもつなげていこうという企画を作成しました。学習、環境保全、地域文化の継承、地域活性化といった複合的な目的を相乗的に達成できる取組となるように考えられています。



写真7：ハイパーBBQの提案（左）と今回研修中に行った交流バーベキュー（右）の様子

(3)「上に泊まろうー住民と外部者の協働拠点づくり」集落グループ

集落グループは、地区内の日常的な暮らしの営みの中に、素朴な楽しみ、面白さや温かさがあることを発見しました。それら何気ない地域の暮らしの要素をプログラムとするとともに、大きな農家づくりの家屋の特徴を活かしたり、空き家といった問題を逆手にとつてゲストハウスとして外部者との交流拠点としていくことを提案しました。

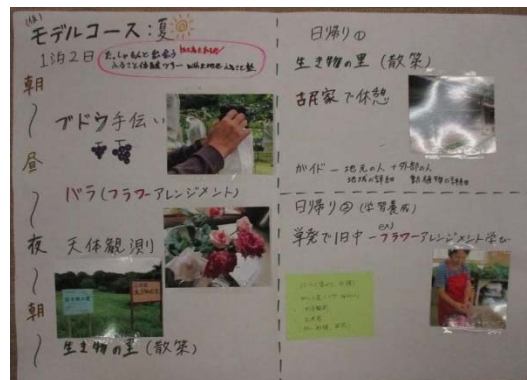
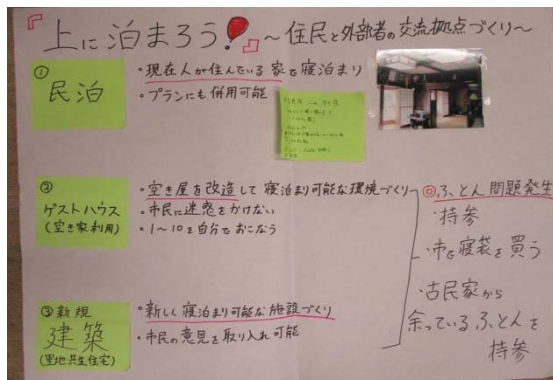


写真8：上に泊まろうの提案とそのモデルコース例

4. 地域住民との相互学習ー現地ギャップの実感と目線の違いを活かした可能性創出 -

(1) 意見交換を通じてー住民の目線と外部の目線が交差することで生まれる学びー

住民と共に調べたことに基づいて作成した地域の具体的な事物や人的資源を生かした企画案は、活発な意見交換を引き出すことになりました。私たちだけでなく地域の方々にとってもこれまでの取組を振り返り、今後どのようなことをさらに検討していけばよいのか深く考えるきっかけになったように思います。地域に根差したものを丁寧に調査し、整理分析して検討し、発表していくといった一連の作業に共に取り組むことで、相互の学習が深まります。また学習成果を活用して地域づくりに生かしていくための具体的な道筋を明確な形で模索することができるのだと思います。何よりも地域への愛着を育てていくことにもつながると思います。



写真9：意見交換会の様子

(2) 受講生たちのコメントから

フィールドでの調査は、知識・技術だけにとどまらない様々な学びがあり、感動と時には戸惑いもあります。研修を終えた受講生からのコメントをいくつか紹介したいと思います。

・小池尚徳

衝撃だったのはシカの屠殺。人生の中で見る事がほとんどない経験だと思います。目の前で命が消えていく瞬間。猟友会の人たちの仕事のすさまじさを感じました。しかし農産物を作っている人にとっては当然の営み。一方で知らない人を見るとショックを受けます。農業に携わる人のことも考えるとその間にあるギャップについて考えさせられました。そういう意味で今回、農業に関する知識がほとんど0のままで研修に参加してしまったことが反省点です。もっと事前の知識があれば農業を生業にしている人たちのことをもっと学べたのではないかと思います、その点が残念でした。

調査の手法として、写真を撮影してデータを集めるということを住民と共におこなう参加型の調査を行ったことはよい経験でした。私は社会調査士の資格取得も目指していることからこの手法に興味を持ちましたし、こうした学習活動は地域への愛着を育むものでもあると思います。

・山本翔平

上地区の活動に参画している中央大学の教員・学生メンバーとも共同で取り組んだことが貴重な経験となりました。しかし他大学の学生や先生方と行動を共にすることは、同じ現場を調べても、考えの相違が大きくあることで、少々つらいこともありました。前提の考え方がまったく違う。その人たちとどう考え、合意形成を促し、取り組みにつなげていけるかということを考えさせられました。よる遅くまで議論をしたのが思い出として残っています。

地元の皆さんとのバーベキューは楽しかったです。炭焼きのことを学び、炭の製造工程

や林業における位置づけなど聞くことができたのはよかったと思います。

地域経営という点で、大学で学んだ経営の考え方を、現実の場面で考えることができたのが有益でした。金銭の感覚も仮想的なものと現実を目の前にしたものではまったく違う面もあるのだということを実感できました。

・土屋佳穂

私は山の中にいったのはじめてで、慣れない環境で少々苦勞しました。家の造りがとにかく大きい、お茶請けがごちそうのレベルだったことも驚きました。

そして地域の方と外から入った私たちの意識の違いにも戸惑いました。私たちがすごいと思っているものを、地元の人たちは普通のものとして感じているものが多々あったこと、価値観の違いがあることを実感しました。そのことが自分たちの地域づくりの可能性をつぶしているのではないかとも思いました。

意見交換会の場では、こちらの提案と地元の提案のギャップがあることが浮き彫りになりました。それを融合していくことが難しかったです。しかしこのギャップがあるからこそ新たな可能性がそこに生まれるのだとも思います。その際ことをすすめるために大事なものはお互いの信頼関係だと思いました。しかし信頼関係の構築には長い時間がかかりますし、中々物事が前に進まないということもあります。こうしたことを乗り越え地域での実践につなげていくための様々な手法をもっと学んでいきたいと考えています。

5. 研修をおえて - 相互学習の創出と地域に根ざした実践への展開 -

秦野市上地区の研修活動では、フィールドでの学びを地域計画づくりに生かしていくことを住民と協働して行いました。社会教育・生涯学習の分野に引き寄せて言えば、それは地域に根差した学びであり、相互学習であり、学習成果を地域社会で生かしていく試みといえるのではないかと考えます。

ここで大事なことは、住民と共に学び、取り組んでいくという学習支援者としての立ち位置を踏まえながらも、地域社会持っている課題や目指す変革像を見据えて新たな要素を的確に持ち込むファシリテーターとしての力量です。

住民主体の地域づくりが叫ばれる昨今、本研修で得られた要素を様々な社会教育・生涯学習活動につなげ深めていくことが求められています。

【実習先：東京都豊島区 みらい館大明】

報告：山本翔平

第2章 地域に根ざした学習施設「みらい館大明」

ー都市地域における閉校施設を活用した学習運営と地域づくりー

キーワード：学習 地域 拠点施設 ニーズ



左：みらい館大明の校舎 右：さくらまつり（提供：みらい館大明）

【地域概要】

施設が位置する池袋大明地区は、東西南北をそれぞれ池袋駅及び劇場通り（駅近くに東京芸術劇場があり、大通りが通っています）、山手通り及び谷端川緑道、要町及び要町通り、坂下商店街及び池袋仲通り商店街と池袋幼稚園に囲まれている住宅街となっています。

【実習概要】

東京都豊島区池袋にて旧区立大明小学校の閉校校舎を活用している施設「みらい館大明」で5日間の実習を行いました。

「生涯学習施設の日常業務体験から、外からは見えにくい内部の実態を知る」「窓口業務や利用者お手伝いを通して、地域のサークル・勉強会の方々と接する機会を持つ」ため、①窓口のオープンからクローズ業務の体験、②施設内の掃除・整備、③若者支援事業「ブックカフェ」のスタッフ業務体験を実施。また、職員の方々から「社会教育・生涯学習事業と施設運営」について意見を伺うことができました。実習後、みらい館大明で開催された文化祭「大明まつり」及び大正大学学祭「鴨台祭」で一般向けの「まちづくり」情報発信ブースで発表。私は主に体験した生涯学習施設運営と地域づくりから考えたことを発表しました。

その結果、住民にとって必要性のある学習拠点づくり、ニーズと資源の有無とつながりなどの課題が浮上してきました。



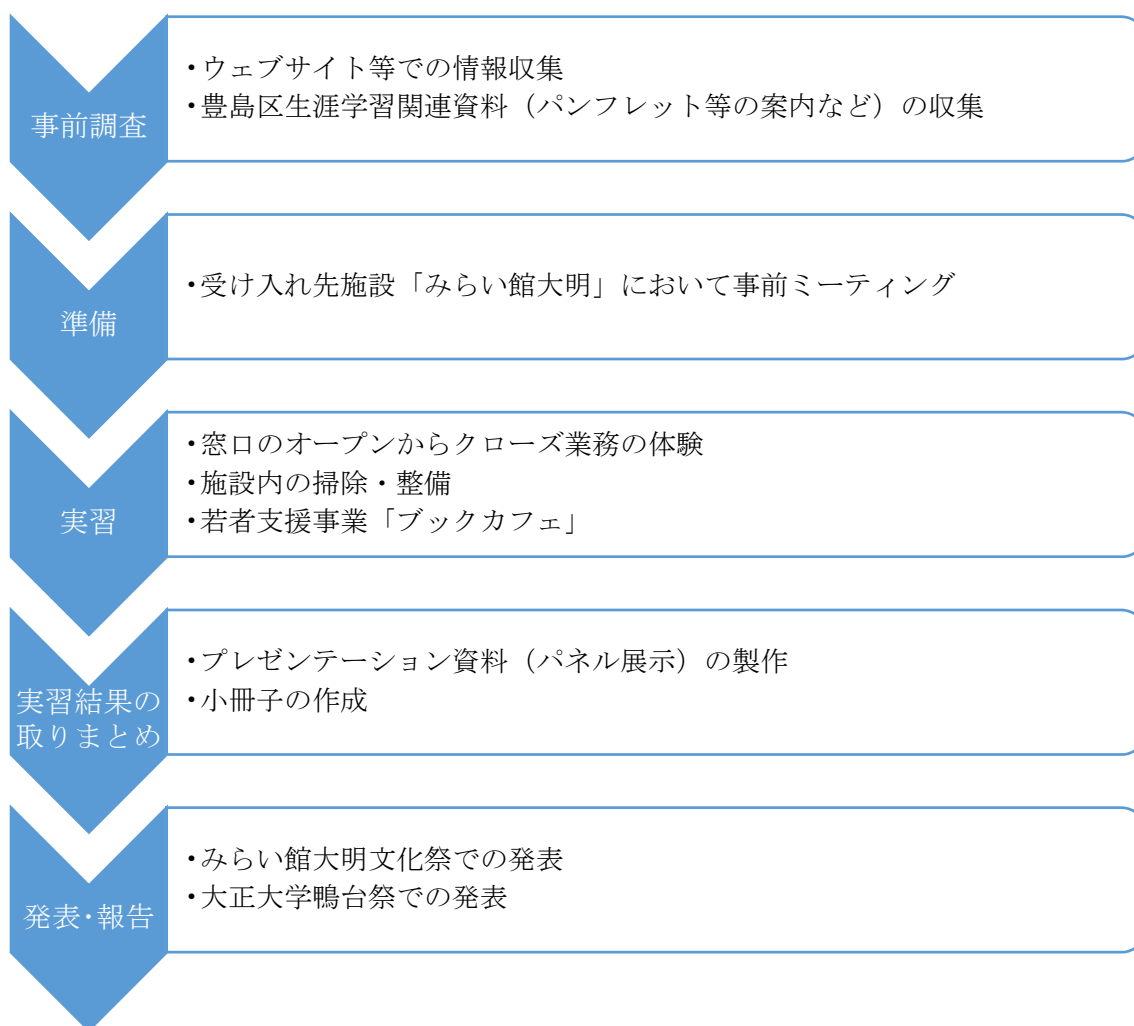
ブックカフェで開催される講演会の様子
(提供：みらい館大明)

構成要素

(1)	実習背景—地域社会を支える学びへの関心—
(2)	課題設定と事前調査
(3)	実習—施設活動の概要と実習の実践内容—
(4)	実習を通じて学んだこと
(5)	実習成果の発表と残された課題
(6)	今後の展望——生涯学習施設の可能性——

実習のプロセス

実習の大きな流れは、まず自分の学習背景を洗い出し実習先を検討、そして実習先の施設について事前検討をしました。その後実習では、施設で窓口業務、施設管理、利用者とのコミュニケーション活動などを取り組み、そこから得られた知見をもとにしてプレゼンテーションや学習拠点を中心とした生涯学習環境づくりについてさらに考えを深めるために小冊子を取りまとめました。



1. 実習背景——地域社会を支える学びへの関心——

(1) 教師志望から人々の学びへの関心へ

小学校中学年ごろまでの私はとても内向的で、積極的な発言もできませんでした。そんなとき、担任から「学級委員になってみないか」と促され、副学級委員長を務めることになりました。学級活動を委員長と共にまとめていくうちに、「自分の考えを伝えること」や「相手に説明すること」が次第にできるようになり、さらにもっとやってみたいと思うようになっていました。中学校では自らすすんで学級・学年委員長を務めるようになり、そのころから「教師への憧れ」を抱くようになりました。「教えること」を職業にしたいと考えたのです。しかし教員の話を知ったり、授業をしている姿を見たり、今までの学校生活を振り返っていきの中で、教師という職業が、自分には合っていないのではないかとこのことを感じ始めました。当時はうまく言葉にできませんでしたが、今振り返ってみるとクラスという団体を相手に教鞭を取るよりもっと個人に寄り添った教育支援を取り組みたいと考えるようになっていったのです。

(2) 地域での学習支援者を目指して

教育環境の整備や学習支援について興味を持つようになってから、それぞれが良的につながれる教育環境をつくりたいと思うようになりました。そして、そのためにはどうしたら良いのか、どうサポートできるのだろうかということを考えるようになりました。今、大学では「教育・学校経営マネジメントコース」¹を専攻し学んでいます。また、社会教育主事講習を同時受講しています。

今回の実習に当たり「地域社会教育・生涯学習の拠点」にフォーカスを置いて活動を行いました。特に施設とその運営団体がいかにして継続的に地域に根差した学習活動に取り組んでいるのか、それが地域づくりとどう関連しているのかに関心を持つようになりました。

2. 課題設定と事前調査

(1) 実習課題の設定

本実習のテーマとして「地域に根差した生涯学習施設—運営主体の継続可能性と地域づくりへの寄与—」としました。以下2つの視点から実習に取り組みしました。

1) 地域ニーズと学習施設・運営体制の関係性

地域に根差した活動は、地域ニーズと何らかの対応があると考えられます。地域の人々がどんなことを願い、どんな想いを持って学習活動に取り組んでいるのか、施設と運営主体の取組から探求したいと考えました。

2) 学習活動の継続可能性と地域づくり

学習活動がどのように受け継がれ、継続されているのか、そして結果として地域にどのような寄与がなされているのかを探究したいと考えました。

¹ 「大正大学人間学部教育人間学科 教育・学校経営マネジメントコース」。このコースでは教育職員学（特に大学職員養成について）と高等教育学、すなわち「大学・短期大学」学や大学の運営・マネジメント学を中心に教育学とその関連分野について学べます。私は学科ゼミで『『地域社会教育・生涯学習』と『大学』のつながり』について取組んでいます。

ニーズに合った地域の学習拠点施設やその運営（団体）は非常に重要な役割を果たします。それらをただつくるのではなく、学校経営・マネジメントの視点から言えば、その施設や運営団体の活動が継続的に展開できるかという点が重要です。人材育成に関わる教育・学習施設にとって何よりも大事なことは継続性ではないかと思います。そして特に地域での学ぶ上では、それら学習活動によって培ったものをどのように地域社会に還元していくのかということが大切だと思います。

以上のことを踏まえたうえで実習先を考えました。私は特に都市（住宅）地域について触れたいということもあり、いくつかある候補地の中から実習先を東京都豊島区池袋にある、閉校校舎を活用した施設「みらい館大明」を選択しました。

（２）実習前の事前調査—身近な施設だからこそ足しげく通う、信頼関係構築を—

事前調査として、「みらい館大明」及び豊島区基本構想と生涯学習推進計画について調べました。ホームページから計画について調べることが可能でした。また、社会教育主事で豊島区役所職員の岡田麻矢先生から話をお伺いすることができました。

「みらい館大明」に関しても同様に情報を収集しました。情報収集に当たっては特に「みらい館大明」の豊島区生涯学習推進計画における位置づけや背景を調べました。

以上を踏まえて、実習先と連絡を取り合い話し合いを行いました。アポイントメントを取り、打ち合わせ日時等を決めました。私の場合、豊島区ということもありこまめにコンタクトを取ることができました。打ち合わせでは、実習だけでなく現在自分が取組んでいることも含めた自己紹介をしました。現時点での学習・研究内容、実習先を決めた理由などを話しました。そして館長・副館長より実習先である「みらい館大明」の概要と現在行われている活動等について説明を受けました。

以上を経て、実習プログラムを組んでいただきました。実習期間はほぼ実施講座がない時期であり、私自身、施設の運営について特に関心をもっていることを配慮していただき、実習では講座運営業務ではなく施設運営業務を主に実習体験させていただけることになりました。事前のやり取りや情報交換など丁寧にコミュニケーションをとって信頼関係を構築していくということが何よりも大事だと思いました。

3. 実習—施設活動の概要と実習での実践内容—

（１）施設の位置づけと活動内容

1) 豊島区生涯学習行政とみらい館大明

豊島区では、教育委員会ではなく、図1のように図書館課や文化観光課などを所管する文化商工部の中の学習・スポーツ課で、生涯学習行政を担っています²。

²豊島区の生涯学習・社会教育主管課は首長部局に設置されています。もとは教育委員会の主管でしたが、23区で最初に教育委員会から移管されました。現在の担当課は「文化商工部学習・スポーツ課として」となっています。豊島区生涯学習推進計画の現計画は第二次計画であり、期間は2010年（平成22年）度から2019年（平成31年）度までの10年間です。計画目標として「区民が主体の『まなびの循環（わ）』をつくる」、基本理念として「つどう」「つながる」「つなげる」「つくりだす」の4つを掲げています。

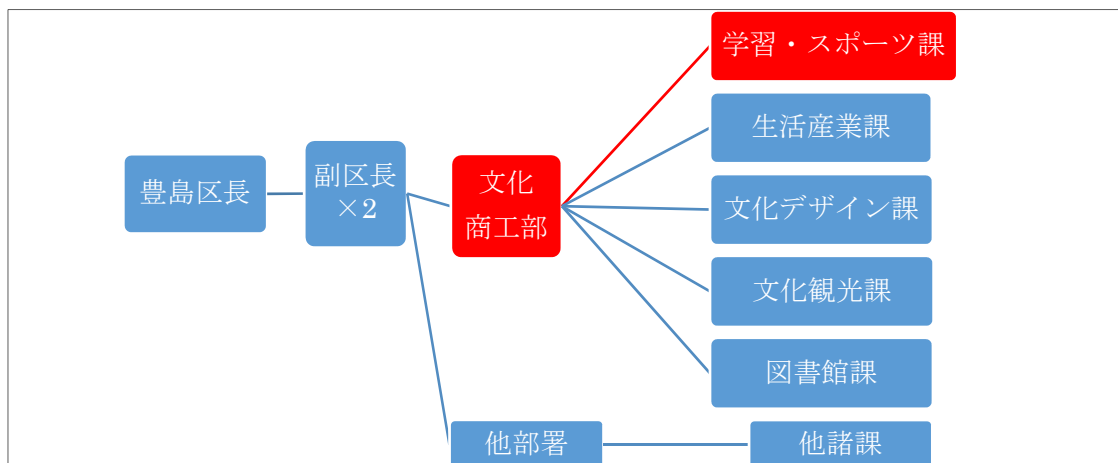


図1：豊島区行政組織から文化商工部関連の抜粋図（豊島区ホームページを参考に作成）

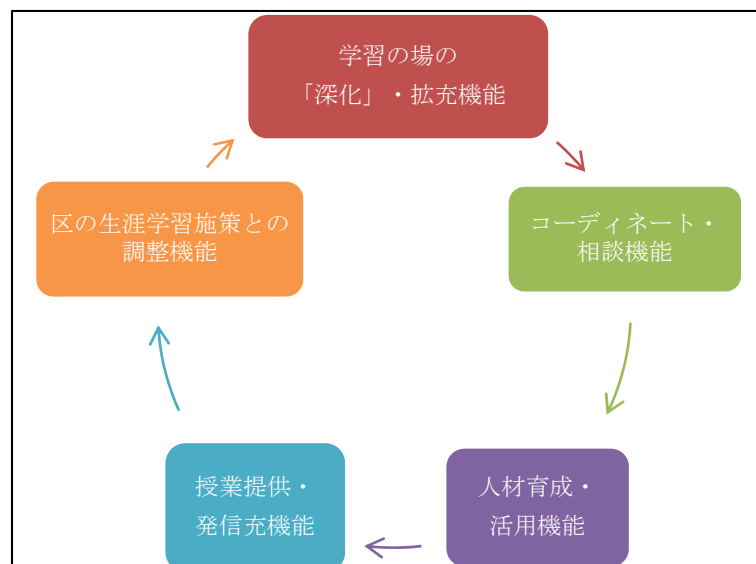
この中にあって、「みらい館大明」は行政が直接管理運営するのではなく、特定非営利活動法人（以下 NPO 法人）いけぶくろ大明が自主運営しています。もとは豊島区立大明小学校でしたが、2005 年 3 月末に閉校し、校舎を取り壊す予定でした。

しかし、ここは住民たちの避難場所であり、周辺に大明小ほどの避難場所はありません。さらに、住民たちの学習・活動・集いの場所としても機能していました。卒業生や地元の方々が有志で NPO 法人を立ち上げ、「みらい館大明」を 2005 年 10 月にオープンしました。

2）大明の機能と役割

豊島区では、「つどう・つながる・つなげる・つくりだす」を生涯学習の基本要素としていますが、そのうち大明では「地域づくり」と「学び」を事業の柱としています（図2 参照）。

図2：『平成19年10月豊島区生涯学習推進協議会による「豊島区生涯学習センター設置に関する意見書」』内で提言された『「つどう・つながる・つなげる・つくりだす場所」となるべき」生涯学習センターの5つの機能。現在、「みらい館大明」がこれらの機能を効果的に発揮できるように計画が進められています。（豊島区生涯学習推進計画Ⅱ章生涯学習をめぐる近況 p. 12 を参照に作成）



また大明では、地域のサークル活動への施設貸出、地域・文化交流イベントや各種講座の開催、ブックカフェによる若者支援事業が行われています。サークル・団体・個人は利用者として登録され、施設の一部貸出を行っています。教室や体育館、グラウンドなど、施設を活動・勉強会で利用する場合は料金を支払います。また、写真・映像撮影での利用も可能と

なっています（施設の一部）（登録していない方や団体でも事前申請をすることで可能）。

3）大明の活動の多様な様相

写真1は大明のエントランスです。右手奥に受付と玄関と下駄箱、左手には待合用のいす、さらに外につながっておりグラウンドがあります。中央の柱は各サークル・団体の自由掲示板となっています。

施設内の「ブックカフェ（旧図書室の解放空間）」は誰もが寄れる自由区間で、利用者や協力者がたくさんの本を寄贈してくださっています。また、「みらい館大明」・「豊島区」・「NPO 法人 NEWVERY（学生・若者支援団体）」の三者協働による、豊島区の「若者支援事業」として2011（平成23年）年10月よりスタートさせました。写真2はブックカフェの右半分です。写真は若手弁護士さんによる弁護士カフェの様子です。不定期なのですが、一般の方や若者が法や政治・社会の理解を深めていただくため開いております。ここにはスクリーンがあり、講演会やサークルでの利用が可能となっています。また、左半分には寄贈された本が数々置いてあり、自由に読むことができます。

写真3・4「おとなの小学校」です。健康のためのエクササイズや趣味の書道など、小学校のころの学習とは一味違った学習経験をすることができます。



写真 1：市民学習団体の情報発信拠点である大明のエントランス（提供：みらい館大明）



写真 2：ブックカフェで開催された弁護士カフェの様子（提供：みらい館大明）



写真 3・4：大人の小学校事業（提供：みらい館大明）

（２）実習内容－施設の管理運営を体験－

実習では施設の管理運営業務を中心に以下①～④を行いました。

- ①窓口のオープンからクローズ業務の体験
- ②施設内の掃除・整備
- ③若者支援事業「ブックカフェ」のスタッフ業務体験
- ④スタッフとの作業

①窓口のオープンからクローズ業務と②施設内の掃除・整備では、来館者のご案内、貸出教室の鍵の受け渡しと管理、利用後の点検と掃除、電話対応（主に施設利用や利用状況、申込み確認）を行いました。来館者への対応では丁寧かつ迅速な対応が求められると感じました。さらに新規・未登録者はあまり来館することがありません。「どうしたいのか」をいち早く汲み取り、スムーズな対応が求められていました。電話対応では、相手が何を聞きたいのか瞬時に理解しなければならず、とても大変でした（主に新規・未登録者による問い合わせだったため）。

③若者支援事業「ブックカフェ」のスタッフ業務体験では本棚整理や余っている木材での本棚づくり、受付業務を行いました。スクリーンや音響設備もあり、簡易的ながらカフェスペースもあります。来館者が気軽に寄れる場所で、若者はもちろん子どもからご年配の方まで、休んだりお話ができたりする空間になっていました。

④スタッフとの作業としてこれら全体を通した中でお話をお伺いすることができました。「みらい館大明」やブックカフェの在り方、それらを含めた生涯学習・社会教育の在り方などについて情報交換させていただきました。

４．実習を通じて学んだこと

（１）自主運営の苦労と信頼関係構築の難しさ

実習を通じて自主運営がいかに大変かということを知りました。掃除に関しては卒業生を含めた地元のボランティアの方々もありますが、掃除を含めた設備や利用者が特別に使うようなものなどの用意・整備を、職員 16 名（実習当時）でやらなければなりません。シフトや施設貸出・その予約にイベントなどのスケジュール管理、スタッフ育成、経理運営、事業計画から運営、広報、そのほか様々なことを把握しなければなりません。

写真 5 はブックカフェのメンバーが中心となって「ブックカフェファーム」と名づけた菜園をつくっている写真です。何事も自分たちで行っています。そこに利用者が集ってくるのです。



写真 5：ブックカフェファーム作り
（提供：みらい館大明）

施設運営側にとって利用者との信頼関係づくりが自主運営では大きな要になると改めて

思いました。しかし同時に施設の型は「信頼」と「慣れあい過ぎ」の違いをはっきりさせなければならない、とおっしゃっていました。ルールや規則の順守とそのお願いを怠ることは、結果として運営の障害を作ってしまうことになります。全員に平等に接しつつ信頼関係をつくらなくてはならないのです。

（２）学習者の背景を考えたコミュニケーション

「人」対「人」のやりとりの能力が非常に大切であることも学びました。相手とのやり取り、特に電話でのお問い合わせや初めての方などは何もわからないことが多く、相手の状況や背景を考えることが必要です。また、その記録をあいまいに残してはいけません。確認するのが後になるほど「言葉」は徐々に忘れてしまい、思い出せなくなってしまうからです。

利用者は小さいお子様からご年配までと年齢層が幅広く、みなさんとても活発です。一方で困ったこともありました。特に活発なご年配の方々によく見られたのですが、ご自分の話ばかりをされてこちらの話を聴いていただけなくて、上手くコミュニケーションを取れないときがあり、困惑してしまうこともありました。

（３）学習者ニーズを受け止め活動の拠点を提供する施設

大明が行っている主な活動は施設貸出ですが、利用している方々は広範囲・多分野にわたってニーズをもたれている方々でした。また、ニーズに応えた講座の企画も多岐にわたっており（例えば、高齢者向けパソコン講座や国際交流事業・異文化体験イベント、子どもモノづくり教室など）、生涯学習施設の運営においては広範囲で細やかな視点が必要であると実感しました。

こうしたことを目の当たりにすると「大明があるから利用者がいる」のではなく、「地域が、住民が欲しているから大明がある」と感じます。そして大明が地域住民の活動拠点であり、そのスタッフが「利用者の活動・学習支援」のために存在しているということがよく分かります。

このような施設・スタッフが存在するからこそ住民が求める活動が展開でき、その地域をとっても「いきいき」とした雰囲気させるのではないのでしょうか。そして活動者だけでなくそれを支える行政も一体となって「地元を誇りに思う」気持ちを育むつながりをつくるのが大事だとも感じました。区と大明はとても密接なつながりを持っており、区民や区内学習施設・環境・機関に対し双方向の取り組み意識的に創出していこうとしているようです。



写真 6：さくらまつりでの住民屋台
（提供：みらい館大明）



写真 7：花火大会前の読み聞かせ
（提供：みらい館大明）

（４）見えないニーズとのギャップ、地域への関わり方の作法

職員の方との対話で「必ずしもニーズは明確に存在しているわけでもないよ」、「むしろ、ニーズなんてものはないと思ったほうが良いときもあるよ」ということを伺いました。

住民が自ら発起人となるのならまだしも、外部の人間がその地域の課題を発見したとしても、地域住民がそれを受け入れ改善したいとは考えていない場合があります。住民の方々は「いま」の暮らしに変化をもたらしたくないと思うかもしれません。この場合、外部の教育・研究機関や民間団体などが新しく活動を始めたところで、その活動が中途半端に終わってしまう可能性もあります。あるいはニーズがありそれに対応した活動が求められていたとしても異世代間ギャップやカルチャーギャップが存在していて、まずはその溝を埋めていく作業が必要かもしれません。「ニーズを把握する」ことだけを考えていた私でしたが、一方で「ニーズは作っていくもの」でもあり、同時にニーズに対応するための基礎的な環境整備やそのニーズを住民にどう理解してもらうかといった方法を考えることも必要であることを学びました。

このようにやりがいだけでなく困難も伴う施設運営ですが、「みらい館大明」を利用している方の大明への「愛」や、職員・スタッフの「意志」がとても強いと感じました。そして、まるで大きな「家」のようで、地域の憩いの場であり、共同スペースであり、自ら学ぶ学習の場として存在しています。このような施設が多く地域にできてほしいと、強く感じました。



写真 8：食文化について考察する集い
（提供：みらい館大明）

5. 実習成果の発表と残された課題

（１）実習成果の発表

実習後、みらい館大明で開催される文化祭「大明まつり」と大正大学学祭「鴨台祭」において、展示・発表を行いました。私は、学び、各地域の魅力、知ってほしいことなどをもとに発表制作物（模造紙×2枚、小冊子）を作りました。私は実習で学んだことを基にして、実習テーマ「地域に根差した生涯学習施設—運営主体の継続可能性と地域づくりへの寄与—」について、以下の観点から取りまとめました。

①地域ニーズと学習施設・運営体制の関係性

- ・学習者の求めている企画、教育できる場所・人などの双方の把握の必要性
- ・疑問・興味・関心から来る強い学習意欲の発見と学習機会へのマッチング支援

②学習活動の継続可能性と地域づくり

- ・地域に必要とされ、気軽に行ける学習拠点づくり
- ・学習したことを学習者自身が活かせる仕組み、相互学習が促進される仕組み
- ・社会的課題解決における生涯学習施設の有効利用方法について

報告・発表会には想像以上に多くの方々に来場いただき、様々な意見交換をすることができました。



写真 9：大明まつりのグランドの様子
(提供みらい館大明)



写真 10：手工芸作品販売と体験の様子
(提供みらい館大明)



写真 11：大明祭で実習経験を説明する筆者



写真 12：鴨台祭での展示発表

（２）社会教育主事の先生からの指摘と残された課題

「大明まつり」では、岡田麻矢先生（豊島区社会教育主事）も来てくださり、展示・発表内容をご覧になって次のような質問と課題をいただきました。

「学習拠点をつくるにはどうしたらよいのでしょうか、そしてその拠点はどんな特徴を持っているのでしょうか」

「住民ニーズの把握や学習資源の調査はどうやって行うのでしょうか」

「住民の思いを具体的に学びに変えていくための支援例や学習成果還元の例としてどのようなものがあるのでしょうか」

今回の実習では、生涯学習施設が持っている機能と役割について、運営方法や地域づくりへの結びつきという点に焦点をおいて学んできました。しかし現場で活動されている社会教育主事の先生のご指摘を踏まえると、それらの学びを実際の現場で生かしていくためにはさらに具体的に考えていくこと、そのためにもさまざまな関連知識や技法、そして各地域の特徴的な事例等について情報収集していく必要があることを考えさせられました。今回の実習経験でお世話になった方々との出会いを大事にしながら、今後さらに探究を深めていきたいと思います。

6. 今後の展望 - 地域の生涯学習施設の可能性 -

「地域に根差した生涯学習施設－運営主体の継続可能性と地域づくりへの寄与－」というテーマで実習を行い、改めて住民の学習・活動拠点となる場・空間が必要だと考えさせられました。同時に、住民との二人三脚で地域を見つめていくこと、いくつもの関係が連なることで様々な可能性を秘めることができることなどを学びました。

また、持続可能な地域づくりには、その地域を「愛する、誇りに思う」ことが大切であり、みらい館大明を運営するスタッフや利用者はその思いがとても強いのだと感じ、とても感動しました。

「地域のための施設」として運営されてきた「みらい館大明」ですので、そのノウハウや存在意義はとても重要な「資源」となっているのだと思います。このような資源は全国の他の地域にも存在しているのだと思います。それらに気づき、大切にし、活かしていくことで、その地域、そして日本を笑顔で満ちあふれさせることができ、活性化の第一歩につながるのではないかと思います。

自分のふるさとや好きなまちの役に立ちたいと思っている方、地域の方々と一緒に取り組む学習支援活動に関心のある方、そのための空間・サービスづくりをしたいと考えている方などはもちろん、新規事業の立ち上げ（起業）を考えている方、そして特に考えていない方も、ぜひ一度、生涯学習施設や交流施設等について調べたり、訪れていただければと思います。様々な人々と共に考え、歩んでいくことがいかに大切か学ぶことができます。

それは地域だけではなく、自分自身にとって非常に大きな宝物になるものだと思います。



写真 13：子どもものづくり教室の様子
(みらい館大明)



写真 14：大学生ボランティア・インターンの
参画（提供：みらい館大明）

【実習先：埼玉県松伏町役場 中央公民館】

報告：小池尚徳

第3章 市民共創の文化祭から学ぶ地域づくりの学び

- 生涯学習施設における市民共創型の講座づくりを契機として -

キーワード 市民企画講座 文化祭 地域づくり



写真：埼玉県松伏町の伝統行事「ささら獅子舞」

地域紹介

埼玉県松伏町は大落古利根川と江戸川に挟まれ、町の中央には中川が流れており、水がとても豊富な場所です。また町の北部と南部には水田が広がっており、緑豊かなところでもあります。町北部に本郷貝塚があり、縄文土器や貝殻などが今でも出土しています。また、大正大学埼玉校舎があるため、大正大学とも縁のある地域です。



写真：郊外に広がる緑豊かな田園風景

実習概要

近年着目されている「市民共創型講座」という生涯学習プログラム作りの策定プロセスや運営について、市民共創型文化祭を通して体験的に学びました。また、発掘作業や人権セミナーなどテーマ外のことも数多くの貴重な体験をさせていただきました。

実習のプロセス



構成要素

(1)	背景 - コミュニケーションガイダンスの経験から「共創」活動に関心 -
(2)	事前準備
(3)	実習内容 ・松伏町民文化祭・発掘作業・ミニまつぶし・人権セミナー
(4)	実習を終えて

1. 背景 - コミュニケーションガイダンスの経験から「共創」活動に関心 -

人間科学科のコミュニケーションガイダンススタッフを務めたことから「市民共創型講座」というテーマに関心を持ち、相互学習を方法原理の一つとしてもつ「生涯学習」を学ぼうと思ったのがきっかけです。コミュニケーションガイダンスとは、学科別に入学してすぐに行われるイベントの一つです。学科ごとにテーマは違いますが、人間科学科は「大学生活をスムーズに始められるように友人作りの手伝いをする」とをテーマにし、毎年30名以上の有志の学生がスタッフとして活動しています。私はもともと「教育」に関心があり、少しでも「教育」に携わってみたいと思っていたため、2年スタッフを務めました。アイスブレイクの担当やゲームの企画、昼食の発注やスライド作成など多くのことを経験しました。仕事の一つであるゲーム企画をするにあたってレクリエーションのことを調べていた際に、日本の各地域で市民共創型講座の取り組みが行われていることを初めて知りました。

市民共創型講座は市民企画講座ともいい、市民の知恵を生涯学習関連施設が活用して、職員とともに講座プログラムを創って実施していくことを一般的に呼んでいます（赤尾¹2009：1）。コミュニケーションガイダンスの活動において企画を考えることの難しさをスタッフとしての経験から痛感していたので、こうした取り組みを社会人の方々はどのように行っているのか、それを地域づくりにどう結びつけているのかをより深く学びたいと考えました。

2. 事前準備

日本各地の市民共創型講座の事例について、都市地域と地方地域のそれぞれにおいて様々な角度から調べました。その結果、講座は「つくる型」と「イベント型」の大きく2種類に分けられることが分かりました。

「つくる型」の例としては、農業体験が挙げられます。作物の作り方の基礎から始め、徐々に現地作業へと移行して発芽状況や生育状況の確認をするなどが主な内容です。つまり、最終的に「つくること」を目的として行うタイプの講座です。

一方で「イベント型」は「つくること」が目的ではなく、「つくったものの展示や発表をすること」を目的としています。たとえば、手工芸や絵の手作り作品を展示することや演奏などを人前で発表することなどが挙げられます。

実習先を決めるに当たっては「市民共創型講座」という視点から検討しました、受け入れ先の実習先施設の中で、埼玉県松伏町に市民共創型の文化祭があることが分かり、文化祭なら「つくる」と「イベント」の両方をみることができると考え、実習先に決めました。数日後、実習先から送っていただいた文化祭までの予定表を見て、自分の予定と照らし合わせながら実習日を受け入れ施設側や担当教員と打ち合わせを経て決めました。

また、一通り実習先の基本情報に目を通しました。松伏町の役場のホームページにアクセスして、総人口や推奨品、世帯数などを確認するとともに、松伏町で行われている市民共創型講座には、どのようなものがあるのかを調べました。その結果、手工芸、アロマテラピー、

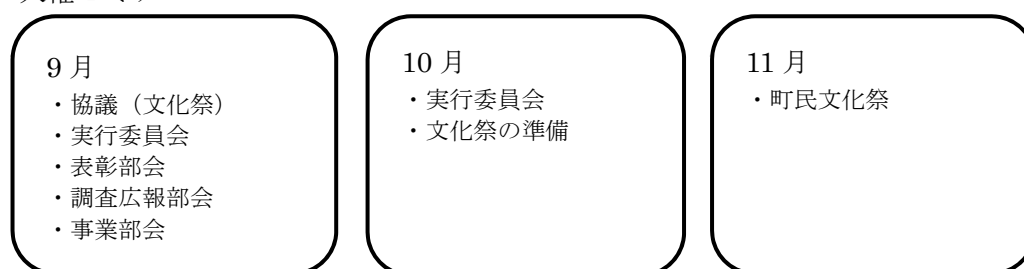
¹ 赤尾勝己の研究は、第三者からの客観的な研究である。しかし、今回の実習のような地域づくりと関わる研究には、W・F ホワイト（著）奥田道大・有里典三（訳）『ストリート・コーナー・ソサエティ』のような参与観察をする方が、地域の人たちに密着してより深い研究をすることができるとされる。

フラワーアレンジメント、社交ダンス、和太鼓、ウクレレ、カラオケ、論語、体力づくり、車イスの体験など多種多様なものがありました。

3. 実習内容

実習では、次の項目に取り組みました。

- ・松伏町民文化祭にむけての会議
- ・松伏町民文化祭
- ・発掘作業
- ・ミニまつぶしの打ち合わせ
- ・人権セミナー



図表1 松伏町文化協会3か月間の流れ（2015）（出典：「松伏町文化協会について」のプリントより作成）

図表1の3か月間が実習期間です。地域を理解するうえで本来であれば9～11月までの3か月間密着して経験することが望ましいと思われますが、今回の実習では9月12日～11月5日の間で可能な5日間だけ実習を行っています。また、日によって1日かかる日と午後のみに行く日があります。

今回の実習テーマに沿った内容は、会議の同席が2回、文化祭本番です。また、発掘作業の手伝い、ミニまつぶしの打ち合わせの見学、人権セミナーの参加などのようにテーマ外の興味深いことも経験させていただきました。

（1）松伏町民文化祭

松伏町民文化祭にむけて、文化協会の各加盟団体の代表者が全員集まった会議を月に1回ほど行っており、毎回20名以上で行っていたと思いました。役場の方々は、予算や発注状況などの事務的な報告を毎回必ずしていました。

9月の会議（第2回松伏町民文化祭実行委員会の協議）は、アトラクションの出演時間の割り振り、会場のレイアウト、担当者の役割などの文化祭の案について打ち合わせをしていました。図表2の各加盟団体の代表者が全員集まった大人だけの会議だったので、雰囲気は少し重い印象でした。学生の会議と大きく違う点としては、とても多くの方が積極的に意見を述べるという点です。やはり市民共創型のため、積極性が違うと感じました。

10月の会議（第3回松伏町民文化祭実行委員会の協議）は、最終の打ち合わせでした。当日の流れの最終確認や注意事項、使用施設の責任者の確認、当日の担当者の役割確認などを行い、変更点や今後の予定の打ち合わせをしていました。

文化協会		
加盟団体	単位団体	人数
①松伏町詩吟吟舞連合会	5	13
②松伏町手工芸連合会	3	40
③松伏町ダンス連盟	7	79
④松伏町民謡民舞連合会	6	66
⑤松伏町書道連盟	5	114
⑥松伏町カラオケ連合会	14	90
⑦松伏町コーラス連合会	3	55
⑧まつぶしフォトクラブ	1	8
⑨松伏町美術連合会	5	103
⑩お琴愛好会	1	12
⑪松伏将棋連盟	1	13
⑫陶芸連盟	2	40
⑬歌好き友の会	1	19
★ささら獅子舞保存会	1	19
★特別会員		

図表2 松伏町文化協会（2015）（出典：「松伏町文化協会について」のプリントより作成）

11月の文化祭当日は、松伏町中央公民館（田園ホール・エローラ）で行われ、朝から模擬店の TENT を張るなどの準備が行われたと聞きました。スタッフの方は文化祭を見てまわり、会議での内容はどのように動いているのかなどを確認していました。開会式から参加し、アトラクションや展示物を見てまわりました。司会の段取りの良さは、大学の文化祭とは大きく違う点だと感じました。



写真1：文化祭開会式の様子



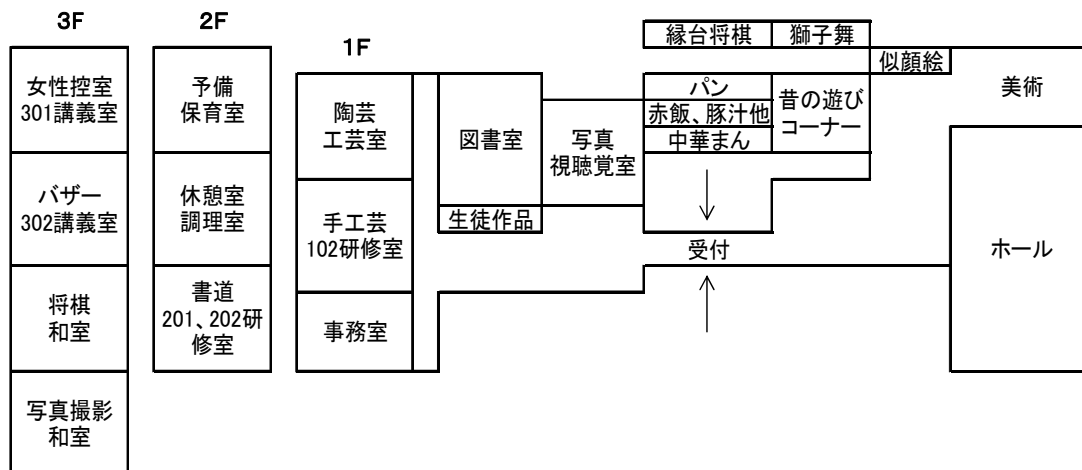
写真2：屋外では町の伝統芸能が披露



写真3：展示発表には地元小中学校も参加



写真4：会場周辺は緑豊かで町民の憩いの場



図表3 松伏町民文化祭の見取り図出展（「第40回松伏町民文化祭」のパンプレットから作成）

文化祭の翌日は、役場の方と片付けをしました。器具は公民館内に片付けられるもの、少し離れた倉庫に片付けるものなど、ものによって片付ける場所が違いました。トラックであちこちを移動して片付けるのは大変な作業で、重労働です。

（2）発掘作業

松伏町教育委員会では文化財関連の業務も担当しています。今回の実習中に発掘作業を体験することが出来ました。

発掘作業は松伏町の北側にある本郷貝塚で行いました。個人的には洞窟のような場所で作業するのかなと思っていたのですが、今回の作業場はビニールハウスの中でした。ある企業が自社のビニールハウス建設のための掘削を無届で行っていたため、周りの住民から教育委員会に通報がきたそうです。発掘は基本的に許可が必要であるため、役場が発掘作業を行うことになったとのことです。発掘作業は想像以上に重労働で、地味な作業の繰り返しでした。

発掘作業をすることで松伏町の指定文化財が増え、松伏町のアピールポイントにもなるのではないかと思います。他にも貝殻や住居跡が発見されていることから、松伏町がもともと海から遠くない場所だったということが分かります。自然や文化の悠久の流れを感じさせロマンを掻き立てられる人も多いかもしれません。

作業はまず標高を測ることから行い、層の断面図をとります。それから、住居跡の場所をス



写真5：作業場のビニールハウス



写真6：作業場の内部

コップで少しずつつけずり、土が溜まったら一輪車にのせて土置き場に捨てます。基本的にこの作業の繰り返しでした。この発掘作業の問題点の一つとして、作業員の少なさが挙げられます。実際、この日に作業していた人数の合計は5人で、そのうち3人がシルバーの団体の方々でした。発掘作業場であるビニールハウスの中は暑く、かつ作業は重労働なので、もっと多くの若い人の力が必要だと強く感じました。1日かけて作業した結果は、土器の破片が一つ出土しただけでした。



写真7：発掘した場所



写真8：出土した土器の破片

(3) ミニまつぶし

「ミニまつぶし」とは、子どもたちだけが参加できる仕事体験のイベントです。埼玉県他の地域でも似たようなイベントが行われていますが、松伏町が埼玉県で最も早くに始めました。ドイツのミニ・ミュンヘンを参考にしているそうです。

企画やチラシ作りなどほぼ全てを子どもたちで行っており、大人はほとんど手を出していないそうです。基本的に月2回で1回2時間の打ち合わせを行っています。今回の打ち合わせでは、数人の女の子たちが、どのような職業を設定するかについて案を出し合っているところでした。バルーンアート、しおり作り、プラネタリウム、ジェットコースター、ケーキ、寿司、パスタなど面白いものがたくさんありました。ネイルアートなどの女の子らしい案も出ていました。しかし、いつも男の子が少ないそうです。男の子の活発で自由な発想もあるとさらに良いものになるだろうと感じました。



写真9：ミニまつぶしのチラシ

子ども同士でつくりあげられるこうした取り組みも、子ども版の市民共創講座と位置づけられるのかもしれませんが。

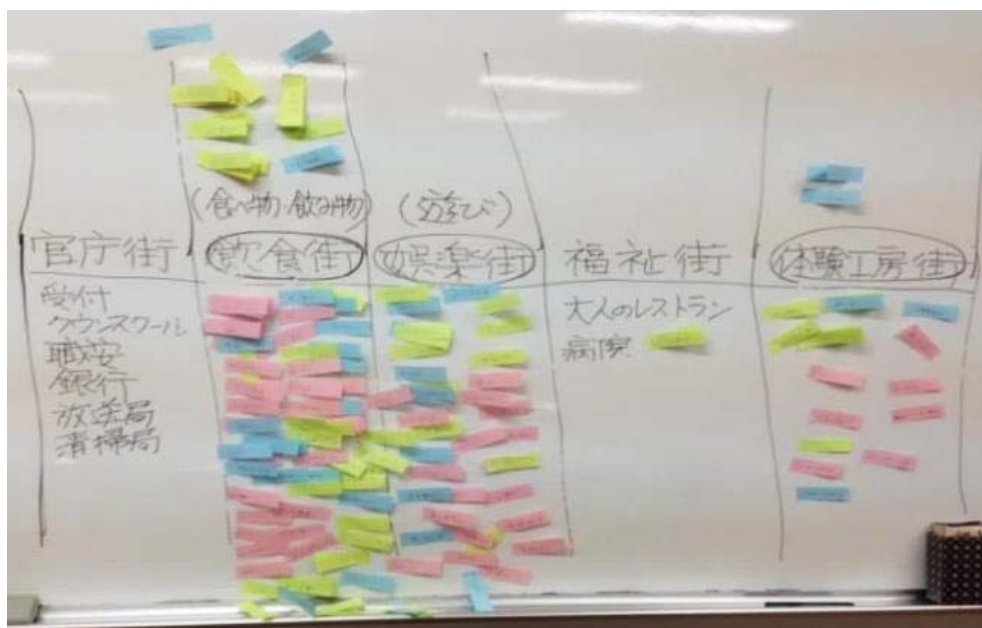


写真 10：子どもたちが出したアイディア

(4) 人権セミナー

松伏町教育委員会で提供する講座の一つとして人権セミナーがあります。

今回参加させていただいた人権セミナーは LGBT に関するもので、題は「性別は男・女だけ？～多様な生と性に出会う～」でした。LGBT はレズビアン、ゲイ、バイセクシャル、トランスジェンダーの略で、セクシュアルマイノリティともいいます。

セミナーの内容はとても興味深いもので、LGBT の方々が学校や社会で困りやすいこと、カミングアウトされたときに個人でできること、レインボーフラッグ²のことなどを学びました。特に驚いたこととしては、LGBT の方は 13 人に 1 人の割合にいるということです。

また、自分自身の性を改めて見直すこともこのセミナーを通してできました。生物学的性、性自認、性表現、性的指向の 4 つの指標から自分自身を見つめ直すきっかけになりました。性別を特定しないように人と話すことや、常に LGBT の方がいると思って発言をするように心がけることが大切だなと強く感じました。

社会学を専攻している自分にとって、とても勉強になったセミナーでした。

4 実習を終えて

今回の実習に短期間でしたが、実習生として参加させてもらえまして松伏町の教育文化振興課の方々に感謝いたします。自分の実力不足により、ご迷惑をおかけした点多々あったと思いますが、丁寧にご指導いただき、ありがとうございました。この実習で学んだことを振り返り、取りまとめたいと思います。

² サンフランシスコのアーティストであるギルバート・ベイカーが 1970 年代に考案し、現在は赤・橙・黄・緑・青・紫の 6 色で構成された LGBT の社会運動を象徴する旗のこと。

（１）市民共創型講座の種類

今回の実習では「市民共創型講座」をテーマとし、講座の合意形成や運営などについて体験的に学ぶとともに、講座を通じた地域づくりについて理解を深めることが目的でした。

市民共創型講座は、市民が所定の企画書に講座プログラム案を書いて施設に提出し、それを施設職員が審査した上で実施する企画書提出型、公募された市民企画委員と職員が数回の企画会議を開き、そこで協議しながら講座プログラムを創り実施する市民公募型、普段から施設を利用して学習している複数の市民を施設が市民企画委員として委嘱して講座のアイデアを出し合う市民委嘱型、普段から施設で活動している地域団体に委嘱して講座を創ってもらいそれを実施する団体委嘱型、NPO 法人の企画委員会で協議した上で実施するNPO 委託型など（赤尾 2009：1-2）があります。今回の実習先の文化祭は、市民公募型の部類に入るのではないかと考えられます。

（２）実習から学んだこと-参加者の積極性とよりよいものを目指す志向性に感動-

文化祭に向けての会議の雰囲気は、学生同士で行うような話し合いとそれほど大差はないと個人的には思いました。しかし、参加者の多くの方々が積極的に意見や案を出している点は学生との大きな違いではないだろうかと思えます。面倒くさそうにしている方は一人もおらず、皆で成功させようという強い気持ちが、会議の回数を重ねるにつれて強く伝わってきました。この地域を活性化させよう、この地域を盛り上げよう、文化祭を成功させようという意気込みが強かったからこそ、積極的な意見交換ができたと思いました。市民共創型には、積極性と目標を達成したいという意志の固さが必要不可欠であると改めて感じました。

文化祭当日、司会の段取りの良さはとても素晴らしいなと思いました。まごつく様子などが一切なく、スムーズに進行していたことから、まさに市民共創型だなと強く感じました。裏方に徹していた方々はいろいろなところを見て回ったり、自分たちが所属しているサークルの展示部屋などを盛り上げたりと多くの仕事をこなしていました。

また、参加者の方々も一緒にアトラクションを盛り上げるなど地域づくりに繋がるような光景も多々見られました。外国人の方も多く来ており、国際交流ができる環境にもなっているなと個人的には感じました。日本だけではなく、世界にも埼玉県松伏町の魅力を広めるチャンスは大いにあると思われます。松伏町の方々はとても穏やかな雰囲気の方が多く、国際交流も盛んに開催していただきたいと個人的に思いました。

（３）さらなる展開のためのアイデアとして-文化祭の経験から考えたこと-

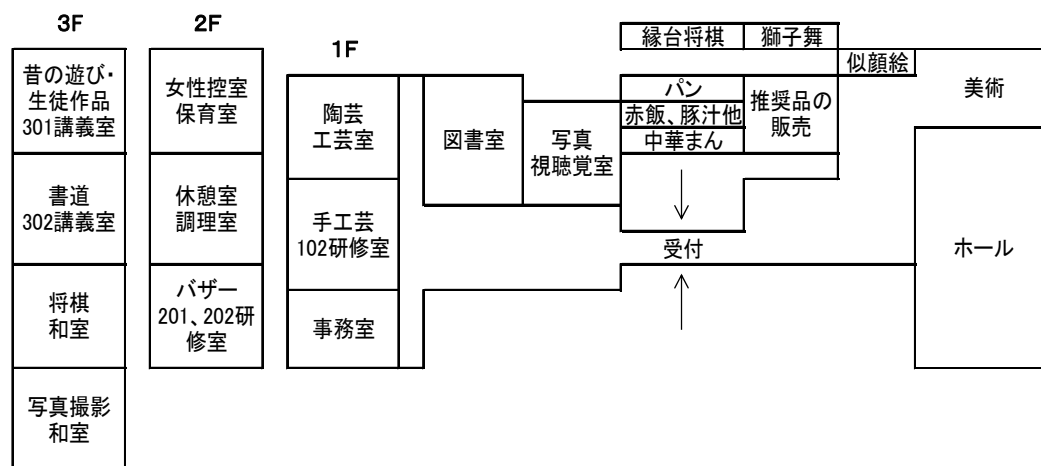
現場の課題についても何らかの寄与ができればという思いから、いくつか考えたことがあるので紹介したいと思います。今回は外部から参加させていただきましたが、市民共創型の取り組みに外部者が入ることで、外部者との協働視点から新たな発想も加わるのではないかと、それにより現場をより良くすることにも繋がるかもしれないと思っています。至らぬ点の多いものだと思いますが、少しでもお役に立てれば幸いです。

文化祭の見取り図（図表３）を見ると、３階にバザーがあることが分かります。なぜ３階にあるのかを役場の方に尋ねると、「バザーを３階に設置することで、人の出入りが少なかった将棋などにも行かせるようにしている。３階まで人の流れをつくるようにしている」と

おっしゃっていました。確かに3階までたくさんの人が足を運んでいましたが、廊下はとても騒がしくなっていました。将棋は静かにやるものだと思うので、人は入るようになってでも将棋に集中できないのではなだらうかと思いました。また、車イスの方が3階のバザーまで大変そうに行き来していた様子も見受けられました。バザーの位置を一つとっても様々なことを勘案しなければならず、難しいものだなと感じました。

出店では松伏町にある会社の商品（ゆめみ野工房のパン、株式会社菅野製麺所の肉まん・あんまんなど）を販売していました。しかし役場のホームページなどで紹介されている推奨品（まつぶし饅、松伏プリン、松伏ポテト、松伏産米粉のケーキ、どんどん焼きなど）が一品も販売されていないことが私のように外から参加した者には残念に感じました。訪れてきた外国人の方や松伏町以外の地域の方々に推奨品も販売すれば、より松伏町の認知度の向上や地域づくりに繋がるのではないかと思います。また、出店で買ったものを座って食べられるスペースをもう少し増やしてあげると、子どもたちが階段や地べたに座る、あるいは歩きながら飲食をしているといったことも減るのではないかと思います。

図表4は今回の実習を経験して、私が考えた文化祭の配置アイディアです。



図表4 松伏町民文化祭の新たな配置案（出展：「第40回松伏町民文化祭」のパンフレットから作成）
※ただし後日、松伏町教育委員会から、302講義室の面積では、初動の展示ができないなど改善の必要性があるとの指摘をいただきました。

中庭のあたりで行っていた「ささら獅子舞」ですが、見ごたえ聴きごたえのある伝統芸能です。既に紹介スペースもあるとのことですが、ぜひ訪れた人たちの理解を深めるために由来や内容の解説をよりPRし詳しく紹介してもらえればと思います。例えば中庭に解説を記載したパネルなどを設置するなど考えられるのではないのでしょうか。外国人の方も多く観賞していたので、外国人にもわかりやすい内容で書かれていれば、より喜ばれるのではないかと思います。伝統行事はその地域の人々に認知されることが大事だと思いますし、松伏町に在住している人や松伏町で仕事をしている人など、松伏町に関わりのある人にまず広めてもらえればよいと思いました。

松伏町の文化祭を中心とする取組みに触れて、地域のすばらしい学習資源があることを学びました。今後もこうした地域の学習資源がより多くの人々に伝わり、理解されるための方策を学び、考察していきたいと思っています。

(参考文献等)

- 赤尾勝己 『生涯学習社会の可能性 市民参加による現代的課題の講座づくり』 ミネルヴァ書房 2009 年
- W・F ホワイト (著) 奥田道大・有里典三 (訳) 『ストリート・コーナー・ソサエティ』 有斐閣 2000 年
- 赤尾勝己 (2001) 「社会教育施設における市民企画講座プログラム形成に関する一考察：三つの施設での聴き取り調査を中心に(生涯学習)」『日本教育社会学会大会発表要旨集録』(53) : 246-247
- あきる野市中央公民館 事業案内
http://www.tama-spo.com/akigawa/02_facility/index11.html (2015 年 9 月 6 日閲覧)
- 安城市／市民企画講座
<http://www.city.anjo.aichi.jp/manabu/shogaigakushu/shiminkikakukouza.html>
(2015 年 9 月 6 日閲覧)
- ゲイのためのライフマガジン gayty
<http://www.gayty.com/> (2016 年 1 月 20 日閲覧)
- 市民企画講座事業補助金制度 - 埼玉県朝霞市
<http://www.city.asaka.lg.jp/soshiki/41/shiminkikaku.html> (2015 年 9 月 8 日閲覧)
- 市民企画講座／箕面市
http://www.city.minoh.lg.jp/danjyo/keihatu/kouennkai_kouza.html
(2015 年 9 月 10 日閲覧)
- 多摩てばこネット
<http://www.tamatebakonet.jp/event/detail/id=3304> (2015 年 9 月 8 日閲覧)
- ふるさとチョイス 埼玉県北葛飾郡松伏町
<http://www.furusato-tax.jp/japan/prefecture/11465> (2015 年 10 月 7 日閲覧)
- 松伏町の特産品 - 松伏町商工会
<http://ma224.net/meisan/index.html> (2015 年 10 月 7 日閲覧)
- 松伏町文化協会へようこそ
<http://matu-bunka.sakura.ne.jp/wp/> (2015 年 11 月 8 日閲覧)
- 松伏町役場
<http://www.town.matsubushi.lg.jp/www/toppage/0000000000000/APM03000.html>
(2015 年 9 月 5 日閲覧)

Ⅱ 世代間交流と学習の推進

第4章 地域の自然と文化を生かした子育て学習

ー幼児子ども教室「大地」での実習体験からー

キーワード 幼児 教育 自然



緑豊かな里山の森に囲まれた「大地」

地域紹介

長野県上水内郡飯綱町（いいづなまち）は、長野県の北部に位置し、面積は75.00平方キロメートルとなります。西・南は長野市、北は信濃町、東は中野市に隣接する、飯綱山から斑尾山までの穏やかな丘陵地です。町の地形はすり鉢状をなし、底辺部となる町の中心には鳥居川が流れています。日本海の影響を受ける積雪寒冷地で、内陸性気候のため寒暖の差が激しく、夏期は最高気温が約35℃、冬季は最低気温が-10℃くらいになります。

豊かな自然と清らかな水を活かし、リンゴ・水稻をはじめとする農業が基幹産業です。特にリンゴなどの果樹栽培が盛んで、「大地」もリンゴ園の中の里山にあります。また、飯綱東高原の日帰り温泉を中心に、スキー場、ゴルフ場など年間を通じて多くの観光客が訪れています。

実習概要

森のようちえんということをキーワードに里山の自然や文化を活かした大地の活動の考え方や取り組みとはどういうものなのかを知る。実際に子ども達と共に3日間過ごすということをおこないました。

実習のプロセス



幼児子ども教室「大地」は広々とした里山に囲まれている。すばらしい自然の中で子ども達は日々をのびのびと過ごしている。



1. 自己紹介と背景

(1) 教師への憧れと「教える」ことへの関心

私は中学生から教師になることを夢に見ていました。中学に上がり、荒れた生徒たちを見て5, 6年の担任のようにになりたいと思ったのがきっかけです。中学生になっても小学生以下の言動や行動をして荒れている生徒達を見て、いかに幼稚園、小学校の時の教育が大切なのか、幼児期からのきちんとした学びをともに深めていくことが大切だと考えはじめました。私は元来小さい子の面倒やお世話をするのが好きだったので幼稚園教諭や保育士に憧れを持っていました。人にモノを教える、善悪を教えるというところに惹かれます。

大学に入学後、小学生と遊ぶボランティアサークルに入部。遊びながら接する楽しさを知り、教師ではなく違う形で子供と接したいと感じ始めてきました。サークル活動の他にアルバイトでも放課後クラブで働かせてもらい、遊びながらも教育は出来る。むしろ勉強を教える教師ではなく、遊んでいるのびのびと自由になっている子どもに学業では教えることのできないものを教えていきたい、教えられるものがあるのではないかと思い始めます。

(2) 社会教育・生涯学習論と「学びあう」という考え方

生涯学習という分野には当初さほど興味はありませんでしたが、生涯学習は幼児から老人まで関係するということを知り、子どもに少なからず関係するものならば勉強しておいても良いだろうという考えで社会教育主事の資格を取ることを決意しました。また、今まで教育というと「教える」という方向でのみ考えていましたが、社会教育・生涯学習で言われているように「共に学ぶ」「学びあう」ということにも関心を持ち、今まで一方通行的なイメージでの教えるというイメージが変わりました。社会教育・生涯学習論において学習支援者としての教師像を学ぶ中で、子どもの教育においてもその重要性を考えさせられ、先生という立場だけでは教えられないものもたくさんあるのだと思いました。

(3) 森のようちえんとの出会い

担当教員の助言もあり、都会から出たことが無いにも関わらず、長野県飯綱町にある NPO 大地に実習を選択しました。都会とはかけ離れた山や森に囲まれた自然豊かな場所へ行くのは不安で仕方ありませんでしたが、大地のホームページを見て、都会の幼稚園とは全く違った教育をしている事に興味を持ち不安と同時に同じくらいのわくわく感を持ちながら実習に取り組むことになります。

2. 事前調査ー森のようちえんの子育て活動ー

実習を行うに当たって自然を活かした保育活動について理解を深めようと「森のようちえん」の取組に焦点を当てて文献調査を行いました。

(1) 森のようちえんとは

森のようちえんとは、1950 年代中頃にデンマークで「子供たちに幼い頃から自然と触れ合う機会を与え、自然の中でのびのびと遊ばせたい」という願いを持つ一人の母親が、自分の子供たちを連れて毎日森に出かけたのが始まりです。日本の「森のようちえん」は、フィールド、園舎の有無、活動の頻度、活動主体などが様々で、幼児の野外活動を総称して「森

のようちえん’ といわれているようです。

森のようちえんと一般的な‘施設型’の幼稚園（保育園）との一番の違いのひとつは、とにかく自然の中で過ごす事を重視する点です。大人が管理・設定した空間ではなく、自然というある意味なんでもありの（もちろん危険も含む）野外空間で毎日過ごす事は、日々目覚ましい発達をしている子どもたちの心と体の成長に様々な刺激を与えます。また、このような野外空間に1年を通して通うことで、日本特有の四季の移り変わりの美しさや、暑さ寒さ、雨や雪といった気象現象にも負けないたくましい心と体がはぐくまれます。フィールドとして重視している森という空間には、木や草や花、キノコ、動物や昆虫など様々な生き物たちに出会える場所でもあります。

このように、野外で一年中過ごすことで子どもたちの体と、幼児期に特に発達するといわれている五感を、自然という美しくも厳しい環境の中で鍛えていく事ができ、自然の中には人間以外にも様々ないのちがあるという事を感覚としてつかんでいきます。

（2）正規の幼稚園との違い

文献調査で得られた情報から、「森のようちえん」と正規の幼稚園との違いを次に書き出してみたいと思います。

1) 森の幼稚園の子供たちは森の中で遊ぶため単純な運動神経の発達向上が図れる。

森は凸凹していて普通に歩くのも少々困難だからです。

2) 自然環境の中で身体的精神的健康に決定的に役立つ

免疫組織が新鮮な空気の中で過ごすことによって強められる。冬場暖められた部屋の中にこもりっぱなしの正規の幼稚園の子どもに比べ、森のようちえんの子ども達は滅多に風邪を引かないといえます。

3) 森の幼稚園には既製品のおもちゃがない

正規の幼稚園によくある、レゴブロックやお人形などは無く、根っこや切株、木で出来たオリジナルな遊具があります。その為遊び方は無限大で、子ども達自らが考え遊び始めます。

4) 高度な社交能力が身につく

集団の中ではほかの子ども達との強いふれあいを体験させられていて、他人の助けに頼り、困難な状況にも解決に向けて創造的に対処することを心得ているとされています。

（3）森のようちえんの形態について

森のようちえんは活動形態から次の大きく2つの類型に分けることが出来るようです。

1) 「純粹の」森のようちえん

扉も壁もない幼稚園 独自の自由に使える建物は何も持っていない

幼稚園の日課は森や牧草地などでこなされる。この形態には半日制幼稚園も含まれる
夏季は4時間冬季は3時間から3時間半など

2) 「融合的な」森のようちえん

固有の部屋を持った全日制の幼稚園

午前中いっぱい自然の中で遊び、午後は室内で遊ぶ 今回の実習先である大地はこのタイプだと考えられます。

このようにスタイルは違いますが、共通していることは自然の環境の中での幼児教育と保育です。多くの森のようちえんは、意図的に大人の考えや考え方を強要せず、子どもが持っている感覚や感性を信じ、そして引き出すようなかわり方をしています。

今回実習訪問した「大地」は、「森のようちえん」と標榜しているわけではありません。しかし以上を踏まえると、自然の中で過ごすことを重視する点、野外で一年中過ごす点、の2点で森のようちえんとの類似性があるように考えられます。

ただしあとで触れるように、それだけではなく、地域の行事や文化、親のかかわりを重視するといった特徴をもった活動を展開していることが着目されるのです

3. 準備 オリエンテーション2泊3日 ～大地の活動を知る～

9月のはじめ「大地」を訪れ2泊3日の現地オリエンテーションをおこないました。

・オリエンテーションでの出来事

大地での朝は早く、スタッフさんは7時30分には大地に到着し、子どもを迎える準備を始めます。掃除等をおこないます。

8時30分 スタッフミーティング 今日一日どういう風に過ごすのか打ち合わせ。打ち合わせが終わる頃、9時子ども登園。バスで来る子は9時30分頃です。

午前中 絵本の読み聞かせ にじみ絵で遊ぶ等 室内での活動

12時 お弁当

午後 畑にて野菜採り 外で遊ぶ 等 野外での活動

15時 お迎え

オリエンテーションでは子どもとは接せず、大地とはどういう所なのかを教えてもらいました。



写真1: 牧舎型の形をしたユニークで立派な大地の園舎。園長自らが手がけて建てたとのこと

4. 実習の経過—大地の子ども達と過ごして—

1月にふたたび大地を訪問。冬の活動を中心に実習を行いました。

(1) 1日目 大地の子ども達と共に活動する

朝9時半大地の子ども登園。お互いに緊張しながらも子ども達に自己紹介。そして朝の会。大地の1日が始まる。まずはわらべうたから。「小山の野兎」というわらべうた。手袋でつくられたうさぎを使って子どもと一緒に歌う。

歌い終わると次は手遊びを2種類。1月ということで「お正月のもちつき」と「弁慶が五条の橋を渡るとき」。次はかごめかごめのようなルールでこおろぎと呼ばれた遊び。真ん中に1人目隠しをして座る。その子の周りを歌いながら回る。歌い終わった後、真ん中の子の後ろに立っている子が「ちんちろりん」と声を出してその子が誰なのかを真ん中の子が当てるという遊び。2, 3回繰り返して室内遊びは終了。外へ遊びに出掛けます。

大地の外遊びはとても活動的です。

1日目は魔女の森ではなく、スロープを使っての外遊び。1人の女の子に連れられて、ブルーシートが敷かれた場所に行ってみるとそこには氷が出来ていました。石で張られた氷を割って氷のお城を作ると言われたので一緒にお城づくり。お世辞にもお城なんて言えませんが、ただ無造作に重ねられた氷を見て子ども達はお城だ！と、とても楽しそうでした。

お城を作った後は5人で鬼ごっこ。鬼ごっこなんて何年ぶりだろうと思いながら鬼決めじゃんけん。負けてしまったので鬼となり、子ども達を捕まえに。しかし、思うようには動けない。写真では少々わかりづらいですが、ゆるい傾斜になっています。アスファルトならまだしも土。そこをスカート姿で駆けまわるのは難しい。動きやすいようにズボンでも持って来ればよかったと後悔しながらも必死に子ども達を追いかけます。

スカート指定なのは大地のポリシーです。大地での実習はジャージ不可。女性は保育をするときは必ずスカートでなければならないのです。外で遊ぶ時は動きやすいようにズボンでも可だそうで。しかしジーパンは雰囲気にとぐわないため不可。

その他にも氷鬼やだるまさんが転んだをしてお昼ご飯。

お昼は室内を予定していたが急遽スロープで



写真2：広場はほどよいスロープとなっていて



写真3：手作りの素敵なツリーハウス。里山保全活動の一環で立てられたとのこと。



写真4：トンネル滑り台

食べることに。みんなでござを引いてピクニック気分。子ども達のお弁当箱を見るとキャラものは一切なく、無地のお弁当箱しか並んでいません。理由をのちに聞いてみると大地の子は皆キャラクターものは持つてはいけないというルールだった。キャラ名すらも言ってはいけないという。

子どもには想像力を豊かに、自ら考える力が重要なので、アニメやゲームの世界と触れ合うことでその世界しか見なかったりしてしまう。だからキャラクターは禁止なのだそう。



写真 5：大地を取り囲む魔女の森

午後は室内遊び。ご飯の片づけをした後、絵本の読み聞かせ。実習最終日に行われるどんど焼き¹の準備として、繭玉²づくりをしました。

その由来を地元の90歳のおばあちゃんから話してもらい、クワや鉈を安全に使い、作物が実りますようにという説明をしてから、皆で繭玉作りをしました。米を臼で挽いて米粉を作りその米粉で繭玉を作った。カラフルに、4か所に飾りました。



写真 6：作った繭玉を室内に飾る

（2）2日目 大地でのお誕生日会

お弁当を作り、子供たちを迎える準備へ。玄関掃除、保育室の掃除。

9時半子ども登園。朝の会1日目と同様わらべ歌小山の野兎を歌い、室内遊びおしりずもう。

室内で遊んでから外遊び。大地の敷地の裏にある天神さまのところへ遊びに行きました。そこまでの道は舗装などは一切されておらず、道なき道を進んでいきました。途中、子どもたちは道端で木の枝や落ち葉を拾って楽しそうに歩いていました。雪があまりなく、雪を見つけるや否や駆け出して足跡をつけていたりしました。道なき道を進んでいくわけですからもちろん転ばない訳がありません。普通の子どもなら転んだら泣き出してしまいます。が、大地の子は泣きもせず何事もなかったかのように立ち上がりました。手を差し伸べる前に立ち上がり話し続けていたのですごいな。強いな。というのが率直な感想です。

¹ どんど焼き（小正月の行事 正月の松飾り・注連縄(しめなわ)・書き初めなどを家々から持ち寄り、一箇所に積み上げて燃やすという、日本全国に伝わるお正月の火祭り行事です。無病息災を祈る） 飯綱町ホームページ どんど焼き参考

² 繭玉（小正月または2月初午（はつうま）の日に飾る餅花の一種。米の粉または餅を繭のように丸めて、柳、梅、桑、榎（えのき）などの枝につけ、床の間や柱などに飾る。）

10 分くらい歩いたところでしょうか。神社らしき建物が見えてきました。年が明けてはじめて来たのでまずは挨拶。天神さまに今年もここで遊ばせてくださいとお願いし、返事が返ってきたところで外遊び開始です。境内でまずは定番になってきた鬼ごっこ。飽きてきたところで、下に降りると川があると聞いてグリコをしながら川を目指す。その途中にきのこが生えているのを発見し寄り道。触ってみたりにおいをかいでみたりしました。都会ではこういう体験は全くといっていいくらい無いと思います。

川に着き、ここでは氷鬼。氷鬼の途中で笛が鳴り大地へ帰る時間。来た道を帰りお昼ごはん。室内で丸くなってみんなで食べました。

午後は1人の女の子の誕生日会。先生は全員白い洋服に着替える。誕生日の子を暖かい拍手で迎える。その子はドレスでお母さんと登場。

「天使が人間の子どもになる」というお話が人形劇で始まった。台詞にお母さんとお父さんが喋るシーンがありました。大事に育てていくからね。というような台詞。お話が終わると、誕生日の子がみずから作ったワッフル（パンケーキのようなもの）を皆に配り。美味しくいただきました。

食べた後お母さんと共に前に出て、お母さんから思い出の品を紹介。思い出の品は絵本でその絵本の表紙絵が赤ちゃんのときの寝顔にそっくりだったから購入したんだそうです。今でもその絵本を読むと赤ちゃんの頃を思い出すとおっしゃっていました。

こんな素敵な誕生日会が行われているのか。とびっくりしたし、感動しました。お母さんが子どもとの思い出の品を紹介するなんてとても素敵です。ぜひここはどの幼稚園にもまねてほしいところです。が、それは厳しいでしょう。まず保護者が来てくれることが難しいのと人数の関係もあります。大地だからこそできる素敵な誕生日会でした。

（3）3日目 地域の行事 どんど焼きを体験

2日目の夜、階段を踏み外してしまい捻挫をしてしまったので最終日にも関わらず子どもと外で駆け回ることにはできませんでした。しかしお昼は外でお雑煮給食。白みそで作られたお雑煮。子どもたちが型抜きでお花にしてくれたにんじんや大根が入っていました。

ご飯を食べ終わった後、1日目に準備したどんど焼きに参加。おじいちゃん、おばあちゃんと名付けられたやぐら（どんどや）に火をつけて空高く上がる炎を見ていました。やぐらがある程度燃えたところで繭玉も焼きます。あんこや抹茶、きなこの3種類の繭玉を食べて無病息災をお祈りしました。

どんど焼き、繭玉など初めての行事食べ物に触れて郷土文化を教えてもらいました。どんど焼きってなあに？と聞くと子どもたちは、私にどういうものか教えてくださいました。ここでは私は先生ではなく子どもだったのです。子どものほうが先生のようなのでした。大地では先生のことを先生とは呼びません。大人が呼んでほしいあだ名で呼びます。そして文字が存在しません。都会の幼稚園にあるようなおもちゃもありません。

文字に触れあうのは絵本。ロッカーやスケッチブックには絵が書いてあります。それが名前の代わりの印なのです。おもちゃはありますがすべて手作りで木だったり自然のものだったりです。

正直に言うと都会っ子の私から見ると味気ないなあというのが第一印象でした。しかし

それで自由になんの縛りもなく楽しそうに遊んでいる子どもたちを見て考えが変わりました。既存のおもちゃでは定められた遊び方しか出来ない。あえて自然のまま残してあるからこそ子どもは自分たちで考え自己流の遊び方をしていたほうがものすごく楽しいのではないかと思います。大地は子どもの無限の可能性を引き出してくれる場所です。



写真 7, 8 : 手作りおもちゃの数々

5. 実習を終えて—私の認識を変えた大地での経験—

(1) 地域の方の新設に感動

私は田舎、自然に囲まれた地に行く事がほとんど初めてで、まずその環境に慣れるという点が難しかったです。オリエンテーションで初めて長野駅から北しなの鉄道に乗る際も、電車は何十分に1本という少なさに驚きましたし、ドアが自動で開かないのにも驚きました。ホームと電車の高さも普通の電車とは違い、電車が高くて降りるとき不覚にも段差に気づかず転びそうになりました。

駅から出ると高い建物が一切無く、緑に囲まれていた。道しるべの建物等がなく、地図を見て大地にたどり着けるのか不安になったくらいです。タクシーのドライバーさんに道を聞き、歩くこと30分。話では30, 40分歩けば着くと言われたのに全くそれらしき建物が見当たらない。あるのは普通の保育園。これからお迎えらしきお母さんに声をかけ、目印のサンクゼール（大地の近くにあるワインのお店）はまだ先ですか？と聞いてみた。するとまだ先でだいぶ距離がある。「歩きならば、車で乗せて連れてってあげる」と言われました。涙が出そうになるくらい嬉しくて、お言葉に甘えさせてもらいました。何もない車道で1人30分も歩いていると不安だし、怖くて仕方ありませんでした。車に乗せてくれたお母さんに感謝を伝えると、「困ってる人は助けないとね、この辺の人はみんなそうよ。」と言ってくれました。

都会、東京ならばそんな事はまずありえないのではないのでしょうか。第一私が見ず知らずの人の車に乗せてってあげるからと言われて素直にはいとは言えないものです。どうして乗れたのか。それはお母さんの第一印象です。はじめ、話を聞く前にこちらを見て挨拶をしてくれたから、この人は信用できると思えました。車に揺られて10分弱無事大地に到着。大地に行くまでも大変でした。

（２）自然の中で学ぶことの苦勞とすばらしさ

私が苦勞したことの一つに歩くことがあげられます。

大地にはアスファルトなんてない。すべて土。自然のままだ。だからこそアスファルトに慣れている私は歩くことが難しかった。土の斜面を子どもは軽々と駆けあがっていくにもかかわらず私はよろよろと上がり、登り切れず、断念。天神さま（大地の裏側にある神社）に行く時でさえ、道なき道を進んで行く子どもや先生達。それについていくのに必死でした。鬼ごっこや氷鬼等遊ぶ時、走るのがいつも以上に遅くて子どもが捕まえられませんでした。

自分の生まれ育った地とは真逆と言っていいくらいの自然豊かな場所で計６日間過ごして、自然と共に生きる人の生活の一端が少しわかった気がします。そこで出会った人達にたくさんの優しさをもらい視野を広げていただきました。

（３）自分自身が楽しむことが大切だということ

大地へ実習に行かなかったら、自然の偉大さや楽しさは味わえなかったでしょう。大学生にもなって全力で鬼ごっこや氷鬼、グリコなんてしなかったと思います。

大人が楽しいと思うことでそれが子どもにも伝わり、子どもが楽しいと思ってくれる。まずは自分自身が楽しいと思わなくては子どもにも失礼だ、と言われました。それは全くその通りだと思います。それは都会の幼稚園で忘れられていることなのではないかとも思いました。もちろん都会の幼稚園でも子どもはのびのびと自由に遊んでいると思います。がそれは本当に心から楽しんでいるのでしょうか？先生も楽しんでいるのでしょうか？答えはなんとも言えないですが、少なくとも大地の大人や子どものようにはいかないのではないのでしょうか。

（４）都市の暮らしとつなぐ可能性－生涯学習の役割を再認識－

都会の幼稚園や保育園でも大地でやっている事が少しでも出来ればいいと思うし、伝えていけたら良いと思います。別に都会の人に来てもらわなくてもいい。そこにいる人がこの暮らしを心から楽しんでいれば、自然と人が寄ってくるのだから、と園長さんはおっしゃっていました。確かにそれはその通りだと思います。楽しんでいるのが他人から見てもわかるから、人は楽しさに吸い寄せられていくのだと感じます。でもそれは他人に存在を知ってもらわなければ伝わりません。大地の活動をもっとより多くの人に知ってもらえることも大切なのではと、都会側で暮らす私としては考えます。

課題としてはどうやって「森のようちえん」や大地のような里山の自然や地域の文化を活かした保育の活動を知ってもらうか。田舎に来てください、ではなく、森のようちえんってこういうことしていますよ、という事を都会の幼稚園や幼児のいる保護者様に伝える手段だと思います。これは田舎の課題というよりも、都会側に住んでいる私たちにとっての課題なのかもしれません。私たちが、都会に住んでいることの課題や問題点をまずはきちんと認識し、大地のような取り組みの真価をきちんと受け止め、真摯に理解しようとするのが第１のステップではないかと思います。

そのためには都会側にある自分たちが身近なところからまずは考えなくてはなりません。そして大地など地方地域の取組とどのように共に考え行動できるようになることが大事だと考えます。そのための学びとして生涯学習が重要になってくると思います。そうした大人

たちの学びがあつて、子どもたちの学びを描き準備していくことができるのではないかと思います。教育はその子どもの分だけやり方があると思います。今回実習で学んだ森のようちえんの知識や大地での活動経験をきっかけにして、子ども達の可能性を広げていけるようになりたいと思います。

参考文献

「ドイツの自然・森の幼稚園 - 就学前教育における正規の幼稚園の代替物」ペーター・ヘフナー著,佐藤竺訳,公人社,2009

「里山っ子行く！ - 木更津社会館保育園の挑戦」斉藤道子文,岡本央写真,農山漁村文化協会 2009

「土の匂いの子」相川明子編著,コモンズ 2008

「森の幼稚園－シュテルンバルトがくれたすてきなお話－」今泉みね子,アンネッテ・マイザー著,合同出版,2003

「土の子育て」青空保育なかよし会,コモンズ,1997

【実習先：滋賀県近江八幡市 八幡酒蔵工房】

報告：内田歩美

第5章 退職後の居場所づくりを契機とした学習活動による

伝統文化・食・コミュニティづくり

ー八幡酒蔵工房「いまさかプロジェクト」のおやじたちから学ぶー

キーワード 定年退職 おやじ連 居場所づくり 地域活性



八幡山から望む琵琶湖と田園



おやじ達の活動によってよみがえったまちのシンボル八幡堀

地域紹介

近江八幡市は滋賀県のほぼ中央、琵琶湖の東側に位置しています。総面積は 177.45km² で、うち琵琶湖は 76.03km² です。

市内の西の湖は琵琶湖の内湖でヨシというイネ科の多年草の群生地となっており琵琶湖八景の一つとして名高い。また、重要伝統的建造物群保存地区として指定されており、風光明媚な景観を楽しむ観光客が後を絶ちません。

実習概要

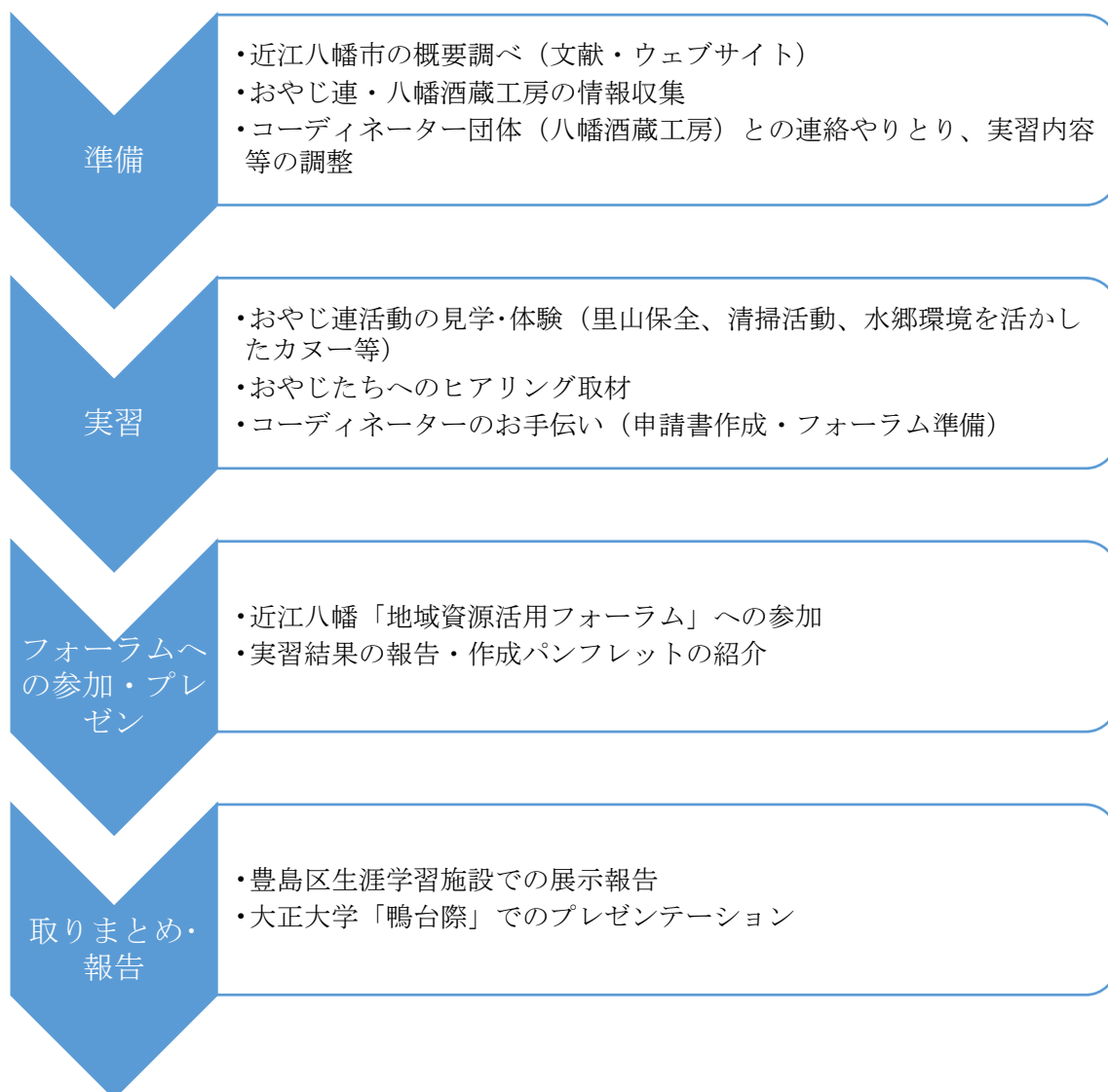
滋賀県近江八幡市にて定年退職後の「おやじたち」の居場所づくりと地域活性の関わりについて学ぶ実習を行いました。「おやじ連」と呼ばれるおやじたちの実際の活動の見学させてもらい、集まるに至った経緯を知ることができました。

実習中はおやじたちのコーディネーター（意外にもおやじたちのコーディネーターは女性です）スタッフの地域事務所に住み込みをさせてもらい、新たなプロジェクトの申請書の作成のお手伝いや地域フォーラムの準備活動に携わらせていただいたことも貴重な経験となりました。



地域事務所にておやじ連のコーディネーター小関さん（左手前）とともにフォーラム準備

実習のプロセス



実習先が主催で開催した地域資源活用フォーラムの様子（市内の伝統建築物を会場にして開かれた）



1. 背景—ジェンダー論から「おやじ」たちの生き様に関心—

滋賀県近江八幡市のおやじ連にお世話になるに至ったきっかけは、大学で受けたジェンダー論の講義です。そこで学んだことは、定年退職後のお父さんたちには家にも地域にも居場所がなく過ごす場所といえ、ショッピングモールのベンチや図書館など、ということでした。私はこの話を聞いてとても驚きました。それというのも、私の祖父は家にも地域にも居場所がある人間だったからです。例えば家にいる時は畑仕事に精を出し、祖母とはもちろんのこと孫とも楽しそうに作業をしていました。外ではゲートボールや菊作りをたしなみ、仲間たちと毎週会っていました。残念ながら自らのことを進んで語る人ではなかったのですが、詳しい話を聞くことはありませんでしたが、毎日が楽しいのは見ているだけで分かったものです。それが普通だと考えていた私にとってはこの授業内容は衝撃的でした。環境や地域によってこれほどまでに過ごし方が変わるのには驚きだったのです。

そういった授業を受けた後に滋賀県近江八幡市に存在する「おやじ連」を生涯学習実習論で知ることになりました。おやじ連の話を聞くと、そこの人々は私の祖父と同じように地域に居場所があるのだと感じました。そしてただ居場所があるだけでなく、自分たちから率先して新しいことを始めたり地域の活性化に繋がることをしていたりと様々な活動をしていると知り、私は興味を持ちました。今回の実習でお世話になれたことは私にとって貴重な体験となりました。

2. 事前調査と課題の設定

(1) 事前調査

事前に調査したことはおやじ連の実際の活動です。インターネットの HP やおやじ連の代表者のフェイスブックを確認しました。そこには生き生きと活動している姿が確認できました。清掃活動や料理教室、カヌー体験、竹細工を子供に経験させるワークショップなどの幅広い活動内容が展開されていることが分かりました。HP 閲覧時点では、近江八幡を象徴する課題である竹林整備活動とかかわりの深いすでに竹細工関係はおこなわれていないことが残念でしたが、おやじ連では一つのことだけでなく多くのことに手を出していることが分かり、見応えがある場所ということが分かりました。

(2) 課題設定と実習計画—親父たちが安定して活動できる環境を整える方法を考える—

事前調査をおこない私が気になったのはおやじ連のメンバーに加わるに至るための経緯や、実際にメンバーになった後の活動の幅です。ジェンダー論でも男の料理教室を区市町村で開催することがあるが、それ一回きりで終わってしまうことがほとんどであると聞き及んでいました。滋賀県のおやじ連でもそのようなことが起きているのではないだろうかと思ったのです。

そこで、私は「おやじたちが安定して活動できる環境を整える方法を考える」ということを実習課題として設定することにしました。この課題に取り組むことによって、定年退職後に安定した居場所が作り出せるようになり、そこから新たな学習が生まれるのではないかと考えました。定年退職後ということは多くの知識を持っているはずなので、それらを活用する場所を彼らに与えることにより、どの年代も学習できる場所が生まれるのではないかと

と想定しました。

（３）準備－コミュニケーションと信頼関係構築の大切さ－

実習先に行く前の現地とのコミュニケーションはメールでおこないましたが、担当教員が先方と懇意であったということもあり、やりとりのほとんどを先生に頼りきってしまったところがあります。振り返ってみると先方のコーディネーターと直接やりとりをしたメールは、ほんの数通であいさつ程度の内容となっていました。

今回はこれまでの担当教員と先方で構築された信頼関係に支えられてどうにか実習に入れましたが、先方ときちんと実習内容を話し合い、コミュニケーションを深めていくことが大切だと感じます。

3. 実習と実践内容

（１）日程と受け入れ先の活動概要

実習中は、おやじ連の活動に後ろからついていき、活動の観察とインタビューをおこないました。自分にもできそうな活動であれば一緒に参加させてもらいとても充実したものとなりました。

日程は次の通り。

- 1 日目) 2015 年 9 月 7 日(月) 琵琶湖周辺の清掃活動の見学、近江八幡市探索(徒歩)
- 2 日目) 2015 年 9 月 8 日(火) 主に屋敷の清掃作業の見学
- 3 日目) 2015 年 9 月 9 日(水) 近江八幡市探索(車)
- 4 日目) 2015 年 9 月 10 日(木) グランドゴルフ、カヌー体験、近江八幡市探索(車)
- 5 日目) 2015 年 9 月 11 日(金) 帰宅

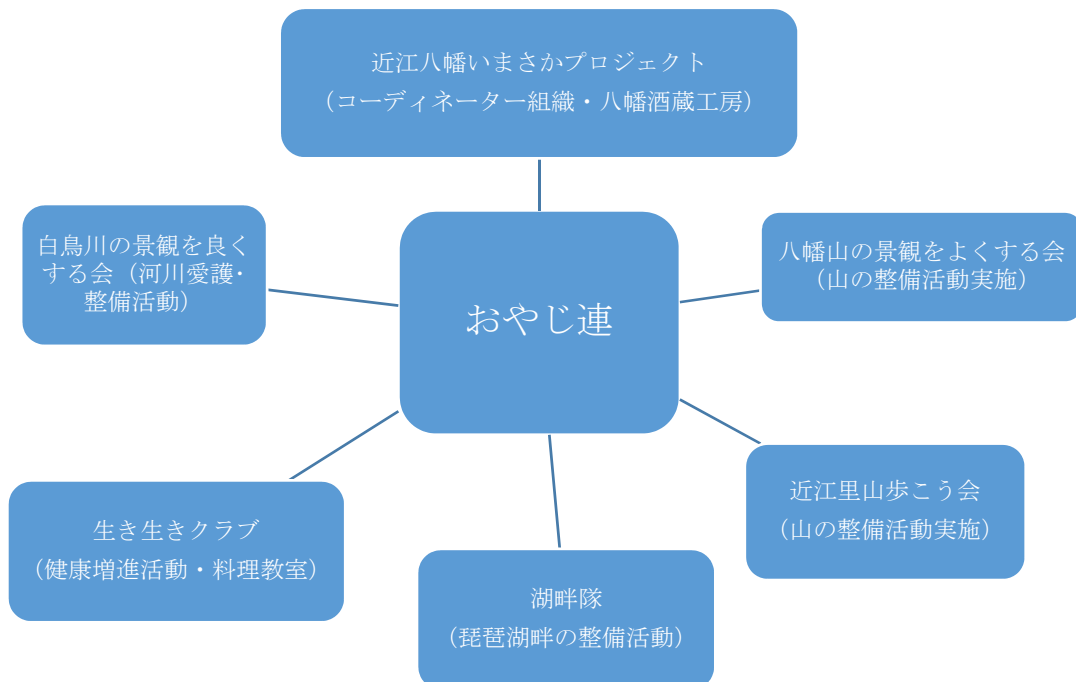


図 1：おやじ連は全 26 団体からなりたっている。ここに表記したのは実習で関わりのあった一部団体のみ。

図1に見るとおりおやじたちは実に多様な活動を展開しています。琵琶湖周辺の草むしりなどの清掃活動や竹林整備などの地域のためになることもしていれば、カヌー体験やグランドゴルフなどの遊びもおこなっていました。しかし、彼らはどの活動も純粋に楽しんでいるため、特段に「地域のため」という考えで動いているわけではないということが分かります。

集まって何かをするきっかけになったのは市で開催された料理教室です。その回だけで終わらせるのではなく、積極的に集まる機会を設けたことでおやじ連としての活動となっていたようです。

おやじたちは自分たちが住んでいる地域の魅力を把握していることも特徴的です。おやじ達がもともとこの地元出身の人間ではないことが大きいのかもしれません。他の地域の人々と決定的に異なるところではないかと思います。魅力をしっかりと理解しているからこそ、どのようにアピールすれば良いのかも考えやすく行動しやすい。他所から来る人に対してとても寛大であることも彼らの強みだと感じました。

近江八幡市は琵琶湖が近く、湖畔から車で数十分の距離にあります。琵琶湖周辺はサイクリングロードも整備されているので、観光にはぴったりです。一方で竹林や山も多く整備が追い付いていない状態で、特に竹林の問題が課題となっています。なかなか理想的な環境に整えるのに四苦八苦されていますが、おやじ連の構成団体の一つ八幡山の景観をよくする会が一生懸命整備活動に取り組んでいます。その他にも歴史的建造物を保管することに積極的に取り組んでいます。街並みは小京都のようでとても綺麗です。道路も碁盤の目のようになっており、まさに小京都といった趣を感じさせます。

（２）おやじの活動（清掃編）－楽しむことが一番の目的－

最初に出会ったおやじたちは清掃活動に力を入れていました。滋賀県の象徴ともいえる琵琶湖周辺を月に2回の頻度で綺麗にしているとのこと。不法投棄されている大きなゴミからやコンビニ関係の小さなゴミまで関係なく大量に拾っていました。また、ゴミ拾いだけでなく草木の除去も彼らはおこなっており、いわゆる雑草や葛の蔓などを綺麗にして景観を損なわないように活動をしていました。夏には綺麗になった湖畔でバーベキューも楽しめるようで、観光客などがやってくるのでその人たちの良い思い出になってほしいと話していたのも印象的でした。

別のおやじたちはとある家屋敷の庭を綺麗にしていました。そこの屋敷の庭である催し物をするらしく、それを円滑に進めるために草むしりをしているのだと話していました。ここでもおやじたちにお話をうかがうことができました。

おやじ「電動草刈機を使ってる連中ほぼいないの気づいた？」

私 「そういえばそうですね」

おやじ「理由分かる？」

私 「え？ 石がたくさんあるからとか？」

おやじ「残念。電動草刈機はさ、作業がすぐに終わっちゃうんだよ。俺らは暇を潰すために作業してるからすぐに終わりたくないの。これが使わない理由。お姉ちゃんまだまだ分かってないねー！」

私 「なるほど！」

ここで作業をしていたおやじたちは自分たちのために清掃活動をしているとのこと。せっかくなのでたくさんある時間なのだから有効に使いたい、会社を定年退職した彼らは持て余しがちだとのこと。それを解決するための作業なので、すぐに終わらせるわけにはいかないということです。



写真1：桜の木に絡む蔓の除去



写真2：庭の手入れ

（3）おやじの活動（楽しむ編）－実は学習でもある－

私はこの実習でカヌーを体験することができました。そこで私が見たものは自分よりも年下に指導されるおやじの姿です。こうした方が良いですよ、こんな風にしてください、といった言葉を真っ向から受け止め、自分に吸収しています。知識や技術のある人の言葉を否定的に受け取ることをしないのです。年輩者にありがちな自分が年下に何かを言われたくない、ということとはなかったのがとても印象的でした。

おやじたちはとても勉強家です。自分たちが知らないことを率先して聞いて知識を集めています。おやじたちはとても優しく、私のために車を出してくれて近江八幡市を案内してくれました。その際に彼らは自分たちも行っただけの場所に来てくれて、多くの新たな情報を得ることができました。実のところ得たのは私ではなく連れていってくれたおやじたちなのかもしれません。彼らは気になることがあるとすぐにその場で作業している人たちに質問をしていました。その姿を見ていると彼らがいろいろな知識を身に付けている理由が分かった気がします。



写真3：カヌーを体験するおやじたち

（4）街並み

おやじたちの後ろを着いていただけではなく、自分の足でも街を歩きました。そこには歴史的建造物が立ち並んでいます。私が訪れたところは、そういった建物を保管して景観を保存することを目的としています。私はその街並みを歩いて回りました。古民家をそのまま

残してある様子は綺麗で壮観でした。その他にもメンソレータムの会社や綺麗な水路、瓦ミュージアム、八幡山などがあり観光地としてもすぐれていることが分かります。



写真 4 歴史的景観を保った街並み

(5) パンフレットの手直しー市民企画フォーラムの準備お手伝いー

コーディネーターである小関さんから10月にフォーラムを開催するという話を聞きました。パンフレットまで作っており準備は着々と進んでいるようです。そこで小関さんは作成したパンフレットを私に見せてくれました。まだ修正が必要な箇所が散見される段階で、出版・編集を専攻している私としても役に立てればと考え、夕方から夜にかけてデザインの修正をお手伝いさせていただきました。

(6) 市民フォーラムへの参加と発表

実習が終わった後も縁があり、「いまさかプロジェクト」が主催のフォーラムに担当教員と共に参加しました。「地域資源」がテーマとなっており、名だたる方々が近江八幡市の地域資源とその活用法などを提案していました。地域に有り余っている竹の活用法や、人の住んでいない古民家の活用法を紹介していました。その他にもNPO活動との関わり方なども提案している人がおり、市民活動を考える上で大変参考になりました。学生枠として私もフォーラム内で発表をさせていただきました。「地域資源」としてのおやじ連の取り組みに着目して、今後どのように活動を展開していくことが出来るか、もしも学生として関わらせていただけるとすれば、どのような形で参加できるかということを考えました。パンフレットを作成したり、資料用のパワーポイントを完成させたりと時間に追われてしまい十分な発表内容を準備できなかったかもしれませんが、しかし私にとっては新たな視点で近江八幡市を見るきっかけになり、貴重な経験となりました。また、実際に行動を起こしているおやじ連の方々に、前向きにとらえてくださる人が多かった印象があります。近江八幡市がさらに素晴らしい地域になればと願っています。



写真 5 地域資源活用フォーラムフォーラムの様子

4. 実習を通じて感じたこと

(1) 地域の魅力に意識的なおやじたち

近江八幡のおやじ連に加盟しているおやじたちは言うなれば他所者といった側面があります。これは一見すると意外に思えるかもしれませんが納得もできることでもあります。おやじたちは近江八幡市の長所をしっかりと把握しておられました。これは私がかかわらせていただいた他の地域では見ることのなかった傾向のように思います。一般的に住民は自分たちの住んでいる地域の魅力を把握しにくいのではないのでしょうか。よほど意識していなければ、外から見れば素晴らしい地域の魅力も、長年住んでいると当たり前に見えてしまうことが多いということが原因の一つだと思います。しかし、近江八幡市のおやじたちにはその傾向がありませんでした。私がいかに地域についての基礎知識がなかったことも理由の一つだとは思いますが、活動している地域について自信を持って生き生きと一から十までいろいろなことを教えてくれたことが印象的でした。

(2) 自分たちの楽しみが地域貢献へつながる

おやじ連が 26 の団体からできており、その総称だと知った時は驚きました。その 26 団体は各々が好きなことをしており、気が付いたら地域活性化に繋がっているところもあるといった感じのようです。おやじたちの行動力は本当に目に見張るものがあります。人が集まるようになった最初のきっかけは、市で開催された定年退職後の男性を対象とした教室ですが、その後も率先して集まろうと声かけがおこなわれ、そこから輪が広がり今のような状態になったというのですから。おやじたちは地域の活性に繋がるからあれをやろう、これをやろうと考えているのではなく、自分たちが楽しみたいから、ということを原動力に活動をしています。しかし結果として地域活性化に直結しているのです。

(3) コーディネーターの機能と役割ー資金調達の苦労ー

今回受け入れ先で様々お世話をさせていただいたコーディネーターの小関さんについても触れておきたいと思います。彼女は必ずしも専門的なことを学んでいるというわけではないとのことですが、このコーディネーターはなかなか大変な仕事であることがよくわかりました。いくら自分たちのための活動だと言っても基礎となる資金が必要となります。彼女はいまさかプロジェクトのおやじたちが円滑に行動できるように助成金の申請や、活動を市民に知ってもらうためにテレビへの放映交渉などを行っていました。助成金の申請に関しては申請先によって目的もようとも異なり、また採択基準も変わるようです。同じ内容でも通るところと通らないところがあるとのことで一筋縄ではいかないと話してくれました。こうした女性コーディネーターが、おやじ連のために頑張っている姿はとても素晴らしいものと感じました。

(4) 地域課題への対応ー竹林問題からー

実習は基本的に外に出て地域の様子を見て回りました。しかし、雨が降るとそうできないことも多く、雨が降ることによって予定されていたものできないといったこともありました。私はそれが原因で見に行けなかった活動があります。竹林整備です。今放置竹林の問題が他の地域でも存在していますが、近江八幡ではきちんと整備をおこなっている場所が

あり、その様子を見てインタビューをしたかったが雨の影響でそれができませんでした。気軽に再調査に行ける距離ではないので、それが心残りです。しかし、整備中の様子は見ることが出来ませんでした。実際の活動場所は見せてもらうことができたので、そこからいろいろと考えるきっかけを与えていただいたことに感謝しています。

5. まとめ

(1) 文化祭での報告から

実習の結果を取りまとめて文化祭で報告をしました。近江八幡の様子をパネルにして張り出したり、実習を通じて作成したパンフレットや、市民フォーラムで利用したパンフレットを置いたり、その場所を知らない人たちにアピールするために工夫をしました。もともと興味があり立ち寄ってくれた人から、なんとなく立ち寄ってくれた人まで理由は様々でしたが、少なからず興味を持ってくれた人が数多くあり、うれしいことでした。そこからさらに輪が広がり、私が実習に行ったことが近江八幡のおやじ連の活動に何らかのお役に立てばと願っています。

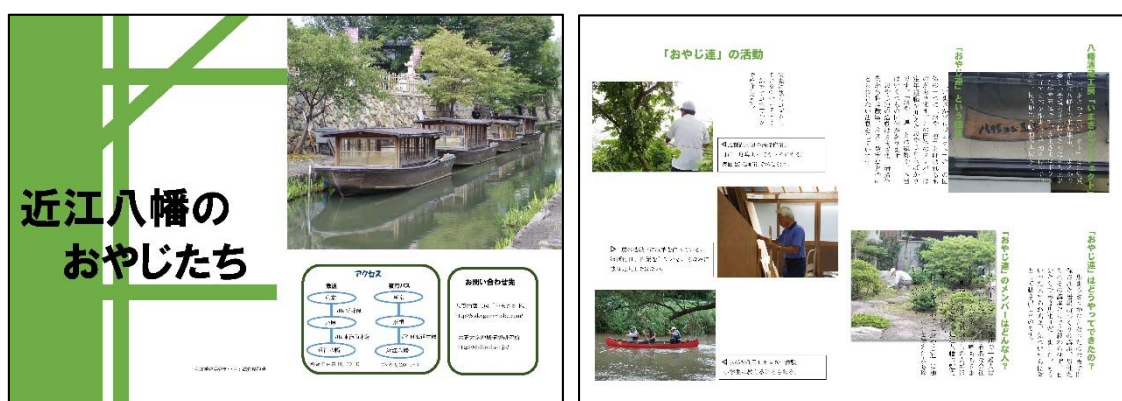


図2：実習を通じて作成したおやじ連の活動パンフレット

(2) 今後の課題と展望—学びと活動がもたらす様々な社会的側面—

今、いまさかプロジェクトは、新たな取り組みを始めています。それは若者とおやじと仕事を繋げることであったり、古民家を改造して塾を始めることであったり、いずれにせよ一回きりで終わらない活動を模索しています。しかし、資金調達の面で大きな課題を抱えています。協力してくれる企業はあるもののそれを受け取るための査定が大変だとコーディネーターも語っていました。助成金制度を活用しようとしても企業によっては申請の基準が異なるので、同じ内容でも通らない可能性もあるようです。

また、他には周りの社会的な活動環境も整えていく必要があるようです。古民家を改造してとなると近隣住民が良い顔をしないというデメリットが生まれることもあるとのこと。今までは静かに暮らしていたのにも関わらず、そこが活動拠点になることで多くの人が入りすることになる。それを受け入れてくれる人ばかりではないということです。現状でもいまさかプロジェクトの活動地点である八幡酒蔵工房の出入りでさえ嫌な顔をしている人もいるとのこと。そのため、新たな活動を始めた場合にさらに大きな問題が起こる可能性もある

り得るわけで、その解決方法を考えておくことが大事だということです。

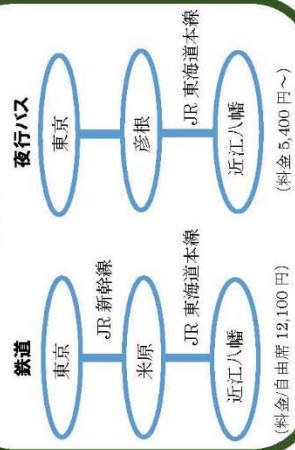
地域における学びと活動が社会的側面を配慮に入れながら取組んでいかなければならないということを認識させられました。おやじたちはコーディネーターと共にこれらの問題を一つ一つ解決して、さらなる取り組みへと日々挑戦しているのです。

近江八幡の おやじたち

生涯学習実習チーム：滋賀県担当



アクセス



お問い合わせ先

八万酒蔵工房「いまさか・PJ」
<http://sakagura-kobo.com/>

大正大学地域構想研究所
<http://chikikouken.jp/>

「おやじ連」の活動

実際に彼らが何をしているのかごくごく一部ですが写真付きで紹介します。



△琵琶湖周辺の清掃作業。
月に一度集まってキレイにする。
毎回 25 名前後でおこなう。



▷工房の階段下に収納を作っている。
ほぼ毎日、作業をしている。ちなみに
彼は元大工ではない。

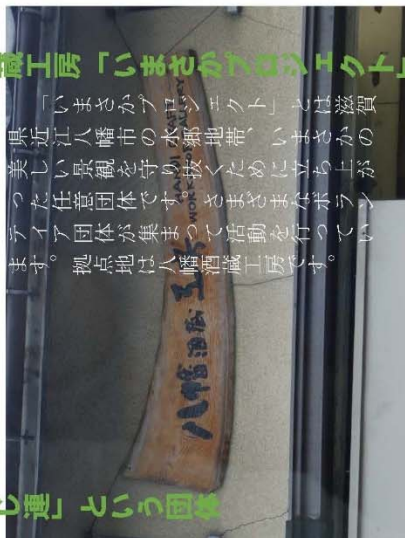


△水郷を利用したカヌー体験。
小学生に教えることもある。

八幡酒蔵工房「いまさがプロジェクト」

「おやじ連」という団体

「いまさがプロジェクト」とは滋賀県近江八幡市の水郷地帯、いまさかの美しい景観を守り放くために立ち上がった任意団体です。さまざまなボランティア団体が集まって活動を行っています。拠点地は八幡酒蔵工房です。



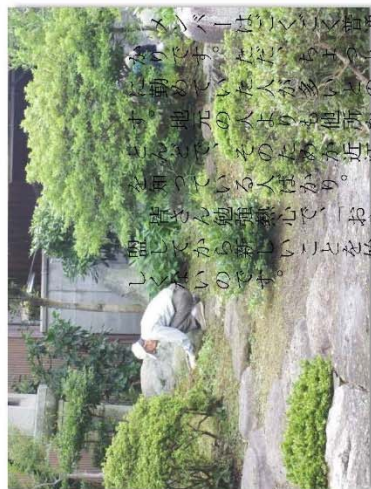
「いまさがプロジェクト」の中の団体の一つに「おやじ連」と呼ばれるものがあります。この団体のメンバーは定年退職を迎えたおやじたちばかりです。「おやじ連」とは総称で、本当はいくつもの団体があります。

おやじ連の活動はさまざま。清掃作業から料理教室、カヌー教室など枠にとられない活動をしています。

「おやじ連」はどこまでできたの？

集まるきっかけとなったのは市で開催された居場所づくりの講座。男性たちはその講座だけでは終わらせず、自分たちで再度集まりだしました。そういつた人たちが増え、気づいたら団体として動き出したのです。

「おやじ連」のメンバーはどんな人？



メンバーはごくごく普通の一般人ばかりです。たまたま有名会社で働いていた人が多いという噂もありますが、地元の人よりも他所からの人がほとんどで、そのために近江八幡の魅力を発信している人ばかり。近江八幡を好きになって、「おやじ連」に参加してから新しいことを始めた人も珍しくないのです。

【実習先：山梨県小菅村 NPO 法人多摩源流こすげ】

報告者：土方優紀

第6章 山村の情報環境と学生参加による地域文化の保全

活動と発信を通じた学びの可能性

—小菅村での生涯学習施設実習の経験から—

キーワード：山村 情報発信 図書館 コミュニケーション



多摩川源流の山々に囲まれた小菅村の集落

地域紹介

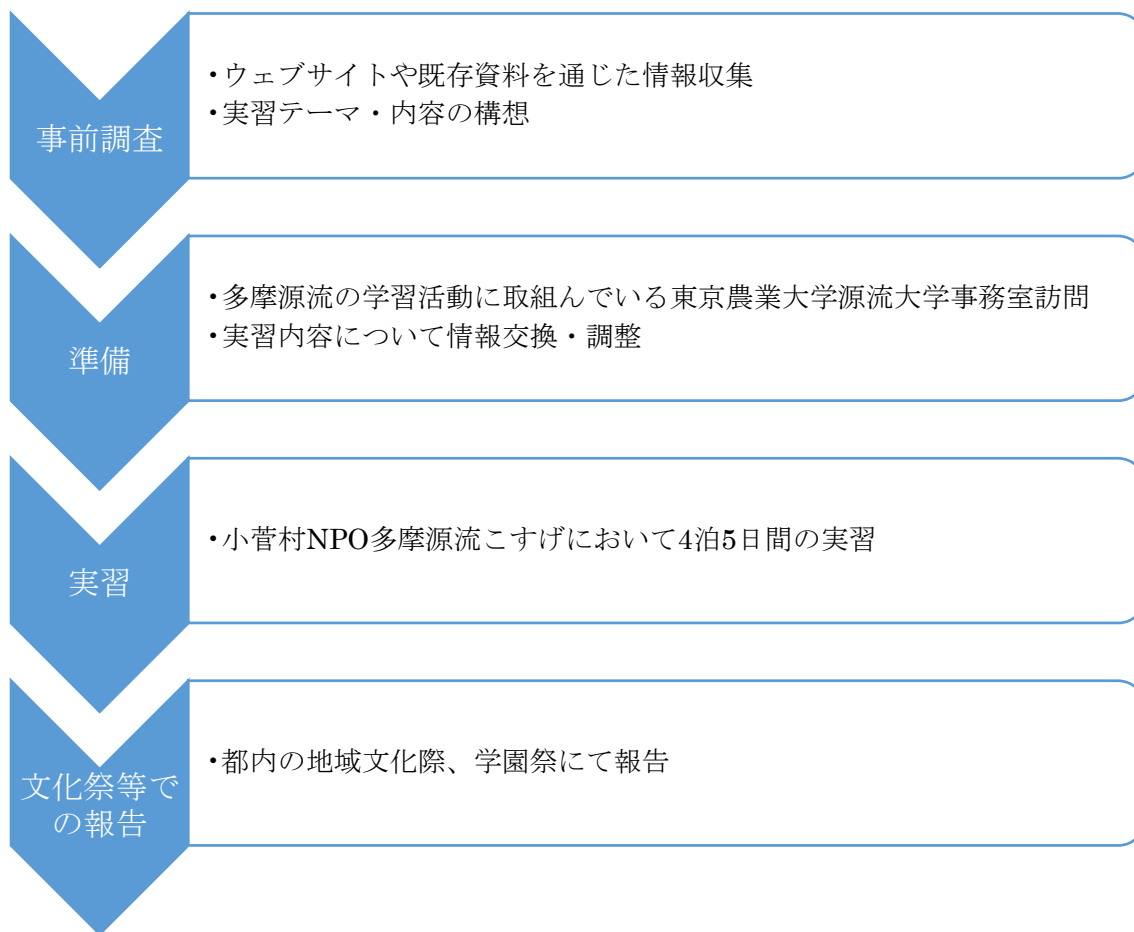
都心から車で2時間、東京都と山梨県の県境、多摩川・奥多摩湖上流に位置し、多摩源流という自然資源を有しており、山に囲まれた自然豊かな村が、小菅村です。

実習の概要

山村地域に外部の人間が入り新鮮な目で見学・調査することによって、新たな魅力を見出すこと、その魅力を活用する方法を考えることによりどのような新たな学びを地域の人たちと共に生み出すことができるのか、その可能性を模索します。

小菅村にはNPO 法人多摩源流こすげという団体があり、外部の人間も多数参加しています。そこにお世話になり、役場などへのヒアリング、インターネットの活用状況、村内の資源・図書館の見学など主に山村地域の情報環境に着目した実習をしました。

実習のプロセス



多摩川源流に位置する小菅村。村内には様々な自然・文化資源が点在している。

1. 背景

私が今回小菅村に行くことになったきっかけは大学内の講義「生涯学習施設実習」です。生涯学習施設実習は、社会教育主事の資格を取るにおいて欠かせない必修科目で、資格取得を目的としてこの講義を受けています。私は司書になることを目的にしていますが、社会教育主事講座は司書資格と重なる講座が多く、また図書館という施設が社会教育及び生涯学習に欠かせない存在であり、学んでおくことが有益だと考えたからです。

前段階で受ける社会教育計画論で地元の社会教育施設を調査し、生涯学習プログラム策定について学びました。そしてもともと私の地元（東京郊外の都市）の歴史・文化への興味が深く、講義を機により知識を深めたいという気持ちも強かったこともあり、この実習講座においても地元の生涯学習施設を中心にしたいと考えていました。

身近な地域での文化活動を中心とした実習を希望していましたので、実習候補先から自分の身近な地域から最も近い小菅村を実習地として選択しました。

2. 事前調査

（１）インターネットによる情報収集の限界を痛感

事前調査はインターネットで HP の閲覧が中心となりました。その際、データの少なさ、古さに驚かされました。事前調査である程度実習内容を想定しなければならないのですが、資料・情報共にインターネットに頼りきった自分の力では思うようにはなかなか收拾することが出来ませんでした。実習日数分の調査項目が確保できるのかと不安に駆られるばかりでした。

すでに小菅村には NPO 多摩源流こすげという外部の方々を中心となり、東京農大と連携し外部に村の魅力を発信することも行っています。自分が調査しても新たな発見が得られないのではないかという疑問を感じました。

現地の住民やすでに活動している人たちと共に、短期間に入る自分がどのような実習ができるのだろうか、ということを悩みつつ、社会教育において自分の関心を持っている図書館というキーワードも考慮に入れて、準備を進めることにしました。

（２）東京農業大学源流大学事務室での情報交換

実習を間近に控えた夏の終わりの時期、実習先とのパイプ役を担ってくれた東京農業大学源流大学事務室を訪れました。ここで現地の担当者の連絡先を教えていただき、事前調査の段階で想定された課題や実習項目の概要に報告しました。また、詳細な交通手段、バス停などを知ることができました。また、自分のほかにもう 2 名、別のインターンの大学生が参加しているということも知りました。

その後、メールにて必要なもの、宿泊施設の概要、交通手段、到着時間などを担当者へ連絡しましたが、想定している課題等についてはあまり報告ができず、集合場所から事務所に向かうまでの移動中に伝えることとなりました。なかなか思うように準備やコミュニケーションが行えなかったことが反省点として残ります。

4. 実習の内容と経過

実習の5日間は主に次の通り振興しました。

1日目 現地到着

NPO 法人多摩源流こすげの事務所にて実習内容の相談。食材の買出しなど。

2日目 村役場、NPO 法人多摩源流こすげ、小菅村観光協会、商工会を訪問。

ホームページの管理や情報発信のあり方について取材

3日目 村営図書館、小・中学校図書室の調査、村内散策の散策で写真収集。

4日目 観光資源である道の駅周辺の見学。

5日目 観光資源である三つ子山の散策。現地撤収。

（1）情報環境と HP 機能の現状から一人手不足の悩みと外部者受け入れの難しさー

村役場、観光協会など、小菅村に関係する HP を制作しているところに話を聴きに行きました。村役場、観光協会、商工会では、HP の不具合は「業者委託のためわからない」とのこと。役場 HP の管理運営は「少ない人員で回している役場なので、HP や外部への情報を提供するものは後回しになりがち」とのことです。内部への情報提供は回覧板・放送で充分行なわれているので村の暮らしの中ではあまり支障がないのかもしれませんが。気になったのは「マンパワー・資金不足」という言葉で、村内のどこでも耳にしました。

マンパワーについて I ターンや移住者の呼び込みによって改善しないかという考えを伝えると、I ターン者はあまり歓迎していない様子です。第一次産業が中心となる村のため、就職難から村への I ターンを希望した後、仕事がきつからやめてしまうこともありうるため、そうなるとうと困る、また育てるまでにコストがかかるということが懸念されるようです。

一方で私の実習受け入れ先の NPO 多摩源流こすげが管理する HP は「外部への発信」に対し意欲的です。内容も見やすく工夫している努力が見られますし、情報更新もしているようです。しかし、こちらも人手不足の影響があり、追いついていないところもあるようです。特にこうした山間地域において人手や資金不足といった地域の実情を踏まえながら、何を優先して学びと活動を促進する情報発信に取り組んでいくかということを考えさせられる経験となりました。

（2）村の図書館の機能

村営図書館と小・中学校の図書室を見学しました。村に唯一の図書館は、八つある集落のうちの中心集落にあり、実際他の集落の利用者は多くないとのこと。かつては高齢村民のための定期会が行われており、それをきっかけに利用する人が多かったそうですが、現在はその会が村役場で行われるようになり、次第に利用者も減少していったようです。しかし一方でリクエストや定期的に貸出を利用しにやってくる村民もいるとのこと。施設は小さいながらも充実しており、プロジェクター機器もあるため、今後企画などをたてることによって、利用者の増加が見込めるのではないかと思います。

村役場で図書館について聞いた話によると現在、宅配サービスについても検討中だそうです。蔵書を冊子にまとめ、借りたい本を電話で受け、村民の家まで配達し、返却は集落にある農作物集荷ボックスにまとめて入れるだけでいい、非常に簡潔なシステムで、利用者

の増加が見込めます。しかし農作物集荷ボックスが現在機能しておらず、整備に時間がかかるため、いまだ実行はされていないということでした。

小・中図書室はどちらも学校図書室として十分な蔵書があり、図書館の蔵書を一時的におくなど、連携ができていることがすばらしいと思いました。

山村と同じく孤立的環境にある離島の情報産業についても調べてみたところ、山村地域と同じような悩みを抱えながらも、近年次のような着目される取組があります。「男木島は高松港からフェリーで約 40 分、高松市の沖合約 7 キロにある人口 188 人の島だ。(中略) 男木島には、公立の図書館はない。(中略) そんな男木島で、手押し車に乗って本が運ばれてくる移動図書館の風景が定着しつつある。この手押し車は「オンパ」といい、島の名物である。細い坂道が入り組んだ島の道では、車や自転車は使えない。島の人々は、オンパで荷物を運ぶのだ。」(LRG/第 10 月号より)

離島の多くは島内に公立の図書館を持たないため、近年は本土から移動図書館として本を届けることで図書館機能を充実させています。宅配サービスと並行して行えば、より機能を拡充し、利用者増加に繋がるのではないのでしょうか。

(3) 山村の自然資源に触れる

実習中のある夜、村のヘリポートまで星を見に行きました。都会では見ることのできない静寂の星空、耳をすませば聞こえる多摩源流の音。都会育ちの私にとってとても感動的で貴重な経験でした。

ぜひこうした村では当たり前のことでも観光資源としてよその人たちにも体験できるようにしてもらえればと思いました。ヘリポートではなく安全性のある観測場を設け、泊りがけの観光プランの見どころとしても通用するのではないかと考えます

実習期間は生憎の雨に見舞われ、観光案内にもある二つの滝のうち白糸の滝しか見るこ



写真 1・2：村営図書館の様子。小さいながらも充実しており、展示も工夫されている。

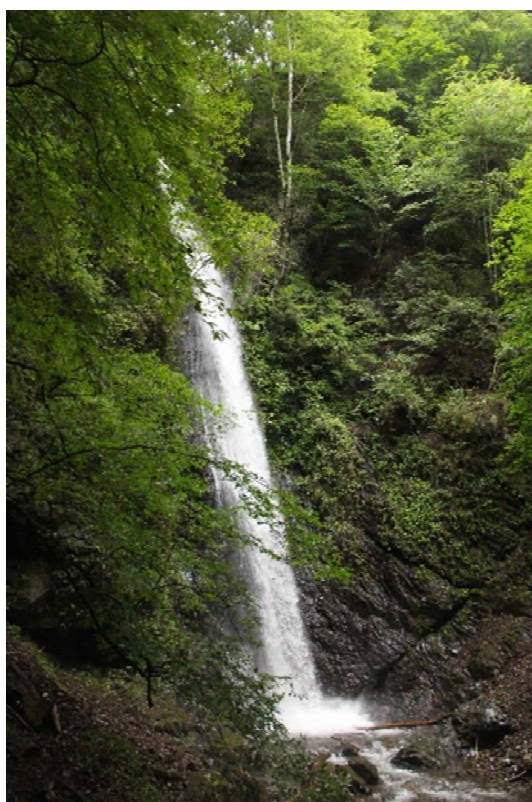


写真 3：白糸の滝

とができなかったのですが、白糸の滝周辺の森林に囲まれ澄みきった凜とした空気は心地よく、いるだけでリフレッシュ効果があります。

小菅村は山に囲まれた地形のため、各所に山がありますが、その中の三つ子山からは、村の中心となる集落を一望することができます。

唯一他の集落から離れた長作地域には長作観音堂があり、中には聖徳太子が作った如意輪観音像が本尊として祀られていますが、中をみることはできませんでした。



写真 4：三つ子山から見た小菅村



写真 5：長作観音堂

5. 実習の喜怒哀楽－成功と失敗、課題と工夫－

（１）事前準備不足の課題－情報収集とコミュニケーションの重要性－

事前調査でうまく情報収集が出来なかったことや、現地と十分に連絡をとれなかったということが現地での実習に後々まで後を引く結果となりました。特に 5 日間のスケジュールすべての見通しができなかったこと、現地につくまでの交通機関についてもぎりぎりまで知ることができなかったことは実習に大きく影響しており、残念だと感じています。

私はもともと人づきあいが得意な方ではなく、村という特有のコミュニティの中でうまくやっていけるかが特に不安要素だったのですが、事前に連絡をとれなかったこともあって、村民の皆さんや親切に担当してくれた NPO の方々とどうしても距離を縮めることが出来なかったと反省しています。

（２）村に住む外部の方々－外の力を地域に活かすことから学ぶ－

NPO 法人多摩源流こすげの方々、小菅村の村民だけではなく、外部から地域おこし協力隊として外部の方の参加しており、実習準備の際に考えた「外部の人間が入ることによって新しい発見をし、それを発信する」ということが既に取り組みされておられました。

そういった活動を学ばせていただくに際し、私が実習にいった時期が、他大学も参加している村おこしインターンシップと重なっていたこともあり、自分が参加したことで場を乱す結果につながってしまったのではないかと心配しています。ここでも特に生涯学習の実習においては事前の情報収集や調査をしっかりと行って、現場で取り組まれていることや、活動者の課題・ニーズをきちんと踏まえて、自分独自の固有の視点・課題とは何か、自分の立ち位置はどういったものなのかということきちんと自覚していることが大切だと痛感させられたところです。

様々な課題を抱えながらも、地域で実際に一生懸命取り組み、価値ある暮らしを志向している人たちと共に学びを深めていくためには、外から入る者が行うべき一種の作法や、最低限のしておかなければならない努力があるのだと深く考えさせられたところです。

6. 残された課題と今後の展望

今回の実習でずっと気になっている残された課題について自分なりに考えたことを少し触れてみたいと思います。

(1) コミュニティへのかかわり方

それは村の「人手不足」の問題です。私がお話をうかがわせていただいた中で印象的だったのは、人手不足だからといってなかなかIターンについては好意的な意見があまり見られなかったことです。移住の希望の問い合わせはあるようですが、移住の際最も課題になる職業の問題が大きいようです。小菅村の多くは一次産業で、育成コストなどの問題もあり、都心からのIターン者が歓迎されないとの話も聞きました。確かに短い期間ではありましたが村の中で過ごす村民の中でコミュニティがしっかりと出来上がっており、外部のものが数日間突然参加するには、入りづらい空気感があるように私には感じられました。私自身コミュニケーションが苦手で力不足だったということだと思いますが、ある意味既に完成されたコミュニティというのは、一つの輪になっており、そこには容易に入れない、独特の壁があるようにも感じてしまいました。

(2) 学習支援者として求められることー実習経験から考えたことー

小菅村での実習経験から、もし自分が地域の学習支援者としてこの村に外部から入ることになったことを想定したとき、どんなことが大切だろうかと考えました。私に関心を持つ図書館等の情報環境整備の視点から、学習支援者として以下のことに心がけ取り組んでいくことが大事だと考えています。

- ①地域住民の現状とニーズの把握、暮らしの中での想いに寄り添う視点
- ②自治会やNPOなど既存の地域活動団体との連携
- ③他大学の学生など他の外部活動者との連携
- ④発信する住民側と受けてである外部のユーザーの双方に配慮した情報の精査と提供
(地域課題の解決や地域活動の促進に資する図書館の役割の検討なども含めて)
- ⑤情報提供を契機とした学習プログラム設定と学習成果を活用する場の構築

以上の要となるのがやはり学習主体でありまた活動主体である村人との協働であり、共に取り組んでくれる仲間をいかに連携していけるかということなのだと思います。今回の実習を通じて地域で学ぶ・活動するための知識やスキルの不足を痛感するとともに、改めてその大切さを私に教えてくれました。地域と共に学び地域に寄与する視点を大事にしながら、今回の実習経験を私が目指す図書館司書の学びへと活かしていきたいと思っています。

Ⅲ 学習成果の活用と実践

【実習先：山形県鶴岡市 つるおかユースホテル】

報告：佐原多恵

第7章 地域の魅力発見・発信に寄与する学習活動

ー現場の人々と分かち合える学習実践を求めてー

キーワード 食事 出羽三山 庄内平野 学習支援者とコミュニケーション



つるおかユースホテルは海辺の近くの美しいブナの原生林「気比の森」の中にある。

地域紹介 - 自然豊かな山形県庄内平野とつるおかユースホテルー

庄内平野は、日本海と出羽三山に囲まれた自然豊かなところで、つるおかユースホテルも原生林の一角にあります。地域の自然・文化をいかした体験プログラムが用意されていて、ここならではの活動ができます。自然と文化豊かな魅力的な場所です。

実習概要

4泊5日の日程で行いました。朝は食事や自然についての対話、日中から夜にかけて鶴岡市、またその周辺地域の観光や社会教育関連施設へ見学に行きました。写真を撮ったり、資料を見たり、その場所についての話を聞いたりして、成果報告用の資料を集めました。

写真：実習で訪れた庄内地方の歴史・文化遺産



山居倉庫（酒田港に面した歴史ある米蔵）



酒田の大地主だった本間氏別邸の庭園

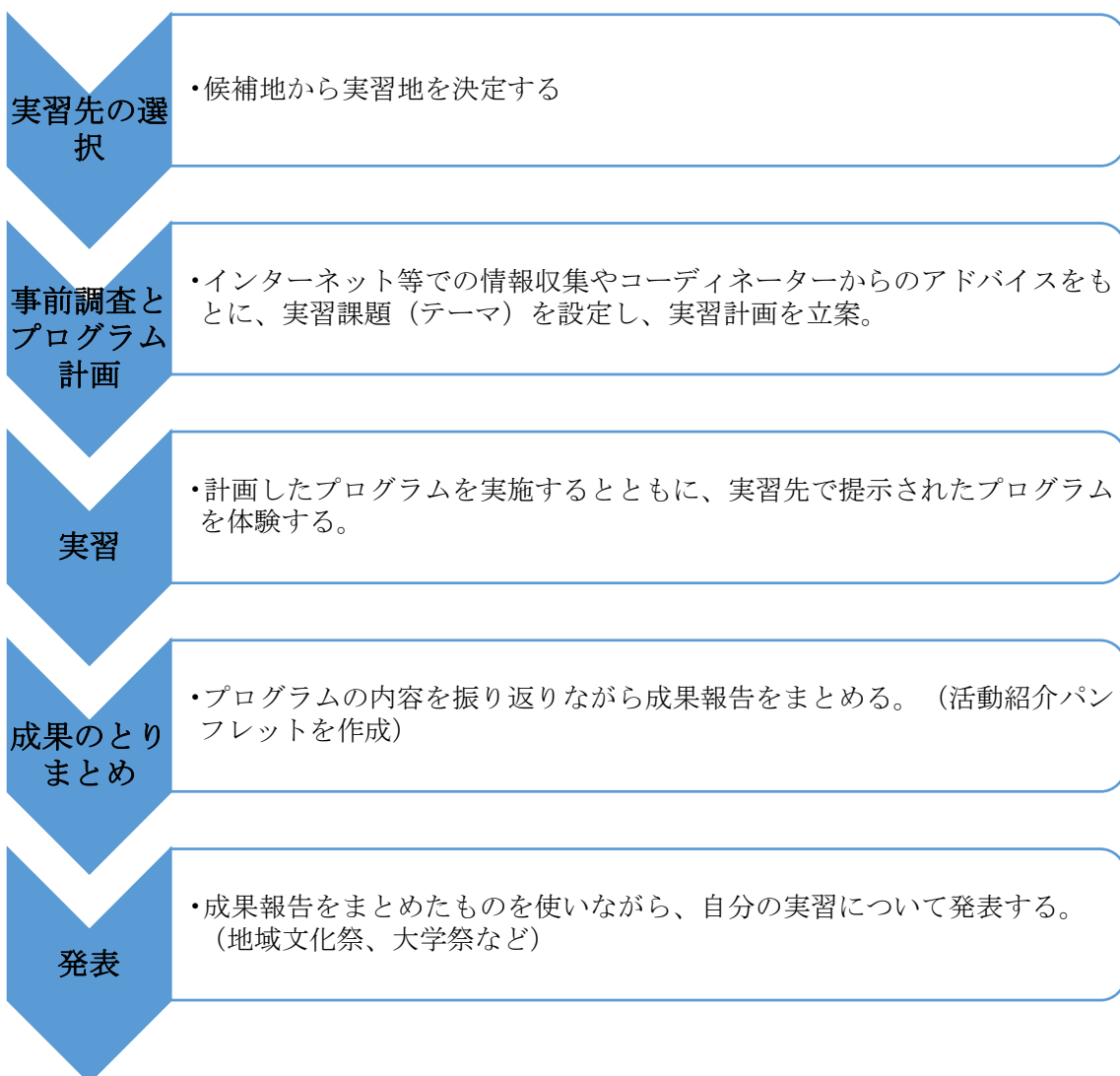


鶴岡市加茂水族館はクラゲの展示「クラネタリウム」で有名



明治維新後鶴岡藩士たちが開拓した松ヶ岡開墾場

実習のプロセス



1. 調査実習の背景ー0からのスタートー

実のところ、当初の実習活動で特にこれを知りたいとイメージを持つことができませんでした。実習先となったつるおかユースホステルは、自然豊かで庄内平野の食文化も体験できるところです。しかし、都会で育った私としては、小さい頃にガールスカウトに所属してはいましたが、ボランティア活動や地域貢献活動が主で、自然にも食文化にも強い関心を持っていたかという点、必ずしもそうではありませんでした。

しかし、実習するからには目的や課題を考えなければと思い、大学で勉強している「雑誌制作」をもとに、実習先のパンフレットを作ることをゴールとして、実習の計画を立てました。パンフレットは、読者に対して掲載された場所の魅力を伝えるとともに、制作過程において、掲載される側が、自分たちの新たな魅力を発見できる力を持った媒体だと考えています。現代において、紙媒体のメディアは衰退気味ではありますが、確実にアプローチできるのは、手に取ることのできるものだと考えています。

2. 準備ー情報収集での苦労とパンフレット制作の構想ー

授業内で実習先についてインターネットで情報収集をしましたが、特にヒットせず、記述あるホームページを見ても3年前の記事、「現時点では営業を停止している」など本当に実在するのかわかりませんでした。コーディネーターの先生は、つるおかユースホステルを経営しているペアレントの方と連絡を取り合っているので「営業していることには間違いはない」と確信を持った表情で私に言いましたが、半信半疑でした。後日、実習前の巡回から帰ってきた先生に写真を見せてもらい、今も営業を続けていることがわかりました。しかし、実習先や施設がある鶴岡市についても情報を十分に収集することができず事前調査としては甚だ心もとないものとなってしまいました。実際には、インターネットに情報が載ってなくても地域活動団体・生涯学習関連団体など個別の取り組みが存在しています。電話取材や資料を取り寄せるなど、もっと様々な情報を集める努力ができなかったことが悔やまれます。

ただ、以上のことから、「手軽にアクセスできるような情報発信はされていない」という面があるのではないかと考えました。そして成果報告用として、実習先をPRするパンフレット制作を構想しました。実習先の取り組みの魅力をアピールできるようなパンフレットを作ることを目標とし、実習先とやりとりするための計画を具体的に立案することができました。

実習直前に、受け入れ先のペアレント（ユースホステルでは支配人を「ペアレント」と呼びます）と直接連絡をとりました。何時ごろ現地に着くのか、食事はどうするのか、必要なものは何か、など確認をとるために電話で話をしました。そこで、私は実習がスムーズに進むように、「成果報告としてパンフレットを作るので、つるおかユースホステルの魅力についてぜひ聞かせてください」とお願いしました。ところが相手からの返答は「パンフレットは必要としてないから作らなくていい」でした。実習まで数日も残さないところで、私の実習計画は白紙に戻ってしまいました。いったい何が起こったのでしょうか。急に計画を変更することは不可能です。これから行く5日間、私は何をして過ごせばいいのかわからなくなってしまいました。そんな絶望感のなか、実習が始まったのです。

3. 実践内容ー地域の自然・文化・様々な学習資源との出会いー

(1) 現地調査ー庄内地域の学習ー

実習の5日間の日程は、鶴岡市と周辺地域に出かける現地調査がほとんどでした。

現地に到着し、挨拶を済ませてすぐに観光パンフレットを10冊ほど渡されました。その中で行きたいところを考えておくように言われました。翌日からのプログラムは、パンフレットの中で関心を持ったところを選んで訪問するというを行いました。

庄内平野を囲む出羽三山のうち、羽黒山と湯殿山へ行きました。羽黒山は、国宝である五重塔を見に行きました。時間の都合で本殿へ行くことはできませんでした。湯殿山は、入り口にある大鳥居が圧巻でした。本殿の参拝方法が特徴的で、ここでしか体験できないことだと感じました。この出羽三山は、山伏修行が定期的に行われるところで、山伏に関する博物館「いでは文化記念館」へ見学に行き、山伏について学びました。

鶴岡市は、城下町として栄えた文化があり、今でもそのころの建造物がたくさん残されています。致道館と致道博物館は、鶴岡の市民の暮らしの歴史について展示しているところで、特に致道館は教育に関する資料がたくさん残されていました。城跡もあり、その周りは公園になっていて、市民の憩いの場となっていました。公園の近くに図書館があり、鶴岡市の資料がよくそろっていて、知識をさらに深めることができます。

鶴岡市の周辺地域も、美術館や水族館、米蔵などの文化的に興味深いところがたくさんあります。港町酒田市にある山居倉庫は、酒田米穀取引所の付属倉庫として明治時代に建てられた倉庫で、今でも農業倉庫として使われています。二重の屋根のつくりとケヤキ並木が特徴的です。松ヶ岡開墾場は、明治維新のときに庄内藩士約3000人が刀を置き、荒れた土地を耕して桑の木を育てて蚕を飼い、絹糸を作った場所です。今でも絹や繭を使った製品を売っています。加茂水族館はクラゲが有名で、直径5メートルの巨大な水槽に漂うクラゲたちは幻想的で、観光バスも立ち寄る人気スポットです。本間美術館は国指定名勝の本間氏別邸庭園があり、展示してある美術品ともに見ごたえがありました。



写真1：湯殿山の大鳥居



写真2：旧藩校致道館

(2) 地域に根差した食事と健康を志向してーやまがた伝統野菜とマクロビオティックー

つるおかユースホステルの食事は、マクロビオティックを基本としています。マクロビオティックとは「玄米菜食」を原則とし、動物製品や小麦、砂糖、化学調味料を摂取しない食事法です。食事のバランスに独自の考え方を持っていて、食材に陰陽があり、そのバランス

をとることによって、体内の陰陽バランスを整えて体調を整えるようにしています。

マクロビオティックは日本発祥のもので、現在では世界に広がっています。ベジタリアンとの違いは、健康志向かどうかという点です。こうした食の活動に熱心に取り組んでいるユースホステルのペアレントからは「病気になった方も、マクロビオティックを導入して食と暮らしを見直すことで、健康を取り戻し、今でも元気に暮らしている」という実例を紹介していただきました。

料理に使う野菜は、国産の野菜、特に地元で採れたものを使うことにこだわっています。これは受け継がれてきた地域の特徴的な野菜の価値を見直していこうという「やまがた伝統野菜」の取組にも繋がっています。山形県行政も力を入れている施策の一つだということです。庄内地域では枝豆の一種のだだちゃ豆や、ネギの一種のあさつきなど、全国的にも有名な野菜があり、栄養価が高くておいしい野菜がたくさんあります。

つるおかユースホステルでは、地元で採れた野菜や地元で作られた食材を大切にしています。食事提供を通じて、人間にも優しく、環境にも優しい、地域全体が健康的になることを目指す活動を展開しているのです。



写真3：夕食



写真4：朝食

（3） 自然—ここにしかない豊かな環境—

庄内平野は山と海に囲まれた自然豊かな土地で、海岸沿いには漁港がいくつかあります。

夜になると、夜光虫と呼ばれる海洋性のプランクトンを見ることができます。夜光虫と呼ばれる所以は、物理的な刺激を与えることによって発光するからで、大型で軽く、風に流されて海岸に大量に集まると、キラキラと美しく光り輝きます。

山の方に行くと滝や、湧き水、樹木など



写真5：湧水



写真6：玉杉

のスポットがあります。湧き水は飲み水として利用されているのに加えて、パンやごはん、そばや酒などの調理にもよく使われています。玉杉と呼ばれる大きな杉の木もあり、そこに歴史や、自然の強さなどを感じることができました。

4. 苦勞と成果—残された課題と今後の展望について—

(1) 実習成果—挫折と振り返り—

さて、当初企画していたパンフレット制作についてですが、受け入れ先施設に話を幾度も持ちかけましたが、全て遠回しに断られてしまいました。結局、実習の中では私が取り組もうとしていたパンフレット制作は、何も進展させることができませんでした。実習内容も周辺地域の現地訪問ばかりとなってしまう、肝心のつるおかユースホステルのことはよくわからないままになってしまいました。また、現地訪問もあいにくの雨天の日がおおく良い写真が撮れず、当初私が思い描いていたような成果報告をとりまとめることが絶望的となっていました。

大きな失敗の原因は、実習先と私がやりたかったことを、調整することができなかったことだということに気づきます。パンフレット制作について5日間もトライし続けたのに少しも受け入れてもらえなかったのは、やはり事前調査の不足や実習先とのコミュニケーション不足に原因があるのではないかと反省させられます。このようなフィールド実習で大切なことは、やるべきことややりたいことを明確化するだけでなく、実習生と実習先ともにそのことについてよく理解しあえるようにしていくプロセスではないかと思います。その最初の一步を踏み外してしまうと、今回のようなミスマッチを起こしてしまうのかもしれません。

(2) 学習成果—社会教育・生涯学習論の学びを振り返って—

確かに目標（実習経験を基にしてパンフレットに取りまとめること）を達成するという点では、今回の実習はあまりうまくいかなかったと言えるかもしれません。しかし、そのような結果になったからこそ、今まで社会教育・生涯学習について自分に理解が足りていなかったことがわかりました。今回の実習経験で、社会教育・生涯学習論において、以下の3つの観点を学ぶことができました。

1) 生涯学習施設としてのユースホステルの役割

ユースホステルは外から来た人と、自然・文化・歴史などの学習の場を「つなぐ」役割を持っています。実習では、現地調査として様々な場所に行きました。それらはユースホステルのペアレントが、ユースホステル利用者（つまり学習者）と学習の場をつなぐ機能を果たしていたからだと言えます。確かにユースホステル自体も学習の場になりえますが、ユースホステルは、学習者の窓口として大きな機能を持っていることがわかりました。

2) 学校教育と社会教育の相違点

社会教育は、学習内容に規定があるわけではありません。学校を想定した教育とは内容が大きく違うこともあり、戸惑いがちです。また、地域に関する学びを生涯学習的な立場で行おうとすると、難しいこともたくさんあります。ここで重要なのは、相手の思いやニーズを把握し、寄り添うことです。相手がどのような考えを持ち、自分に何を伝えたいのか。まず

は地域の学習主体・活動主体に寄り添う視点を持つことで、コミュニケーションがスムーズに始まり、様々な情報を引き出すことができるのではないのでしょうか。

3) 実習で考えた生涯学習の本質の一端—実習者と実習先の学びの関係性—

司書や学芸員、教職員の实習と社会教育主事の实習は大きく違います。学習支援者という立場は変わらないと思いますが、特に学習者が求める内容が多種多様であるのが社会教育主事ではないかと考えます。したがって自分が支援しようとする学習者から学び、学習者と共に新たな学びを創出することに取り組むという姿勢が求められると思います。

教える—教わるという立場だけでなく、互いに学びを深めていくプロセスを大事にしながら、活動をよりよくしていくための協働方策を模索しあうことが大事なのではないかということを感じました。

(3) 実習先をよりよく知るために—対外アプローチの必要性—

実習でお世話になったつるおかユースホステルは、豊かな環境、健康面に配慮した食事など、そこにしかない、そこでしか体験できないことがたくさんあります。しかし東北の震災以降、観光客は減り続けています。実習活動を通じて対外アピールのパンフレットを構想した理由の一つは、その魅力をぜひ多くの人たちに伝えたいという思いがあったからでした。一方で、ペアレントの方は、メディア、特に宣伝のようなアピールをあまり好んでいません。「ここに魅力を感じて、真に理解できる人は自然と集まってくる」と話してくれましたが、やはりそのような人々も含めて、きちんと情報を届けるという意味でも適切な情報発信も必要ではないかと私は考えています。私の学んでいる出版・編集という分野でこのような取り組みを、現場の活動者の想いを汲みながら、どのようにアプローチできるのか、引き続き考えを深めたいと思っています。

(4) 今後の展望—施設の活動と学習の価値を広げていくために—

私としては、今回の実習先施設であるつるおかユースホステルのような活動に対して、心の底から惹かれるような人に、適切な学習情報を届ける活動をすることによって、施設の活動と利用者とのマッチングを、より促せないものだろうかと考えています。地元の利用者は安定しているようですので、地元以外でもぜひこの取り組みの価値に共感する人々を増やせられるといいと思います。

具体的には、学習観光の拠点としてユースホステルをすすめたり、ユースホステルの取り組みの価値を伝えられるような資料を作ったりして、今までつるおかユースホステルを知らなかった人に伝える活動、学習窓口につなぐ活動を、社会教育主事の立場から進めていく方法もあるのではないかと考えます。

後日、実習経験を基に試みにパンフレットを製作してみました（次ページ掲載資料参照）。表紙に大きく載っている写真はつるおかユースホステルに入ってすぐのロビーの写真です。つるおかユースホステルは建造物としてはとてもユニークな形をしていて、ロビーの吹き抜けを取り囲むように客室があります。その客室は階段状になっていて、同じ高さにある部屋が90度回った対角の部屋しかありません。階段だらけです。中のページには、観光についての案内を掲載。昼に行く場所、夜に行く場所、食事について載せています。裏表紙には、つるおかユースホステルへのアクセス、基本情報を載せています。

5. まとめ—地域に「寄り添い」学んでいくということ—

今回の実習は、私にとって反省点が多く、社会教育主事になるために適切に取組めたかどうか、自分の中では結論が出ていません。社会教育主事は、様々なことに興味を持ち、調べ、知っていること、そして何より大切なことは「教える」だけではなく、他者から学ぶ、学習者から学ぶという姿勢だと思います。ですから社会教育主事になるために、自然体験を必ずしなければいけないわけでもなく、まずは自分のできることから始めていけばよいのだし、もし自分のできることが相手とマッチングしていないのであれば、相手が必要とする人材を紹介し、つないでいくことができればいいのではないかと考えます。無理に自分だけで解決しようとしても、うまくいかない結果となるのではないかと思います。パンフレット製作しか計画をしていなかった私自身の実習経験で、それが痛感させられます。

また、実習先の考えに自分が寄り添っていく意識を持たないと自分の学習にもなりません。社会での学習活動の中では自分の人生の中にない考え方や、自分では受け入れにくい考え方をもち相手と関わる人が多いのではないのでしょうか。そこで、自分を閉じてしまうのではなく、相手から様々な知恵や価値を引き出すつもりで寄り添っていくことが必要になるのではないのでしょうか。

そうしてコミュニケーションをうまくとらないと、相手から拒絶されてしまうかもしれません。これでは、お互いに学習を進める上で雰囲気が悪いものになってしまいますし、効果のあがらないものとなってしまいます。地域社会で学ぶ上で大切なことは相手を良く知ることではないのでしょうか。「寄り添う」ということについてふれましたが、それと似ていると思います。短い期間では相手を深く知ることは難しいですが、ここで手を抜いてしまうと、お互いを理解できず、知識や技術に満足しても、本当の学びにつながらないような気がします。

私自身、相手に寄り添い、互いに学習しあう考えをもって今回の実習を行えていたら、パンフレット制作よりももっとつるおかユースホステルに合った対外的なアプローチ方法を見つけることができたかもしれません。

最後に余談となりますが、今回の実習で関心をもったことの一つに、山形の伝統（伝承）野菜があります。やまがた伝統野菜は、研究がかなり進んでいて、本が何冊か出版されているようです。こうした実習の学びで得た一コマも貴重なものとして受け止めて、大切にしていきたいと思います。

つるおかユースホステル に泊まりませんか？

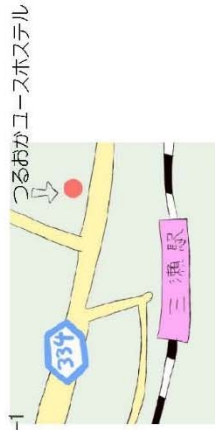


Information

つるおかユースホステル

〒999-7463

山形県鶴岡市三瀬宮の前 1-1



○施設概要

収容人数：52人

チェックイン：16:00～21:00(夕食予定者は19:00まで)

チェックアウト：5:00～10:00

休館：臨時休館あり

○料金

標準料金

会員 本体価格 2600円(税込価格 2808円)

一般 本体価格 3200円(税込価格 3456円)

朝 本体価格 500円(税込 540円)

夜 本体価格 1000円(税込 1080円)

特別食 本体価格 2000～3000円(税込 2160～3240円)

○アクセス

JR 羽越本線三瀬駅より徒歩 15分

または鶴岡駅よりバス(湯海行) 鶴岡ユースホステル前下車、徒歩 5分

ユースホステルとは？

ユースホステルはドイツで生まれ、その歴史は100年以上。約80の国と地域に4000か所以上の宿泊施設があり、日本には北海道から沖縄まで約220か所のユースホステルがあります。

つるおかユースホステルは、山形県鶴岡市にある自然豊かなユースホステルです。ここではマクロビオティックの食事を提供し、自然と共に生きることを大切に考えています。

鶴岡公園周辺

鶴ヶ岡城の跡地になつて
いる鶴岡公園、藩政だった敵
道館など、鶴岡の歴史を感じ
られるところです。近くに市
立図書館もあり、鶴岡の歴史
に興味を持ったならとこと
ん知ることができます。



↑致道館



↑羽黒山 五重塔

↑爺杉 (羽黒山)



出羽三山

羽黒山・月山・湯殿山の三
つを合わせて出羽三山と呼
ばれます。修験道で有名な
山々ですが、国宝に指定され
ている五重塔があつたり、蛇
を脱いで参拝するところが
あつたりと、修験道に詳しく
なくとも魅力的な場所です。



↑湯殿山の鳥居

↑玉杉 (熊野神社)



↑須賀の滝と橋 (羽黒山)



自然に触れる

山、海に囲まれた庄内平
野は自然豊かです。山には
川に向かって美しい湧水が
絶えず流れ出しています。
ここでしか触れることで
きない自然が数多くありま
す。



加茂水族館・酒田エリア

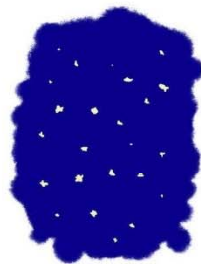
美術館や水族館に行くのも
おすすめです。クラゲで有名
な加茂水族館、庭園がきれい
な本間美術館、歴史ある米の
倉の山居倉庫など、見どころ盛
りだくさんです。

↑加茂水族館のクラゲ



↑本間美術館「鶴舞園」

↑山居倉庫とケヤキ並木



↑夜光虫のイメージ図

夜の楽しみ

温泉施設が充実してい
て、お食事価格で、一日の疲
れを癒すのにぴったりのス
ポットが多くあります。
また、夜光虫といつて、発
光性プランクトンがいる。海
を見るのも大かぜません。
夜の日本海にキラキラと光
る幻想的な光景は一度見て
おきたいものです。

朝ごはん

つるおかユースホステル
で食べる朝ごはんは、マクロ
ビオティックという玄米菜
食の食事でもとても健康的で
す。地元の野菜をたくさん使
ったご飯は、心と体を満たし
てくれます。



↑つるおかユースホステルの朝ごはん

【調査地：新潟県粟島浦村】報告：阿部雄太 阿部ゆり 内田歩実 角田祐基 高橋咲紀
佐原多恵 花岡史悠 土方優紀 眞野聡美 幅野裕敬

第8章 粟島しおかぜ地域共生プログラムの構築研究

ー島資源を活かした学習・ツーリズム・産品開発と首都圏連による雇用・定住促進策の検討ー

キーワード：離島 地域づくり 参加協同の地域調査 学習プログラム開発 世代間交流



写真1：豊かな海と里山に囲まれた粟島の集落

地域概要

粟島浦村は人口 350 人余り、日本海に浮かぶ周囲 20km ほどの離島の村です。本土側からは新潟県最北端の市である村上市より汽船で 1 時間半ほどの位置にあり、澄んだ海と豊富な海産資源、かつては野生馬を育んだ里山の恵みが魅力です。西海岸は日本海の荒波に洗われた岩礁地帯となっており、まさに絶景と呼ぶにふさわしい風光明媚な景観が広がっています。

近年、過疎・少子高齢化が進んでおり島の人口も最盛期の半分以下となっています。人手の不足から島環境の劣化や里海における生業の低迷などが危惧されています。村では島外の子ども達を島の学校に受け入れる「しおかぜ留学」や島への移住促進につなげる観光事業など、島外の人々との連携協働による人づくりと島の活性化を模索し始めています。そのため島民と島外者が協力して、島作りのために共に取組めるもの（こと）の掘り起こしが求められています。

活動概要

粟島浦村の自然・文化・人材資源を活用し、島外者が島内住民とともに取組むことができる島づくりプログラムの作成を行いました。プログラム作成のために島民と共に、①地域調査と調査に基づいた試行プログラムの作成、②プログラムの試行、③首都圏でのプレゼン・プロモーション活動、④事業化に向けた体制整備検討を行いました。

以上の結果、島内外の参加者が協働できるものとして、主に島の高齢者が担ってきた里山・農業、手仕事（民具づくり）、郷土料理、共同作業・年中行事に光を当て、これらを構成要素とした学習観光プログラムを構想し取りまとめました。

事業プロセス

現地調査と住民 とのワークショ ップ

- 予備調査
- 本調査（現地調査・検討ワークショップ）
- 追加調査

試行プログラムの 作成と検討

- 現地調査のとりまとめと分析
- 試行プログラム案の作成
- 試行プログラム案の住民との検討

試行プログラムの 実践と修正

- 試行プログラムの実践
- 実践結果の振り返り
- モデルプログラム作成に向けた修正・課題点の抽出

首都圏における プレゼン・プロ モーション活動

- 豊島区公共施設におけるプレゼンテーション
- 大正大学イベントにおけるプレゼンテーション
- 離島物産展におけるPR

モデルプログラ ムの作成と実施 体制作り検討

- モデルプログラムの作成
- 実施体制と事業化へ向けた検討

1. 調査研究の目的

粟島浦村の自然・文化・人材資源を活用し、島民とともに島外者が取組むことができる島づくりプログラムを作成することを目的に、「島の潜在能力の再発見」「日常生活に依拠したプログラム開発」「『地域人』育成」「首都圏連携による活性化」を主要な要素として組み込んで、研究調査を進めました。

島民の潜在能力再発見	・地元学（地域調査） ・地域内コミュニケーション活性化 ・島の多様な人材掘り起し
日常生活に依拠したプログラム開発	・暮らし資源の再認識・活用策の検討 ・島民の営み自体が地域資源として活用できるプログラムの検討
「地域人」育成	・地域志向の島民・島外人材育成 ・島民が元気に暮らす魅力を創り出すことを基盤に、I・Uターン者への訴求力を向上
首都圏連携による活性化	・「地方・都市共生」視点の導入 ・「すがもアンテナショップ」構想の検討 ・豊島区からの教育ツアーなどの展開を模索

図1：調査研究の意図と構成要素

2. 調査研究の概要と方法

研究目的を達成するため、新潟県粟島浦村内浦集落及び釜谷集落をフィールドにして以下の調査研究を行うとともに、首都圏でのプレゼンテーションやプロモーションに資するPR活動を実施し、島づくりのモデルプログラムを取りまとめました。

- (1) 現地調査と住民とのワークショップの実施（実施期間：7月3日～8日、8月2日～8日、9月6～8日）

粟島浦村内浦・釜谷集落において住民と共に現地調査を行うとともに、調査結果を共有し活用するための検討ワークショップを実施。

- (2) 試行プログラムの作成と検討（実施期間：8月～10月）

調査結果を踏まえた島づくりに資する試行実践プログラムを作成し、関係住民と共に試行実践に向け検討。

- (3) 試行プログラムの実践と修正（実施期間：11月13日～15日）

試行プログラムを実践し、その有効性や課題について検証。

- (4) 首都圏におけるプレゼンテーション・プロモーション活動（実施期間10月～11月）

豊島区公共施設、大正大学イベント、離島物産展等において、本調査・研究成果をプレゼンテーションするとともに、作成したモデルプログラムのプロモーションにつながるPR活動を実施。

- (5) モデルプログラム作成と実施体制づくりの検討（実施期間12月～3月）

試行実践やプレゼンテーション結果を踏まえてプログラムを修正し、モデルプログラムとして取りまとめるとともに、その実施体制について検討。

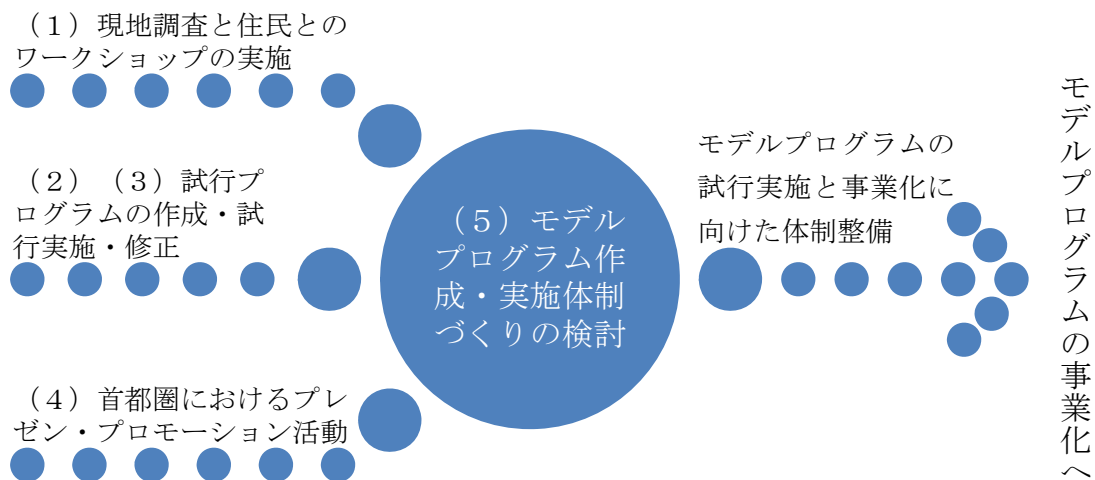


図2：調査研究の方法とプロセス

3. 調査研究の実施

(1) 現地調査と住民とのワークショップの実施

栗島浦村内浦・釜谷集落において住民と共に現地調査を行うとともに、調査結果を共有し活用するための検討ワークショップを実施しました。都心から離島を訪れた私たちにとって、驚きと戸惑い、様々な感動がある経験となりました。

1) 栗島についての印象、都心との違いを実感

島に到着して最初に出会ったのは美しい海の景色です。とても綺麗で、まるで沖縄や小笠原のような色で島とのコントラストが抜群で感動しました。島は内浦地区と釜谷地区の二つに分かれており、山によって分断されています。移動手段としては、山を横断する陸路か、海から島外を周って行く海路の二つになります。都内での移動手段としては、基本的に車や電車という陸路であったため、海路で移動ということが新鮮です。島に到着したのはお昼の時間であるにもかかわらず、車や人の声はまばらで波や虫の音しかしないほど落ち着いた場所であると感じました。

一方で携帯電話の電波が悪く、スーパーは一つしかないため当初不便性を感じてしまいました。また、夏ということもあり虫（主にアブ）が大量に生息しており、同行した教員以外の学生メンバーの多くが慣れていないため苦戦を強いられました。

2) 島民の方との出会いと島資源に根ざしたコミュニケーションの工夫

港から歩いている際、私たちの服装や荷物から島外から来ていることがわかったようで「いらっしやい」や「こんにちは」など積極的に声を掛けてもらいました。ただ、訛りが強いと聞き取れないことが多々あり、とくにお年寄りの方はその傾向が顕著です。言葉だけに頼らない、島の実物のもの・ことを活かしたコミュニケーションの重要性が実感されました。

3) 現地調査 - 地区をグループごとに分かれ地元住民の方と一緒に魅力や特徴を調査 -

①現地調査の様子

海、食、農業、里山に分かれて地域調査を実施しました。編成は一グループに学生が2～3名、地元住民の方が3～4名で取り組みました。

地域の方と一緒に歩くことで、地元の方にとっては当たり前になっていることも外部の人間からは魅力に見えることや特殊に感じるという発見をすることができました。調査前の地元の方たちは魅力なんて何もないと自信がない様子でしたが、実際に調査を始めると学生から都会にはないということで多くの発見がありました。また、地元の方からも「こんな伝説があるんだよ」ということや「ここは今廃れているが昔は使われてた」などの情報も出てきて、忘れていたまたは気付いていない魅力が多く再発見されました。



写真1：島の農地の作物について案内していただく

②収集資料の取りまとめも地元の方々と共に

調査後、夕刻から調査の取りまとめ作業（写真の印刷、資源カード整理、マップ作り）をおこないました。各グループが集めてきた資源カードと写真を地図に書き込むことで、どこに何があるのかをまとめました。できあがったマップを見て、地域の方から「そういえばここにはこれがある」や「こんなにいろいろあったんだ」といった新たな意見、驚きがありました。子どもの頃遊んでいたなどの昔のことを思い出し楽しそうな笑顔を咲かせていました。

自分たちで調べ、調べたことを基にして検討していくということを、地元の方々と共におこなっていくことの大切さを実感しました。

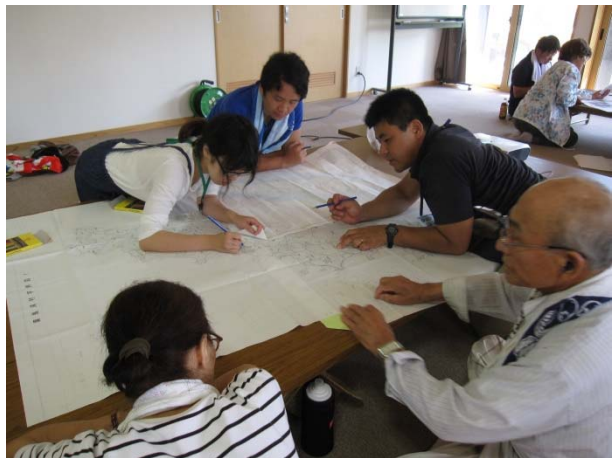


写真2：現地踏査で分かったことを地図に記載し確認

4) 漁業の様子を取材

①漁業分野における協働可能性の検討

集落周辺の調査のほか、私たちは島の漁業の現状を見せてもらうため、漁船に乗り、定置網漁を見学しました。漁業分野において島外者が共に出来る活動があるかを確認するためです。漁業の実態がどうなっているのかを確認することと、漁の様子を映像や筆記で残すということをおこないました。そのため、人員を撮影・記録・荷物の管理の3つに分けて取材活動をおこないました。

②取材の流れと内容

漁は早朝から行われるイメージが強いと思いますが、今回見せていただいた漁もまた早朝からのものです。漁船が出る港は私たちの宿泊している施設がある釜谷地区ではなく、島の反対側にあたる内浦地区にあります。そこで公共交通機関等が確保できない早朝、宿泊施設からは徒歩で集落間を移動しました。街灯もなく、一台として車の通らない国道をひたすら歩くナイトハイクを楽しみながら、予定の時間よりも早く港に到着する



写真3：漁船に乗って定置網(大謀網)漁を見学

ことができました。その後、漁師さんたちが到着し、船を出せるかどうかを確かめに行ってくださいました。少し潮の流れが速かったものの、無事出港し、私たちは漁場へと向かいしました。船の上で漁師さんたちが準備をしたり、作業をしたりする様子を撮影したり、記録を取ったりした後、船は港へ帰ってきました。

③現地調査を行う上での留意点

調査をする中で難しかったことは、調査をさせていただく場において、そこで動いている方の邪魔をしないということです。当たり前のことのように思いますが、私たちは調査の対象となることに関して下調べはできても、基本的に経験できないことの方が多くなります。そのため、実際にその場に立ったときに人の動きを見てひたすらによけ続ける事しか出来なくなります。経験のない人間が現場で動く人の動きを予測することは難しいですが、対象の邪魔にならないよう調査することが重要です。

④事前調査・学習の重要性 - フィールドの細かなところまで気を配ること -

第1に、行き先のことは交通手段から歴史まで下調べしてから行った方がよいという点です。今回、下調べがあまりできていなかったために、私たちは徒歩移動になったり、バスを延々と待ったりすることになってしまいました。その他にも、地元の方々と話す上で、知らなかった、で済むことばかりであるとは限らないので、必ず下調べをしてから行くほうが良いと考えられます。

第2に、体調を万全にしておくという点です。調査は天候や周囲の環境がよいところで行われるとは限りません。どんな調査でも最後まで行えるよう、体調は万全にしておきましょう。移動が車や電車等であるとは限りませんし、今回のように船を使う場合もあります。そこで体力を使い切ってしまうのは元も子もありません。

第3に、準備は念入りにしておくという点です。下調べの大切さと通ずるところがありますが、想定できる事態には対応できるよう準備しておくことは大切です。街灯のない道を懐中電灯なしで歩かなければならなくなるかもしれませんし、移動手段は船かもしれません。今後の私たちの学習活動においても事前調査のための情報収集能力を高めるということが大きな課題だと痛感した経験となりました。

5) 情報共有のための発表会

①地域住民と研究調査背景を共有することの必要性を実感

グループごとに発見したことなどの調査結果の発表を行いました。その際、地域の方から、「調査をして何になるんだ?」と言った意見が出ました。この質問からも調査に協力していただく地元住民にとって、どういう目的があり、結果として何を得ることができるのか、それをどう活かしていくのか明確に示すことが重要だということが分かります。今回の調査は、外部者がかかわることができる島の営みの再生と元気作りにつながる活動の創出ということをテーマにおいています。そのためにまず都心の人と地元の人に関わることで地域の魅力（都心との違いにより）を発見する取り組みをおこなったわけですが、地域調査においてはこのような経緯を地元住民と共有しながら取り組んでいくことが大切だということを改めて学びました。

②島の里山・農業への着眼

当初、離島での取り組みはなんといっても海洋資源を活かしたものだというイメージがありました。しかし調査の結果、島の里山や農業の営みに光が当たる結果となりました。

それは、離島という環境でありながら粟島は水に恵まれているということへの驚きと関係します。島内の里山・畑の維持管理は、山菜、農産物だけでなく、その独特の地質構造とあいまって、豊かな水を育み、海の恵みを作りだしているからです。海の生業にかかわるには、定置網漁をはじめとして専門性が必要とされるため島外者では難しいということが明らかになりました。一方で、農業分野は、島外者にとって作り方が本島と共通するところが多く協働できるのではないかという発見がありました。また、畑の管理をしているのはおばあちゃんであり、すべてを手入れしきれていないのが現状となっており、島側にとっても参加誘引の要素が見られると考えられます。

③島の高齢者の「お手伝い」をテーマに里山・農業そして生活文化への着眼

島内資源のキーとなるフィールドとして里山と農地という結果になりました。そして、集落の伝統文化の担い手として、郷土料理・菜園作りと島内女性の役割に注目しました。これまで、外部者＝観光客という構図がありました。それを共に協働して取り組むことができる新たな外部者を新規開拓することをねらうことも期待できます。

島のお手伝いプログラムとして、畑の手入れ、里山の手入れ、山菜取り、郷土料理や民具作り、行事や共同作業等を外部の者と一緒に取り組むというプログラムを構想することになりました。



写真6：調査結果を住民と共有し、意見交換

(2) 試行プログラムの作成と検討

現地調査の結果、写真画像約 1000 枚、地域資源カード約 300 枚、地域資源を活用した学習プログラム 7 案、地域情報マップを作成しました。それらの資料とワークショップで収

集した意見を集約し、里山・農業、生活文化、共同作業・年中行事に焦点を当て、これらの営みに協働（お手伝い）できる試行プログラム作成を検討しました。

その構成内容は次の通りです。

背景と方向性	①島内資源の保全再生のキーとなるフィールドとしての里山と農地 ②集落の伝統文化の担い手として、工芸品・郷土料理・菜園作りと島内女性の役割に着目 ③現在の観光シーズンは7～8月に集中、それ以外（特に11～4月）の期間のプログラムが必要 ④外部者が関われる島の営みの再生・元気作りにつながる活動構築（これまでの外部者＝観光客＝お客さん、ではなく、共に協働して取り組むことができる新たな外部者を新規開拓）
テーマ案	「栗島の恵みを生み出すおばあちゃんとの出会いとお手伝い」 ①島のおばあちゃんの知恵・・・島の農業・郷土料理 ②島の里山と畑と海の恵みのつながり・・・生物多様性、鳥獣害軽減、ミネラル供給機能「島の里山と畑は、海を耕す」 ③島人とのコミュニケーションと共同で育む集落行事と伝統文化
意図・構成要素	・プログラムの意図 島内の里山・畑の維持管理は、山菜・農産物だけでなく、その独特の地質構造とあいまって、豊かな水を育み、海の恵みを作り出している。 新たな保全型エコツーリズムとして、恵みを楽しむだけでなく、恵みを作り出すための島の生業・暮らし・日常生活を、おばあちゃん（おじいちゃん）のお手伝いを通して、貢献し体感するプログラム。あわせて文化伝承と恵み体験をセットする。島内の現在のニーズを踏まえて観光シーズンオフ中の取組みが主として構想する。 ・構成要素 プログラム構成要素として①～③の組み合わせで構成 ①島のお手伝いプログラム 畑の手入れ、里山の手入れ、山菜取り、収穫、冬囲いの手伝いなど集落共同作業への参加とコミュニケーション ②伝承プログラム 郷土料理の作り方伝承、工芸品作り伝承、伝統行事の手伝い・参加 ③島の恵み体験 海の恵み体感（漁・わっぱ煮など既存の観光資源やプログラムの活用）

以上を踏まえて、私たちが再び島を訪れる11月に実施可能な試行プログラム計画を、次の通り策定しました。

プログラム1 畑お手伝い（豆・大根など）	・各畑へ集合・説明・準備 ・お手伝い（豆収穫、大根収穫、大根の冷蔵庫作業、運搬作業） ・後片付け
------------------------------------	---

プログラム2 郷土料理会（大根料理、煮物等）	・ さっこい交流館へ集合・説明 ・ 調理・会食・後片付け
プログラム3 山（竹）仕事お手伝い、 テゴ編み体験	・ 山仕事：枯れ竹整理→青竹伐採→箸作り・お椀作り ・ テゴ編みその他 (資料館にて、道具の説明込みでの体験学習回の実施)

（３）試行プログラムの実践と修正

1) 試行プログラム実践の概要

試行プログラムの実施に当たっては、図3のチラシを作成し、広報と募集をおこないました。学生5名、教員1名の他、首都圏より一般3名（子ども2名含む）、島内参加者10名程度の計20名程度の規模で実施しました。

当日はあいにく雨天となったため次のように内容を変更することとなりました。里山分野：竹林の管理作業を予定していたが雨天のため中止。農業分野：畑での作業を予定していたが内容を変更し、屋内におけるマメ選別作業をお手伝い。生活文化：テゴ編み、郷土料理教室を予定通り実施。また晴れ間を見てアジ釣り体験を行いました。

2) 試行プログラム実施結果

参加者からの体験記から試行実践内容の結果と検討内容について振り返ります。

①農業分野：マメの選別作業

・ 外部者参加の可能性と「一人娘」の現状

粟島には主力商品の1つである「一人娘」という大豆があります。この大豆栽培を理解すると同時に、外部者が作業に参加可能であることを確認するために、私たちは豆の選別のお手伝いをさせていただきました。この豆は、現地のおばあちゃんたちが味噌を作るために使用されているものです。さらに最近では、島内の中学生のキャリア教育の一環として、この大

粟島秋のお手伝いツアーの実施のお知らせ

大正大学では、今年夏より島の人たちと島外者で共に取り組むことで島の活性化につながるプログラムについて検討してまいりました。その成果を活用した秋のお手伝いプログラムを実施します。ご参加・ご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

■日時 11月14日（土）13:30～19:00 15日（日）9:00～11:00

■場所 島内の畑や里山（郷土料理教室はさっこい交流館）

■日程

- ・ 11月14日（土）＜1日目＞
 - 13:30 役場集合・移動
 - 14:00 プログラム1 おばあちゃんの畑お手伝い（内浦・釜谷地区）
 - ・ 豆・大根収穫・運搬など
 - 16:30 プログラム2 郷土料理講習会（さっこい交流館）
 - ・ 大根料理・煮物他、季節の島料理
 - 19:00 1日目終了
- ・ 11月15日（日）＜2日目＞
 - 9:00 資料館前集合
 - 9:15 プログラム3 島伝統の竹林整備講習会（宮口）
 - ・ 草・細木刈・枯竹整理・竹伐採・運搬集積
 - てご編み講習会（資料館2階）
 - ・ てご編みによる小物類づくり
 - 11:00 終了・温泉

■持ち物など

畑仕事・山仕事に適した服装でご参加ください。

帽子・軍手・長靴・フードつきパーカーなど。

■問い合わせ・連絡先など

大正大学地域構想研究所（出川）TEL 03-5394-3048

E-mail s_degawa@mail.tais.ac.jp




図3：試行プログラムのチラシ

豆を利用した新たな製品の開発を行っています。おばあちゃんに教わりながら、現地の子どもたちと一緒に作業をしました。

・作業の進め方―地元の子どもたちも初体験の豆の選別―

はじめに、おばあちゃんが実際に選別をしている様子を全員で見ました。選別をしながら使える豆と使えない豆の特徴を教えてくださいました。現地の子どもたちですら、この作業をすることは初めてだったようで、みんなで話し合いをしながら作業を進めていきました。豆の量も非常に多く、直径 30 cm ほどのざるに約 3 つ分ありました。基本的に傷がついてしまっている豆は使えないものなのですが、小さい傷であれば使えるとのことだったので、その線引きが非常に難しかったです。選別が終わり、おばあちゃんに確認してもらってもその中からまだまだ使える豆が出てきて、1 度や 2 度やっただけでは完璧にできない作業であることを実感しました。作業をしている最中は、子どもたちやおばあちゃんと話をしながら、また自分で判断できない豆は判断してもらいながら作業を進めていきました。

・お手伝いのためには事前学習が重要

今回は、収穫した豆の中でもごく一部を選別しましたが、実際はもっと多くの豆が収穫されています。体験させていただいた量だけでも多いなと感じましたが、これよりもっと多くの豆を各家庭のおばあちゃん、おじいちゃんが一人で作業をしているということを知ることができました。これはおばあちゃんたちの時間をそうとう奪ってしまっているのではないだろうかと考えました。反省点としては、まったく知識のない状態で手伝うことになってしまった点です。晴天であれば、畑仕事の体験をした後に豆の選別のお手伝いをする予定でした。畑仕事の大変さも知る事ができれば、さらに良かったのではないかと思います。また、コミュニケーションをとる点でもあまりスムーズにいきませんでした。これは全体的な反省というよりは個人的な反省になってしまいましたが、大学生活の中でコミュニケーション能力を身につけておくことは、実際に現場に出た際に非常に重要になってくると感じました。



写真 7：おばあちゃん（左）を囲んで豆の選別作業

・プログラム化に向けた課題―天候・能力・ニーズとのマッチング―

今後プロジェクトとして展開していくと考えると、作業としては小学生から 30 代前半くらいまで幅広い年代の人が参加できるものと考えられます。豆の選別のお手伝いだけをするのではなく、畑仕事から参加することによって、普段都会では体験することのできない作業をすることができ、さらに豆の選別という栗島ならではの作業も行うことができます。しかし、この作業は天候に大きく左右されてしまいます。天候に恵まれなければ行うことができないため、その点について考慮する必要があると感じました。

②生活文化分野：テゴ編み

・テゴ編みについて

栗島で昔から使っている物を入れるための道具です。各家庭にテゴを作る道具があり、手作りしていました。海で取った海藻を入れるのに使ったり、畑の収穫物を入れたり・・・。

今回の「てごあみ会」では、日常でバッグとして使用できるように工夫されたお洒落なものが沢山出来上がりました。テゴ編み作りではまず、テゴの前半部分の作成手順を教わります。その後各自で、教わったところまでテゴの作成を進め、前半部分が終了した人から、後半部分の作成方法を指導開始。後半部分を各自で作成して完成です。

・地元の人とのコミュニケーション～手作業で生み出されるコミュニケーション

自分たちにとっては慣れない作業を行うため、作業手順を覚えることができず苦労しました。何度もおばさんたちに聞きながら作業を進めていきましたが、なかなかはかどりませんでした。慣れない作業に加えて、手先が器用ではない男二人が作業をしていたため、何度も同じところでつまずき、少し進めてはやり直しを何度も繰り返す形となりました。そんな自分たちを見かねて、お母さんたちは何度も声をかけてくれました。自分たちも分からないことや、気になったことは積極的に聞きました。こちらから質問することで、作業手順以外の話を聞くことができました。都会の人とは違い、こちらから話しかけると嫌な顔を全くせずに話を聞いてくださいました。質問をしたり、声をかけることをためらうことなく、積極的に話しかけることがコミュニケーションをとる上で大変重要だと思いました。



写真8：てご編みの出来栄を確認する

・苦労・感動・反省・学んだこと～伝統工芸の伝承と継承～

テゴ編みでは、まず作業手順を覚えることに苦労しました。先述したように慣れない作業をするため、なかなかはかどりませんでした。その一方で、コミュニケーションをとることはそんなに苦労しませんでした。こちらから話しかけると快く対応してくだり優しい方たちだと感動しました。さらに、作業体験を行っているため、話題がないと困ることはありません。加えて、作業に集中し、真剣に取り組んでいれば、おばあさんたちの方から話かけてくれる。作業に集中することで、分からない所や、質問したいことも出てきます。まず、作業に集中する、そうすることでコミュニケーションも円滑に行えることができると学ぶことができました。教えてくれたお



写真9：てご編みの仲間たちと楽しく作業を

ばあさん方の殆どが、自分たちもできる人に教わりながらやっていると話していました。ボケ予防になるし、少し空いた時間にやることができるのがいいそうです。

こうした話をお聞きして、なんでもそうだが、物は必要とされないと衰退していくのだと感じました。しかし、環境に良い素材で作ることができる伝統工芸が廃れていってしまうのはもったいないと思いました。

・活動の意義を振り返って

テゴ編みに参加することの意義として、作り手の少なくなった伝統工芸品の継承支援や島の女性たちのコミュニケーションを促進させる役割といったものがあげられると思います。確かにテゴ編みは、体験としては非常に面白みがあり、島の伝統工芸の歴史などを学ぶ上では大変有意義な活動であると感じました。しかし、お手伝いプログラムの観点から考えると、足を引っ張っているところもあり、必ずしもお手伝いと言えないと考えられます。プログラムの中での位置づけを再検討する必要があると感じました。

③生活文化分野：遊び・釣り

・アジ釣りから学ぶ現地での生活

郷土料理との結びつきを学び、島での遊びや日々の生活への理解を深めるために、豆の選別を一緒にお手伝いしてくれた子どもたちやそのお父さん方とアジ釣りの体験をしました。観光船乗り場としても活用されている堤防で釣りを行いました。使用した物は、普通の釣り竿と餌として小さなエビです。こちらは普段から子どもたちも行っている事だったので、今度は子どもたちが先生となって私たちに教えてくれました。

・釣りの方法—基本的なやり方と子どもたちの工夫—

1つの竿に4から5つほど釣り針が付いていて、そこに小エビを一つ一つ付けていきます。驚いたことは釣り糸を垂らすだけで、すぐに釣れてしまうことでした。私は、釣りは全く経験がなく、初心者だったので不安でいっぱいでした。しかしすぐ釣ることができたので、みんなと同じように楽しむことができました。エサの取り付け方や釣り糸を垂らした後の動かし方などを子どもたちに教わりながら時間も忘れるほど没頭してしまいました。現地の方の釣りの工夫としては、針にエサを付けるのではなく、直接海に撒いていました。このような方法でもアジが釣れたので改めて自然豊かな土地であることを認識することができました。

・学んだこと—小さな魅力でも見逃さないことの大切さ—

アジ釣りは季節ごとの作業というよりは、子どもたちの遊びの延長であるような印象を受けました。現地の人々にとっては普段からしている遊びであっても、東京に住んでいる我々にとっては非常に魅力的な体験であると感じました。このように、ちょっとしたことで



写真 10：地元の子もたちとアジ釣り。30 尾以上もの釣果があり、島の海の豊かさを実感した

も島外の人々にアピールするための魅力となることが改めてわかりました。小さなことでもその土地の魅力であるため、見逃さないことがプロジェクト成功への鍵になるのではないのでしょうか。

・今後の展開について―釣り体験のメリットと今後やってみたいこと・考えること―

先ほども述べたように、アジ釣りは釣り初心者の私でも簡単に手軽に楽しめるものでした。また、現地の子どもたちとすぐ打ち解けることもできたため、都会と島の交流という点では非常に効果的なものではないかと感じることができました。今回は海釣りのみでしたが、川釣りなども計画し体験することができればさらに良いものとなるでしょう。ただこちらも、畑仕事の体験と同様に雨が降ってしまうと難しいため、雨天時の対策を考えなければなりません。

④生活文化分野：郷土料理教室

・料理教室の意義

地域資源を利用した食文化の魅力・島の生活文化を学ぶことを掲げて、島の日常食としての郷土料理を地元のお母さん・お父さん方、子ども達と共につくり、会食をおこないました。



写真 11：島の女性たちから郷土料理を学ぶ

・メニューについて

作った料理メニューの概要を次に掲載します。

【アジフライ】

アジ(鰯)をひらき状態または3枚におろして溶き卵に漬け、パン粉をまぶして油で揚げて作る揚げ物料理です。



写真 12：アジフライ

【アジのナメロウ】

新鮮なアジだからこそ出来る料理。地元のお父さんに見事な庖丁捌きを見せてもらいました。



写真 13 : アジのナメロウ

【イモダコ】 タコとジャガイモを、砂糖、醤油、酒、水で甘じょっぱく煮ればおいしい。



写真 14 : イモダコ

【漬物（大根）】

地元の大根で地元の人がつけた漬物



写真 15 : 大根の漬物

【タコの刺身】

調理のコツは、庖丁で切れ目をたくさん入れること。醤油のアジがしみこみやすくなると共に食感もよくなる。



写真 16：タコの刺身

【サツマイモの天ぷら】

栗島のイモ類は土質のせいか、イモ類が大変おいしく育つ。ほくほくしたサツマイモをからりと揚げました。



写真 17：サツマイモの天ぷら

【汁もの】

この時期に取れる島の野菜などを入れて魚料理に合う汁物を作りました。



写真 18：汁物

・魚さばきを直に教わる－料理から生まれるコミュニケーション－

魚をさばくのは男子学生3人と島の子どもたちが担当しました。男子大学生3人のうち2人が魚をさばいたことがなく、島の方にさばき方から教わりました。

話す内容がないという状況はなく、料理中のほとんどの時間をさばき方や料理の仕方を教わっていました。そのため、コミュニケーションの取り方で困ることはありませんでした。魚をさばくことに慣れてきたら、島の伝統料理の話を聞いたりすることができました。一つの作業を何人かで共有することで、親近感がわき、会話も弾みました。

魚をさばいたことがない人がさばくと、どうしても歪な形になったり、失敗したりします。失敗することで、やり方を教えたり、笑ったりしながら進めることを行いやすくなりました。下手な人と一緒に作業をするとより盛り上がり、話が弾むことが分かりました。



写真 19：タコの下ごしらえの仕方を学ぶ



写真 20：地元の子どもたちも慣れた手つきで料理のお手伝い

・感動－島の教育力－

普段からやっているからだということですが、島の子どもたちが魚やタコをさばくことに何ら抵抗なくさばいていたことに感心しました。生の食材に触れ、自分で採ってきたものを自分で調理することで命の大切さを知ることはもちろんですが、料理のすることの大変さも知ることができます。大変さを理解することで、感謝の気持ちも強くなるのではないのでしょうか。もう一つ子どもたちを見て感心したことがあります。自分の皿にのった食べ物を残す子が一人もいなかったことです。野菜も魚もすべてきれいに食べきっていました。自然と近い環境が食育に与える影響力を感じました。

・プログラム体系化の必要性

料理教室ということで、カリキュラムほどしっかりしたものでは無いにせよ、指導手順や指導者の役割分担などはあった方がよいと思いました。ただ固定した枠組みを作り、それに当てはめていくことは、プログラムの性質上、島の雰囲気や風土になじまない気がします。しかし、ある程度体系化させ進行していかなければ、この体験を行う意味や、こちらが伝えたい思いも伝わらないという現象が起こりうるのではないかと思います。

3) モデルプログラム作成に向けた修正・課題点の抽出

試行プログラムの実践の結果、モデルプログラムの作成に向けて、次のような修正・課題の検討が必要であることが明らかとなりました。

①雨天時の対応策について

本プログラムが想定している10月～6月までの期間中は、この地域において特に天候が悪い日が多い。そのため、雨天時の代替プログラムをいかに確保するかが重要であるといえます。今回の試行プログラムでは、荒天のため特に里山・農業分野の活動を縮小せざるを得なかった。プログラム全体のバランスを考えながら雨天時でも実施可能なメニューの検討が必要です。

②お手伝いと参加・体験の区分を一島外者のかかわり方—

本プログラムは、島民と島外者による協働の島作りを志向する中で、おばあちゃん・おじいちゃんのお手伝いを通じて、島づくりに寄与していこうという意図があります。しかし実際に試行プログラムを実施した結果、お手伝いというよりは、体験・参加といった観光的要素が強い活動メニューもあることが分かりました。例えばマメの選別作業はお手伝いとしての要素が強い一方で、アジ釣りやテゴ編みなどの活動は参加・体験などの要素が大きい。

今回は悪天候のため里山や野外での農作業が出来なかったため明らかになっていないところもありますが、プログラムの活動実態に合わせてお手伝いと参加・体験との類型区別の明確化が必要であると考えられます。

③役割・機能の明確化—島民指導者のかかわり方—

島の暮らし・仕事など、本来島外者の参加を想定していない活動を基盤とした本プログラムは、島民にとっては当たり前の日常生活に属するものです。したがってどのように外部者に対して取り組みを解説したり注意点を説明したりするか意識化し検討する必要があると考えられます。例えば、今回のプログラムでは郷土料理等で調理過程において効果的なガイダンスがあるとより一層理解が進んだのではないかと感想があったが、そういったガイダンスを可能とする島民のためのマニュアルの整備も必要ではないかと考えられます。

そのため外部者と共に効果的に活動を実践していくための島民指導者向けの手引書の作成を検討する必要があると考えられます。

④準備の簡易化、生活時間に合わせた実施方策

島の日常の暮らしと生業へのお手伝いを掲げた本プログラムですが、外部者を受け入れるためにかえって負担が増えるのではないかと危惧も聞かれました。試行プログラムにおいても、島の生活時間に配慮したプログラム実施時間の検討や活動フィールドでの準備の簡素化、あるいはお手伝いに適した活動メニューの精選といった課題が浮き彫りになりました。

今後も、島の日常生活の実態にさらに寄り添うことで、準備を簡素化したり生活時間に合わせた実施方策を検討する必要があると考えられます。このことは将来的に本プログラムを島民主体の自主的運営で取組むことを見据える上でも重要な検討事項であると考えられます。

（４）首都圏におけるプレゼンテーション・プロモーション活動

試行プログラムの実施と前後して、豊島区公共施設、大正大学イベント、離島物産展等において、本調査・研究成果をプレゼンテーションするとともに、栗島の産品やサービスおよび構想中のプログラムのプロモーションにつなげるためのPR活動を行いました。

１）豊島区公共施設におけるプレゼンテーション

豊島区生涯学習施設「みらい館大明」の10周年記念文化祭において、展示・プレゼンテーションをおこないました。住民からは都市部とは異なる栗島の自然や生活文化の暮らしや日常的営みについて素朴な関心が寄せられました。またプログラムで具体的にどのような体験が出来るのか、その体験が島の保全や生業にどのようなかわりがあるのか興味をもたれた来場者もありました。

海の美しさや豊かさをぜひ体験したいという来場者が多く、プログラムの設定に当たってはこうした海分野の取り組みとの連携をどう構築するかが鍵であるあらためて考えさせられました。



写真 21：大明での展示発表



写真 22：大正大学鴨台祭での展示に見入る来場者

２）大正大学イベントにおけるプレゼンテーション

大正大学大学祭「鴨台祭」において展示・プレゼンテーションをおこなった。来場者からは栗島への地域的関心だけでなく、本研究が島づくりに具体的にどのような効果を持っているのか、また構築したプログラムをどのように運営していくのか、都市部とどのようなかわりをもたせることが出来るかなど、研究・調査の意義と内容に関する情報交換・意見交換がおこなわれる場面が見られました。

島づくりに関係する本研究・調査の立位置を常に意識していくことは、プログラムの運営主体をどのように位置づけ、育てていくかということにも関係することであり、その意味でも貴重な意見交換が出来たと受け止めています。

３）離島物産展におけるPR 池袋で開催された離島物産展「アイランダー2016」において、調査チームの学生を派遣し、栗島物産やツーリズムのPR・販売促進のお手伝いをしました。また、本研究調査で作成したモデルプログラムのPRをおこないました。栗島をテーマにするツーリズム人気投票「あわしま満喫ツアー人気投票」も実施され、本研究で作成したモデルプログラム「栗島の恵みを生み出すお手伝いツアー」は第3位となりました。

人気投票ではアンケートでは次のような意見がありました。()内は人数。

- ・島ならではの企画 (2)
- ・島民との交流がよい (1)
- ・園芸はリハビリによい (1)
- ・生の魅力に触れ文化が豊かになる (1)
- ・大人も子どもも楽しめる (1)
- ・このツアーにマグロ捌きや漁協のお仕事見学を組み込みたい (1)
- ・料理と祭りが良い (1)

以上、首都圏でのプレゼンテーション活動を通じて得られた都市住民側の意見や反響等を集約し、モデルプログラムをさらに検討し反映させ完成させていくこととしました。



写真 23: アイランダーでは学生が PR 活動を手伝った

(5) モデルプログラム作成と実施体制づくりの検討

現地調査、住民とのワークショップ、試行プログラムの実践、首都圏でのプレゼンテーション活動等、一連の取り組みによって得られた情報を基にモデルプログラムを作成し、その実施体制と事業化に向けたプロセスについて検討を行いました。

1) モデルプログラムの作成

島民・島外者協働の「お手伝い」を中心的なコンセプトとして、次のテーマ・構成内容による年間運営のモデルプログラムを作成しました。以下、作成チラシより抜粋し掲載。

①テーマ

「粟島の恵みを生み出すお手伝いツアー 粟島の魅力は「夏」だけじゃない。島のおばあちゃん・おじいちゃんたちと共に「秋」・「冬」・「春」の魅力も体験しませんか？」

粟島の恵みを生み出すお手伝いツアー

粟島の魅力は「夏」だけじゃない。
島のおばあちゃん・おじいちゃんたちと共に「秋」・「冬」・「春」の魅力も体験しませんか？

美しい海に囲まれた粟島。この海は、里山や畑でろ過されたミネラル豊かな島の沢水によって育まれています。まさに粟島のおじいちゃん、おばあちゃんたちは、長年にわたって里山の手入れを行い、畑を耕すことで、この美しい海を耕してきたといえます。
このツアーは、島の人たちとともに里山、畑、共同作業、各種手仕事など島伝統の暮らしのお手伝いを通じて、人と自然を元気にしていくプログラムです。

・畑

粟島の畑作業は素朴な道具を用いてきめ細かに行う伝統農法です。おばあちゃんとともに海が見えるあかぜの気持ちいい段々畑で、伝統野菜の栽培など季節ごとの農作業を楽しめます。

・共同作業

島の人たちは力を合わせて生業の道を守ってきました。海苔採りのための磯道整備などのお手伝いとお交流を通じて、粟島を生きる暮らしの文化に触れます。

・里山

粟島の里山は山菜の宝庫。春は数多くの山菜採りが楽しめます。秋は島の伝統産業だった真竹(マダケ)の手入れ。伝統的な方法によって竹林を整備し豊かな里山を再生させます。

・郷土料理と手仕事

畑や里山の恵みを料理に。島のおばあちゃんたちの手料理を一緒に学び試食します。また、カッパなどの島の植物を使った島伝統の「テゴ編み」なども体験します。

・伝統行事

島には100近い年中行事が存在しています。その中から島外の方も一緒に取り組める年中行事を5つ厳選。お手伝いプログラムと共に島の人との交流を深めます。

島外者もお手伝いできる行事

- ①乗り初め漁祭(1月11日)
漁師の祭り
- ②七夕(8月6日)
舟を流す
- ③盆踊り(8月13・14日)
事前練習参加者は、太鼓・うたいも可能
- ④釜谷六所神社祭礼(10月8日)
竹灯籠作り
- ⑤八所神社祭礼(10月26・27日)
灯籠やのぼりを立てたり、神輿を担ぐ

スケジュール

<1日目>
昼：粟島港到着 昼食とレクチャー
午後(プログラム1)
里山、畑、共同作業から季節に応じて選択
※雨天時はテゴ編み作り
夕(プログラム2)
郷土料理教室・会食

<2日目>
午前(プログラム3)
里山、畑、共同作業から季節に応じて選択
※雨天時はテゴ編み作り
乙姫の湯(温泉)入浴
昼：昼食・出発準備
午後：粟島港出港

持ち物・服装等
野外活動に適した服装(長袖長ズボン)、エプロン(郷土料理教室)帽子、タオル、入浴道具等

図 4：お手伝いプログラムの PR チラシ

②プログラム趣旨

美しい海に囲まれた粟島。この海は、里山や畑でろ過されたミネラル豊かな島の沢水によって育まれています。まさに粟島のおじいちゃん、おばあちゃんたちは、長年にわたって里山の手入れを行い、畑を耕すことで、この美しい海を耕してきたといえます。

このツアーは、島の人たちとともに里山、畑、共同作業、各種手仕事など島伝統の暮らしのお手伝いを通じて、人と自然を元気にしていくプログラムです。

③プログラム構成内容

・畑

粟島の畑作業は素朴な道具を用いて行う伝統農法です。おばあちゃんとともに海が見えるしおかぜの気持ちいい段々畑で、伝承野菜の栽培など季節ごとの農作業を楽しめます

・里山

粟島の里山は山菜の宝庫。春は数多くの山菜採りが楽しめます。秋は島の伝統産業だった真竹（マダケ）の手入れ。伝統的方法によって竹林を整備し豊かな里山を再生させます。

・伝統行事

島には 100 近い年中行事が存在しています。その中から島外の方も一緒に取組める年中行事を 5 つ厳選。お手伝いプログラムと共に島の人との交流を深めます。

・共同作業

島の人たちは力を合わせて生業の道を守ってきました。海苔採りのための磯道普請などのお手伝いと交流を通じて、粟島を生きる暮らしの文化に触れます。

・郷土料理と手仕事

畑や里山の恵みを料理に。島のおばあちゃんたちの手料理と一緒に学び試食をします。また、カツラなどの島の植物を使った島伝統のかご「テゴ編み」なども体験します。

・島外者もお手伝いできる行事

乗り初め漁神楽（1 月 11 日）漁師の祭り

七夕（8 月 6 日）舟を流す

盆踊り（8 月 13・14 日）事前練習参加者は、太鼓・うたいも可能

釜谷六所神社祭礼（10 月 8 日）竹灯籠作り

八所神社祭礼（10 月 26・27 日）灯籠やのぼりを立てたり、神輿を担ぐ

④モデルスケジュール等

・1 日目

昼：粟島港到着 昼食とレクチャー

午後：（プログラム 1）里山、畑、共同作業から季節に応じて選択※雨天時はテゴ編み作り

夕：（プログラム 2）郷土料理教室・会食

・2 日目

午前：（プログラム 3）里山、畑、共同作業から季節に応じて選択※雨天時はテゴ編み作り

乙姫の湯（温泉）入浴

昼：昼食・出発準備

午後：粟島港出港

・持ち物・服装等 野外活動に適した服装（長袖長ズボン）、エプロン（郷土料理教室）帽子、タオル、入浴道具等

2) 実施体制と事業化へ向けた検討

①実施体制ー島民と島外者が協働する仕組みづくりの構築ー

モデルプログラムの実施のためには、受け入れ先である島民側の組織体制整備が必要です。島の恒常的な人手不足の事情を考慮に入れると、新規に組織を立ち上げるというよりは既存組織を活かしながら、住民の日常生活の中で自然と取組める方策が求められます。本検討では、プログラムを団体受け入れのものと個人受け入れのものの2つに区分し、組織的に対応するものと民宿等で個別に対応するものとに分類し対応する案など検討を行いました。今後、行政、自治会、観光協会、各種島民団体などの関連団体との効果的な情報交換と実施に向けた連携体制の構築が求められます。

また、本プログラムは事前の学習・情報提供が重要であるという性質をもっているため都市部側でのPR・プロモーション及び事前学習活動等を提供できる組織団体の育成が不可欠であると考えられます。粟島が今後プログラムを運営するにあたって都市部からの支援体制を検討した結果、本研究にかかわった学生・教員を中心に「離島と都市を結ぶ地域づくり学習研究会」を結成しました。また、起業志向を持つ学生を中心に本取り組みを支えることに関連した事業型NPO及びベンチャービジネスの立ち上げ準備もおこなっています。

②事業化に向けたプロセス取り上げる季節・分野ごとの試行実践の必要性

試行プログラムでは11月中旬の時期にわずかな活動しか行えなかったため、事業化に向けた実施データが不足している状況です。他の季節や分野ごとの試行実践が必要不可欠であり、十分な試行結果を踏まえて総合的にモデルプログラムの事業化に向けたプロセスを検討していく必要があると考えられます。

4. 調査研究の成果について

今回の研究調査活動により、漁業や観光等を中心とする従来の地域づくりの視点に加えて、次の新たな視点を盛り込むことができたことが大きな成果といえます。

(1) 里山・農業・生活文化への着眼

これまで、粟島浦村において、特に島外者の受け入れを前提とした地域振興方策は、観光分野や漁業分野（海資源の活用）といった分野を主とするものでした。

本研究では、島民と島外者が協働し共に取組める島づくり活動を創出するという視点から調査を行うことで、これまであまり着目されてこなかった島の里山や農業、生活文化分野での協働活動創出の可能性を提示することができました。

これらの分野は観光・漁業などの島の主力産業を支える重要な下部構造だといえます。例えば、観光・漁業の貴重な資源である島周辺海域の環境は、島内の里山・農地の健全な保全と密接な関係があります。そして里山・農地環境は島民の日常的生活文化の営みによって保全・維持されているものです。しかし近年の急速な人口減によりこれらの営みを継続していくことが困難な状況となっています。

以上を踏まえて、里山・農業・生活文化をテーマとして、島外者参加による協働活動を促進し、その維持・保全・継承と地域活性化につなげるための具体的なプログラムを提示することができました。

（２）高齢者を軸とした営みに光を当てる

里山・農業・生活文化は、現在島の高齢者によって主として担われています。今回の取組みにより、島外者との協働という側面からあらためて島の高齢者の暮らしと営みに光を当てることができました。「島のお手伝い」をテーマに掲げて、高齢者と協働することで島の恒常的な課題となっている人手不足を補完するとともに、伝統的な知恵と技術を継承し再生・活性化へ導くための道筋を提示することができました。

（３）観光の枠を超えた都市部住民の参加協働・連携方策の検討

従来、栗島浦村では「島外者」＝「観光客」としての位置付けがほとんどでした。本研究により、観光という枠組みを超えた新たな島づくりの参加協働の形態を構想することができました。また、首都圏での複数にわたるプレゼンテーション・プロモーション活動を通じて、都市側のニーズとのマッチングについても検討できたことも大きな成果であると考えられます。さらに本調査参加学生を中心にして「離島と都市を結ぶ地域づくり学習研究会」を立ち上げるなどの新たな動きも展開しています。

（４）人材育成・担い手育成につながる新たな事業展開の可能性

モデルプログラムとして「島のお手伝い」を掲げることで、島内外の新たな人材・担い手育成の方向性を提示することができました。島の自然・文化・伝統を踏まえながら、その維持・保全・継承、さらに新たな交流ビジネス事業（島の教育・学習機能を活かしたツーリズム等）の可能性を示唆することができました。これらは島の日常の暮らしの強みを活用するものであり、島外者にとって将来的な移住・定住のインセンティブにつなげることが期待できると考えています。

５．まとめ - 連携協働を促進し地域の価値をつなぐ学びのために -

栗島浦村での調査研究では、住民とのフィールドワークを通じて、島民と島外者がともに協働し島づくりに寄与するための取組として、里山・農業・生活文化に光を当て、高齢者を軸に「島のお手伝い」という具体的なキーワードを引き出しプログラム化することができました。今後は、観光・漁業分野等既存の島の活動との効果的な連携の仕組みづくりを見据えながら、本研究で作成したコンテンツを具体的に実践にしていくためのさらなる試行の積み重ねと事業化に向けたプロセスの構築が求められます。

今後とも栗島の貴重な自然・文化・伝統、そして人と人をつなぐための挑戦を続けていきたいと考えています。それは次世代に向けて地方地域の価値を再発見・再創出する営みであるとともに、都市地域側の課題や暮らしの見直しとも響きあうものだからです。私たちのフィールドでの学びが地方と都市をつなぎ、地域の価値を見出し課題を解決することの一端を担うことができればと願っています。

おわりに - 課題解決型学習を超えて、地域に寄り添い、学び、創る実践を -

幅野裕敬

・個人的次元 - キャリア教育実践と社会教育・生涯学習論の交差 -

これまで社会教育・生涯学習に直接かかわりのなかった私ですが、縁あって本冊子の編集にかかわらせていただき、また締め言葉の寄稿することになりました。このこと自体が社会教育・生涯学習論の間口の広さを感じているところです。

私は、本報告第8章で取り上げた栗島しおかぜ地域共生プログラムの構築研究（以下、栗島プログラム）に関わらせていただきました。元来、私は、教育NPOを設立し、人材育成を含む、キャリア教育を実践したいと考えていました。そのためのNPO活動・事業の内容や運営方針を決めているころ、本研究の担当教員である出川真也先生と出会いました。NPOの活動事業内容や運営方針に関して相談を重ねていくうちに、私自身が行おうとしている人材育成やキャリア教育に、社会教育・生涯学習が参考になるのではないかと考えました。

このことがきっかけで当初、自己の活動とは直接関係はなかったものの栗島プログラムに参加させていただくことになったわけです。私にとって大変楽しい体験となりました（写真参照）。奇しくも来年度以降はこの栗島プログラムが栗島のキャリア教育活動とも様々な形で関係しそうだとのこと。社会教育・生涯学習がまさに様々な領域へと展開する入り口の役割を果たすものであるということを実感させていただく貴重な経験となりました。



写真：栗島の伝統民具「てご」編み体験で、戯れる筆者（左）

・各地の学習活動から考えること - フィールド報告の振り返り -

さて、本冊子の内容は、地域づくりの社会教育・生涯学習を掲げて、全国各地で受講学生が意欲的にそしてやや実験的に様々な挑戦を試みたものと言えるでしょう。喜びと悩み、驚きと感動が学生を目線から赤裸々に語られていることから今後続く後輩達にとっても大変興味深い内容となっているのではないのでしょうか。以下に簡単ですが、振り返りの意味もこめて読後感想を述べてみたいと思います。

生涯学習施設実習講座のメンバーが事前研修として取り組んだ秦野上地区の地域計画づくりの取組（1章）では、住民と共に調べ、考え、時に新しい要素を地域外から取り入れて検討するといったファシリテーションの基本を実践しました。地域を考えるための相互学習をいかに促進していくか、共有できる地域状況の見える化をどのように図るかといった、調査の基本手法としても興味深い視点が打ち出されているものと思います。

山本（2章）は、ニーズというものは、「把握」するだけでなく、「作っていくもの」という視点を打ち出していることが新鮮です。社会教育・生涯学習の実践が、住民ニーズに単にサービス提供という形で応じるだけにとどまらず、求められるニーズを創出し社会的変革をも志向する積極的な役割を担うものであることを生涯学習施設の現場から見事に引き出

しているものとして注目されます。この意味で小池（3章）は、参加者の積極性の創出という点で山本と通底するものがあります。地域の生涯学習活動ではなにより参加者の積極性が重要であり、意欲的な参加者が増えるような取り組みを行っていくこと、雰囲気を作っていくことが大事だということが講座や文化祭といった地域学習活動の中で具体的に引き出されています。

土屋（4章）は、都会の幼稚園や保育園で、大地がやっていることが少しでもできるようになれば、子どもたちの可能性を広げていくことが可能になるだろうということを考えさせられます。都会で行うためには、どのようなハードルがあり、どのような準備が必要なのかを考えていくことが重要です。そのためにも本稿で触れられている通り今後都市地域と地方地域を教育の相互交流が求められるのではないかと思います。

内田（5章）は、シニア層の取組にスポットを当てたわけですが、地域で活動するにあたり、コーディネーターとしての仕事で最も重要なことの一つとして、地域住民の合意形成をどう形成していくか、そのための学びのプロセスをいかに構築していくかといった点で、「おやじたち」の言葉から把握している点で興味深いものと言えるでしょう。

土方（6章）や佐原（7章）は、特に実習学生として現場に入って学ぶ上で、地域の方とのコミュニケーションと信頼関係の構築が欠かせないことが実感される内容です。外部者が、地域に入っていくにあたり、地域に対する作法やある種の謙虚さ、そして現場の思いと自分の志向性とのギャップなど直面した悩みが率直に語られています。実習そのものは当初の想定していた成果を収められなかったものの、それに代わる社会教育・生涯学習のより本質的な知見と実感を得ることができたのではないかと感じられます。

社会教育・生涯学習講座を中心に多様な分野の学生と取り組んだ栗島プロジェクト（8章）では、地域の力を生み出していくために、地域住民と共に行った調査や試行実践（これらも地域学習活動といえるものでしょう）を積み重ねることの重要性が分かります。本プロジェクトの地域の学習活動により従来島で着目されなかった要素に光が当てられ、新たな活動や生業への展開の萌芽を見ることになるわけです。ここにこそ地域づくりの社会教育・生涯学習の真骨頂があるのではないかと思います。

・地域参加する上で大切なこと - 寄り添い、リスペクトすることから始まる学び -

フィールドワークで最も重要なことは、第7章で佐原が言うように、外部者としての目線の違いを意識しながらも地域に「寄り添うこと」ではないでしょうか。地域を活性化しよう、とか、地域に貢献しようと考え始めるとき、その地域の課題を発見することから始めがちです。しかし、地域に寄り添うことを忘れて考えた外部目線だけの思いつきの「課題」は、地域の人にとって課題だと考えていない場合があります。地域で課題だと思っていないものを外の価値観だけで課題だと高飛車に決めつけることは的外れであり、時に高圧的で地域を抑圧したり地域の力を奪うものとなる可能性さえあると思われます。課題を見つけ、地域のあり方を変えていくことだけが、地域創生のすべてではないのではないのでしょうか。

もちろん課題発見から解決へ向けたプロセスを意識して論理的思考を持つことが大切なことは言うまでもありません。しかし、まずいかに地域に寄り添えるか、コミットできるか、そこに専念することの方が重要ではないのでしょうか。実習の短い期間で地域に実際に寄り添い共に何がしかの取組を実践することは困難なことです。しかし、そのことで地域の価値

を見出すことができ、そのリスペクトの上に立つことで地域の課題も自然と見えてくるようになるのではないのでしょうか。その時初めて地域の方々が抱えている課題が会話の中でこぼしていつてくれるようになるかもしれません。本書は全体を通じて、地域社会を創る社会教育・生涯学習に携わる者としてまず地域に寄り添う努力が大切であるということを物語っているように思えます。

・学生としてメッセージと期待 - フィールドでの学びと感動体験を -

今後地域の学びにかかわるフィールドワークにチャレンジしようとする学生たちにとって本書は、事前の準備からフィールド先での実践（現場で直面する悩みの数々を含む）、戻ってからの取りまとめ方法について、参考になる知見の数々が具体的に提示されています。これらを把握しておくことで、フィールド先で学べるものがより増えることと思います。先輩方の失敗例（というよりは悩み苦闘した事績といったほうが適切でしょう）や成功例を踏まえ、ぜひともフィールドで充実した学びを行い、地域の方々との感動を生み出してもらいたいと願っています。

地域づくり学習のフィールドワーク手引き

-平成 27 年度生涯学習施設実習報告-

発行日 平成 27 年 3 月 31 日

発 行 大正大学社会教育主事課程

〒170-8470 東京都豊島区西巣鴨 3-20-1

Tel03 (3918) 7311 (代表)

印 刷